

府 中 遺 跡

—都市計画道路大阪岸和田南海線街路築造事業に伴う発掘調査—

平成 30 年 3 月

大阪府教育委員会

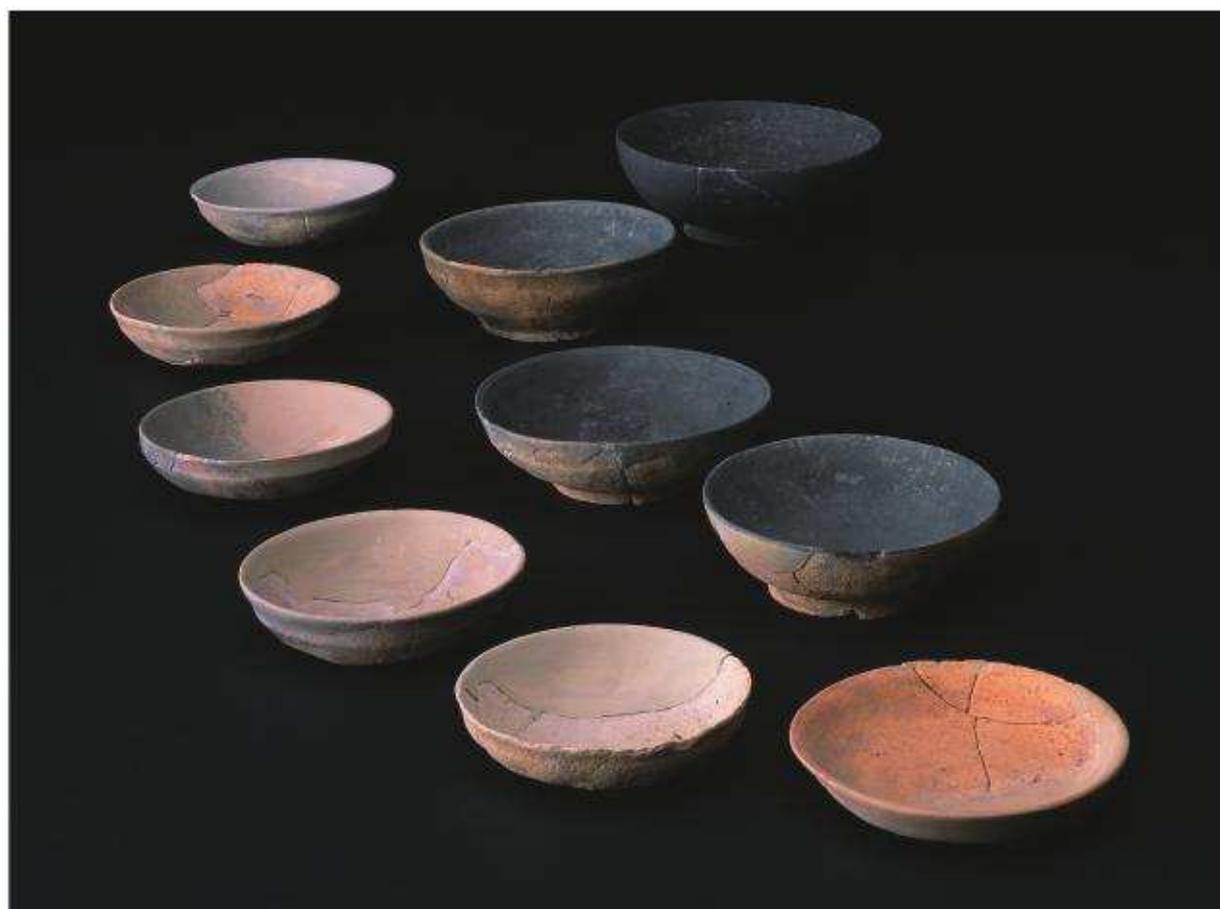
府 中 遺 跡

—都市計画道路大阪岸和田南海線街路築造事業に伴う発掘調査—

大阪府教育委員会



a. A・B・C区 流路232出土土器



b. D・E区 土坑396出土土器

序 文

府中遺跡は和泉市の北西部に位置し、同市府中町を中心に東西約1km、南北1.2kmの範囲にわたる遺跡で、縄文時代から近世に至るまで連綿と人々が生活を営んできたことが知られています。

大阪府教育委員会では、都市計画道路大阪岸和田南海線の街路築造事業に伴い、平成17年度から順次、府中遺跡、和泉寺跡の発掘調査を実施してきました。これまでの調査によって発見された、奈良時代の人名などの文字を線刻した瓦、弥生時代から古墳時代にかけての流路から出土した多量の土器などは、特筆される調査成果であり、注目を集めてきました。これらについては既に調査報告書を刊行しているところです。

本書で報告する調査成果は、平成27～28年度に実施したものです。古墳時代前期から中期にかけての建物跡、流路から出土した多量の土器、平安時代の建物跡、中世の土坑や溝など、各時代の遺構、遺物が多数発見され、府中遺跡ひいてはこの地域の歴史を理解するうえで欠かすことのできない成果を得ることができました。

今後この調査成果を積極的に普及、活用につなぐことで、地域の歴史を学び、さらには文化財の保護意識の醸成に繋げていくことができれば幸いです。

最後に、発掘調査の実施にご協力いただきました関係各位ならびに地元の皆様に深く感謝するとともに、今後とも本府の文化財保護行政へのご理解とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成30年3月

大阪府教育庁
文化財保護課長 森屋 直樹

例 言

1. 本書は、都市計画道路大阪岸和田南海線街路築造事業に伴い、平成 27～28 年度に実施した、和泉市府中町五丁目所在、府中遺跡（調査番号 15017、16001）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、大阪府都市整備部から依頼を受け、大阪府教育委員会が実施した。
3. 発掘調査、遺物整理および本書作成に要した経費は、大阪府都市整備部が負担した。
4. 現地調査は、平成 27～28 年度に本府教育庁文化財保護課調査事業グループ 主査 西川寿勝（27 年度）、専門員 岩瀬透、松岡良憲を担当者として実施した。
5. 整理作業は、平成 28～29 年度に、同課調査管理グループ副主査 藤田道子、専門員 阪田育功を担当者として実施した。
6. 発掘調査にあたっては、写真測量を株式会社アコード（A・B・C 区および D・E 区）、株式会社エムズ（F・G 区）にそれぞれ委託して実施した。撮影フィルムは同社において保管している。
7. 本書に掲載した遺構写真の撮影は調査担当者がおこない、遺物写真は有限会社阿南写真工房に委託した。
8. 鉄製品の保存処理は、公益財団法人元興寺文化財研究所に委託した。
9. 出土品および記録資料は、大阪府教育委員会で保管している。
10. 本書の執筆は、遺構については岩瀬、松岡が行い、調査事業グループ主査 岡田 賢が補足、それ以外の筆執、および編集を行った。
11. 現地調査、遺物整理および本書の作成にあたっては、下記の機関からご協力を賜った。記して謝意を表する次第である（順不同・五十音順）。
和泉市教育委員会、大阪府都市整備部風土木事務所、府中町中央自治会
12. 本書は 300 部作成し、一部あたりの単価は 1,321 円である。

凡 例

1. 遺構名は、三桁の通し番号と遺構種別名の組み合わせによって検出順に付した。通し番号は調査全体で付した。したがって遺構種別、時期ごとにまとまっていない。
2. 遺物番号は、図ごと、図版ごとに 1 からの通し番号を付している。図版には図番号と対比できるように、〈 〉で図番号を補助表記した。
3. 土色および遺物の色調については、『新版 標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄 2002 年度版）に準拠した。
4. 本書で用いる座標値は世界測地系（国土地理院座標第 VI 系）に基づき、方位針は座標北を示す。また水準値は、T.P. 値（東京湾平均海面値）を用い、本文および挿図中では T.P. + ○m と表記する。
5. 遺物実測図の断面は、須恵器を黒塗りとし、その他の陶磁器、瓦器、黒色土器、土師器、弥生土器、石器等を白抜きとした。
6. 参考文献は本文末に列記した。

府 中 遺 跡

- 都市計画道路大阪岸和田南海線街路築造事業に伴う発掘調査 -

序文・例言・凡例

目次

第1章 調査経過と調査方法	1
第1節 調査経過	1
第2節 調査方法	2
第2章 地理的・歴史的環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	7
第1節 A・B・C区の調査	7
第1項 層序	
第2項 検出された遺構と遺物	
(1) 第1面 1. 近世の遺構 2. 中世の遺構 3. 古代以前の遺構 4. 遺物	
(2) 第2面	
(3) 第3面	
(4) 包含層出土遺物	
(5) 小結	
第2節 D・E区の調査	39
第1項 層序	
第2項 検出された遺構と遺物	
(1) 第1面 1. 古代～中世の遺構 2. 各遺構の出土遺物	
(2) 第2面 1. 古代の遺構 2. 各遺構の出土遺物	
(3) 包含層出土遺物	
(4) 小結	
第3節 F・G区の調査	73
第1項 層序	
第2項 検出された遺構と遺物	
(1) 中世の遺構	
(2) 小結	
第4章 総括	79
(1) 中近世以降	
(2) 古代	
(3) 古墳時代	

参考文献

付表目次

表 1 府中遺跡における既往の調査	6
-------------------	---

挿図目次

図 1 調査地位置図	1
図 2 調査区配置図	2
図 3 周辺の遺跡	4
図 4 既往の調査区	5
図 5 府中遺跡における既往の調査地点	6
図 6 A・B・C区 東壁断面図	9・10
図 7 A・B・C区 全体平面図	11・12
図 8 A・B・C区 近世溝 平面図・断面図	13
図 9 A・B・C区 近世溝 出土遺物	13
図 10 土坑 006・007、溝 008 平面図・断面図	14
図 11 溝 014・015・016・017・土坑 020 平面図	14
図 12 溝 014・015・016・017・土坑 020 断面図	15
図 13 溝 028・030・032・土坑 031 等 平面図	16
図 14 溝 028・030・032 等 断面図	16
図 15 土坑 042・043 断面図	17
図 16 溝 089・090・091 平面図・断面図	18
図 17 溝 092・093・094・095・097・099 平面図・断面図	19
図 18 溝 100・121 平面図・断面図	20
図 19 溝 103・104・107・108・111 平面図・断面図	21
図 20 溝 114・115・119 平面図・断面図	22
図 21 土坑 122 平面図・断面図	22
図 22 溝 139・140、土坑 137・152・155 平面図	23
図 23 土坑 166・171 平面図・断面	23
図 24 溝 180 平面図	23
図 25 掘立柱建物 1 平面図・断面図	25
図 26 落ち込み 085 平面図	26
図 27 A・B・C区 溝出土遺物	27
図 28 A・B・C区 土坑等出土遺物	27
図 29 土坑 220・221・222、溝 223 平面図・断面図	28
図 30 竪穴建物 228 平面図・断面図・遺物出土状況図	29
図 31 竪穴建物 228 カマド 平面図・断面図	30
図 32 竪穴建物 228 出土遺物	30
図 33 自然流路 232 断面図	31
図 34 自然流路 232 平面図	31
図 35 自然流路 232 出土遺物・1	32
図 36 自然流路 232 出土遺物・2	34

图 37	A·B·C区包含层 出土遗物·1	35
图 38	A·B·C区包含层 出土遗物·2	36
图 39	A·B·C区包含层 出土遗物·3	36
图 40	A·B·C区包含层 出土遗物·4	37
图 41	D·E区 东壁断面图	41·42
图 42	D·E区 全体平面图·1	43·44
图 43	D·E区 全体平面图·2	45·46
图 44	沟 346~348·358~360·362·363 断面图	47
图 45	沟 340 平面图·断面图	47
图 46	沟 345·361·357 断面图	47
图 47	D·E区第1面 遗构出土遗物	50
图 48	沟 301 断面图	51
图 49	沟 354 平面图·断面图	51
图 50	掘立柱建物 1 平面图·断面图	52
图 51	掘立柱建物 2 平面图·断面图	52
图 52	掘立柱建物 3 平面图·断面图	53
图 53	掘立柱建物 4 平面图·断面图	54
图 54	掘立柱建物 5 平面图·断面图	55
图 55	栅 1·栅 2 平面图·断面图	56
图 56	土坑 308·309 平面图·断面图	57
图 57	土坑 410·430·447·451·453·456·458·476·483·496·505 平面图	58
图 58	土坑 410·430·447·451·453·456·458·476·483·496 断面图	59
图 59	土坑 393·399 平面图·断面图	59
图 60	土坑 397·473 平面图·断面图	60
图 61	土坑 433·396 平面图·断面图	61
图 62	土坑 389·395 平面图·断面图	61
图 63	土坑 494 平面图·断面图	61
图 64	D·E区第2面 遗构出土遗物·1	63
图 65	D·E区第2面 遗构出土遗物·2	64
图 66	D·E区第2面 遗构出土遗物·3	64
图 67	D·E区第2面 遗构出土遗物·4	65
图 68	D·E区第2面 遗构出土遗物·5	66
图 69	D·E区第2面 遗构出土遗物·6	68
图 70	D·E区第2面 遗构出土遗物·7	68
图 71	D区 包含层出土遗物·1	68
图 72	D区 包含层出土遗物·2	69
图 73	D区 包含层出土遗物·3	70
图 74	D区 包含层出土遗物·4	71
图 75	E区 包含层出土遗物	72
图 76	F·G区 西壁断面图	74
图 77	F·G区 全体平面图	75
图 78	F·G区 遗构断面图	77
图 79	F·G区 出土遗物	77

巻頭図版目次

巻頭図版 府中遺跡出土遺物

a. A・B・C区 流路 232 出土土器

b. D・E区 土坑 396 出土土器

図版目次

図版 1 府中遺跡 A・B・C区 俯瞰

図版 2 府中遺跡 A・B・C区 遺構 (1)

a. A区 第1面 (南から)

b. B・C区南部 第1面 (北から)

c. A区 溝 001・002 (北から)

図版 3 府中遺跡 A・B・C区 遺構 (2)

a. A区 溝 001 (左)・溝 002 断面 (南東から)

b. B区 溝 034 断面 (南から)

c. B区 溝 105 (南から)

d. A区 畦畔 083 (東から)

e. A区 土坑 006 断面 (南から)

f. A区土坑 007 断面 (東から)

g. A区 溝 013・014 断面 (東から)

h. A区 溝 015・016 断面 (東から)

図版 4 府中遺跡 A・B・C区 遺構 (3)

a. A区 土坑 007～溝 017 付近 (北西から)

b. A区 溝 021～028 付近 (北西から)

e. A区 土坑 54・56・58 付近 (南西から)

図版 5 府中遺跡 A・B・C区 遺構 (4)

a. A区 土坑 33・69 付近 (南から)

b. A区 土坑 058 底面の凹凸 (北から)

c. B・C区南部 掘立柱建物 1 (北東から)

図版 6 府中遺跡 A・B・C区 遺構 (5)

a. A区 土坑 20 (南東から)

b. A区 溝 028 (右)・029 (南東から)

e. A区 溝 030 (東から)

d. A区 土坑 031 断面 (北から)

e. A区 溝 030 (左)・032 (東から)

f. A区 土坑 042 (西から)

g. A区 土坑 043 (東から)

h. A区 自然河川 084 断面

図版 7 府中遺跡 A・B・C区 遺構 (6)

a. B・C区南部 溝 097 (西から)

b. B・C区南部 溝 100 断面 (北西から) c. B・C区南部 溝 121 (北西から)

d. B・C区南部 溝 104 断面 (南から)

e. B・C区南部 溝 115 断面 (西から)

f. B・C区南部 溝 099 断面 (南西から)

g. B・C区南部 溝 092 (西から)

h. B・C区南部 溝 093 断面 (西から)

図版 8 府中遺跡 A・B・C区 遺構 (7)

a. B・C区南部 土坑 122 (西から)

b. B・C区南部 土坑 137 (左)・138 断面 (北から)

c. B・C区南部 溝 139 断面 (北西から)

d. B・C区南部 土坑 152 断面 (南から)

e. B・C区南部 土坑 155 断面 (西から)

f. B・C区南部 溝 180 中央部断面 (西から)

g. B・C区南部 土坑 220 断面 (西から)

h. B・C区南部 土坑 222 断面 (西から)

図版 9 府中遺跡 A・B・C区 遺構 (8)

a. B・C区南部 第2面 (西から)

b. B・C区南部 土坑 221～224 付近 (北東から) c. B・C区南部第3面

図版 10 府中遺跡 A・B・C区 遺構 (9)

a. B・C南区 竪穴建物 228 掘削状況 (北から)

b. B・C南区 竪穴建物 228 遺物出土状況・1 (北東から)

c. B・C南区 竪穴建物 228 遺物出土状況・2 (北から)

d. B・C南区 竪穴建物 228 遺物出土状況・3 (南西から)

d. B・C南区 竪穴建物 228 カマド検出状況 (南から)

図版 11 府中遺跡 A・B・C区 遺構 (10)

a. B・C南区 竪穴建物 228 断面 (南西から)

b. B・C南区 流路 232 (北東から)

c. B・C南区 流路 232 遺物出土状況・1 (北西から)

d. B・C南区 竪穴建物 228 遺物出土状況・2 (北から)

e. B・C南区 流路 232 遺物出土状況・3 (西から)

f. B・C区南部 流路 232 遺物出土状況・4 (東から)

図版 12 府中遺跡 D・E区 俯瞰 遺構 (1)

a. D・E区 遺構面全景 (合成・上が北東)

b. D区 溝 304 (西から)

c. D区 溝 346 断面 (南から)

図版 13 府中遺跡 D・E区 遺構 (2)

a. D区 第1面 (南西から)

b. E区 第1面 (南西から)

c. D区 溝 340 (手前)・溝 344・落込み 343 (奥) (南西から)

- 図版 14 府中遺跡 D・E区 遺構 (3)
 a. E区 溝 359 断面 (東から) b. E区 溝 360 断面 (南西から) c. E区 溝 361 (南西から)
 d. E区 溝 357 (東から) e. E区 土坑 351 断面 (東から) f. E区 土坑 352 断面 (東から)
 g. E区 土坑 352 遺物出土状況 (北から) h. E区 土坑 353 断面 (東から)
- 図版 15 府中遺跡 D・E区 遺構 (4)
 a. E区 土坑 353 遺物出土状況 (西から) b. E区 溝 345 断面 (南西から) c. D区南半部 第2面 (北西から)
 d. D区南半部 第2面遺構検出状況 (南西から) e. E区 第2面 (南西から)
- 図版 16 府中遺跡 D・E区 遺構 (5)
 a. E区中央部 第2面遺構検出状況 (南東から) b. D区 溝 301 (西から) c. E区 溝 305・306 (手前) (北西から)
 d. E区 溝 354 (西から) e. D区 土坑 308 断面 (東から) f. E区 溝 354 遺物出土状況・1 (北西から)
 g. E区 溝 354 遺物出土状況・2 (北西から)
- 図版 17 府中遺跡 D・E区 遺構 (6)
 a. D・E区 掘立柱建物群 (俯瞰) b. 掘立柱建物1ピット307 c. 掘立柱建物1ピット311
 d. 掘立柱建物1ピット313
- 図版 18 府中遺跡 D・E区 遺構 (7)
 a. E区 掘立柱建物4 (南東から) b. 掘立柱建物2ピット455 c. 掘立柱建物2ピット477 d. 掘立柱建物2ピット461
 e. 掘立柱建物3ピット320 f. 掘立柱建物3ピット337 g. 掘立柱建物4ピット407
 h. 掘立柱建物4ピット319 (左)・320 i. 掘立柱建物4ピット406 j. 掘立柱建物4ピット405 k. 掘立柱建物5ピット369
 l. 掘立柱建物5ピット387 m. 掘立柱建物5 南東基盤層上遺物出土状況
- 図版 19 府中遺跡 D・E区 遺構 (8)
 a. D区 土坑 309 (東から) b. E区 土坑 410 断面 (南東から) c. E区 土坑 451 断面 (南東から)
 d. E区 南部土坑 453 (東から) e. E区 土坑 476 断面 (南から) f. E区 土坑 483 断面 (南東から)
 g. E区 土坑 496 遺物出土状況・1 (東から) h. E区 土坑 496 遺物出土状況・2 (南東から)
- 図版 20 府中遺跡 D・E区 遺構 (9)
 a. E区 土坑 505 (北から) b. E区 土坑 447 断面 (東から) c. E区 土坑 397 断面 (東から)
 d. E区 土坑 473 断面 (東から) e. D・E区 土坑 433 遺物出土状況 (西から) f. E区 土坑 396 遺物出土状況・1 (北東から)
 g. E区 土坑 396 遺物出土状況・2 (北西から) h. E区 土坑 389 断面 (南東から)
- 図版 21 府中遺跡 F・G区 俯瞰 遺物 (1)
 a. F・G区 遺構面全景 (合成・上が北東) b. G区 溝 570 断面 (南東から) c. G区 溝 650 断面 (南東から)
 d. F区 方形落込み 640 南半部断面 (南東から) e. G区 土坑 600 断面 (南東から)
- 図版 22 府中遺跡 F・G区 遺物 (2)
 a. G区 北半部遺構掘削状況 (北西から) b. F区 溝 601 断面 (南東から) c. G区 溝 577 断面 (南東から)
 d. G区 溝 588 (右)・589 断面 (南東から) e. G区 溝 577 断面 (南東から) f. G区 溝 566 (右)・567 断面 (南東から)
 g. G区 土坑 562 断面 (北西から)
- 図版 23 府中遺跡 A・B・C区 遺物 (1) A・B・C区溝出土遺物
- 図版 24 府中遺跡 A・B・C区 遺物 (2)
 a. B区 落込み 085 出土遺物 b. B区 土坑・落込み等出土遺物
- 図版 25 府中遺跡 A・B・C区 遺物 (3) 竪穴建物 228 出土遺物
- 図版 26 府中遺跡 A・B・C区 遺物 (4) 流路 232 出土遺物・1
- 図版 27 府中遺跡 A・B・C区 遺物 (5) 流路 232 出土遺物・2
- 図版 28 府中遺跡 A・B・C区 遺物 (6) 流路 232 出土遺物・3
- 図版 29 府中遺跡 A・B・C区 遺物 (7) 流路 232 出土遺物・4
- 図版 30 府中遺跡 A・B・C区 遺物 (8) 包含層出土遺物 (2・3層)
- 図版 31 府中遺跡 A・B・C区 遺物 (9)
 a. 包含層出土遺物 (6層) b. 包含層出土遺物 (8・9層) c. 包含層出土遺物 (10層)
 d. 包含層出土遺物 (10～12層)・1 e. 包含層出土遺物 (10～12層)・2
- 図版 32 府中遺跡 A・B・C区 遺物 (10) 包含層出土遺物 (8～9層)

- 図版 33 府中遺跡 A・B・C区 遺物 (11)
 a. 包含層出土遺物 (10～12層) b. 石器・石製品 c. 鉄製品
- 図版 34 府中遺跡 D・E区 遺物 (1) E区 溝出土遺物
- 図版 35 府中遺跡 D・E区 遺物 (2)
 a. E区 落込み 343 出土遺物 b. E区 土坑 352 出土遺物・1 c. E区 土坑 352 出土遺物・2
 d. E区 土坑 353 出土遺物・1
- 図版 36 府中遺跡 D・E区 遺物 (3) E区 土坑 353 出土遺物・2
- 図版 37 府中遺跡 D・E区 遺物 (4) E区 溝 354 出土遺物・1
- 図版 38 府中遺跡 D・E区 遺物 (5) E区 溝 354 出土遺物・2
- 図版 39 府中遺跡 D・E区 遺物 (6) E区 溝 354 出土遺物・3
- 図版 40 府中遺跡 D・E区 遺物 (7) E区 掘立柱建物 1～3ピット出土遺物
- 図版 41 府中遺跡 D・E区 遺物 (8)
 a. E区 掘立柱建物 4・5ピット出土遺物・2 b. E区 ピット 320 出土遺物 c. E区 ピット 461 出土遺物
- 図版 42 府中遺跡 D・E区 遺物 (9)
 a. E区 土坑 447 出土遺物 b. E区 土坑 496 出土遺物・1 c. E区 土坑 496 出土遺物・2
 d. E区 流路 507 出土遺物・1 e. E区 土坑 409・410・496 出土遺物
- 図版 43 府中遺跡 D・E区 遺物 (10)
 a. E区 土坑 433 出土遺物 b. E区 土坑 433・438・453・456・473・476・505 出土遺物
- 図版 44 府中遺跡 D・E区 遺物 (11)
 a. E区 土坑 389・397 出土遺物 b. E区 土坑 389 出土遺物
- 図版 45 府中遺跡 D・E区 遺物 (12)
 a. E区 土坑 393・397・398 出土遺物 b. E区 土坑 396 出土遺物・1
- 図版 46 府中遺跡 D・E区 遺物 (13) E区 土坑 396 出土遺物・2
- 図版 47 府中遺跡 D・E区 遺物 (14) E区 土坑 396 出土遺物・3
- 図版 48 府中遺跡 D・E区 遺物 (15) E区 その他の遺構出土遺物・1
- 図版 49 府中遺跡 D・E区 遺物 (16) E区 その他の遺構出土遺物・2
- 図版 50 府中遺跡 D・E区 遺物 (17) E区 その他の遺構出土遺物・3
- 図版 51 府中遺跡 D・E区 遺物 (18)
 a. E区 緑釉陶器片 b. D区 包含層出土遺物 (6層)・1 c. D区 包含層出土遺物 (2～5層)
- 図版 52 府中遺跡 D・E区 遺物 (19) D区 包含層出土遺物 (6層)・2
- 図版 53 府中遺跡 D・E区 遺物 (20) D区 包含層出土遺物 (6層)・3
- 図版 54 府中遺跡 D・E区 遺物 (21)
 a. D区 包含層出土遺物 (6層)・4 b. D区 包含層出土遺物 (6層)・5 c. D区 遺物包含層 (7層)・1
 d. D区 包含層出土遺物 (8層)
- 図版 55 府中遺跡 D・E区 遺物 (22) D区 包含層出土遺物 (7層)・2
- 図版 56 府中遺跡 D・E区 遺物 (23)
 a. D区 包含層出土遺物 (7層)・3 b. D区 包含層出土遺物 (14～17層)
- 図版 57 府中遺跡 D・E区 遺物 (24)
 a. D区 包含層出土遺物 (10～13層) b. D区 包含層出土遺物 (13層)
- 図版 58 府中遺跡 D・E区 遺物 (25) D区 包含層出土遺物 (14～17層)
- 図版 59 府中遺跡 D・E区 遺物 (26)
 a. E区 包含層出土遺物 (2～6層) b. E区 包含層出土遺物 (6層)・1
- 図版 60 府中遺跡 D・E区 遺物 (27) E区 包含層出土遺物 (6層)・2
- 図版 61 府中遺跡 D・E区 遺物 (28) E区 包含層出土遺物 (10層)
- 図版 62 府中遺跡 D・E区 遺物 (29) F区 遺物
 a. E区 包含層出土遺物 (6層)・3 b. E区 包含層出土遺物 (10層)・2 c. F区 出土遺物

第1章 調査経過と調査方法

第1節 調査経過

府中遺跡は和泉市の北西部、黒鳥町、府中町、桑原町に所在し、標高約20～24m付近の低位～中位段丘上に立地する遺跡である。JR阪和線と泉府中駅付近を西端とし、今回調査の原因となった都市計画道路大阪岸和田南海線を東端、府立伯太高等学校付近を北端、市立国府小学校付近を南端とする、北東-南西方向に長軸をもつ楕円形に近い形をした遺跡範囲となっている。長軸は約1.2km、短軸は約1kmを測る。遺跡内には長軸にあたる箇所以小栗街道（熊野街道）、遺跡中央部の泉井上神社を中心とする部分には和泉国府、遺跡南部には東西-南北方向の地割となる和泉寺跡の一部が重なる（図1、第2章第1節参照）。

今回の発掘調査は、都市計画道路大阪岸和田南海線街路築造事業（府中工区）に伴う記録保存調査である。この工区については、平成17年度以降、本府教育委員会によって順次発掘調査を実施しており、市道府中阪本線以南については、既に調査を終了し報告書が刊行されている（大阪府教委2012、2013、2015、図4）。

市道府中阪本線以北の区間について、平成27年度に事業者である大阪府都市整備部鳳土木事務所建設課と教育庁文化財保護課が協議を行い、事前に確認調査を実施し、その結果に基づいて本発掘調査を実施することとした。確認調査は平成27年7月1日から8月11日まで、用地買収済の事業地について実施した（調査番号15008）。その結果、光明池水路より南側（A～C区、D・E区）、大規模集合住宅前（F・G区）について本発掘調査が必要と判断された。本発掘調査は平成27年12月1日から平成

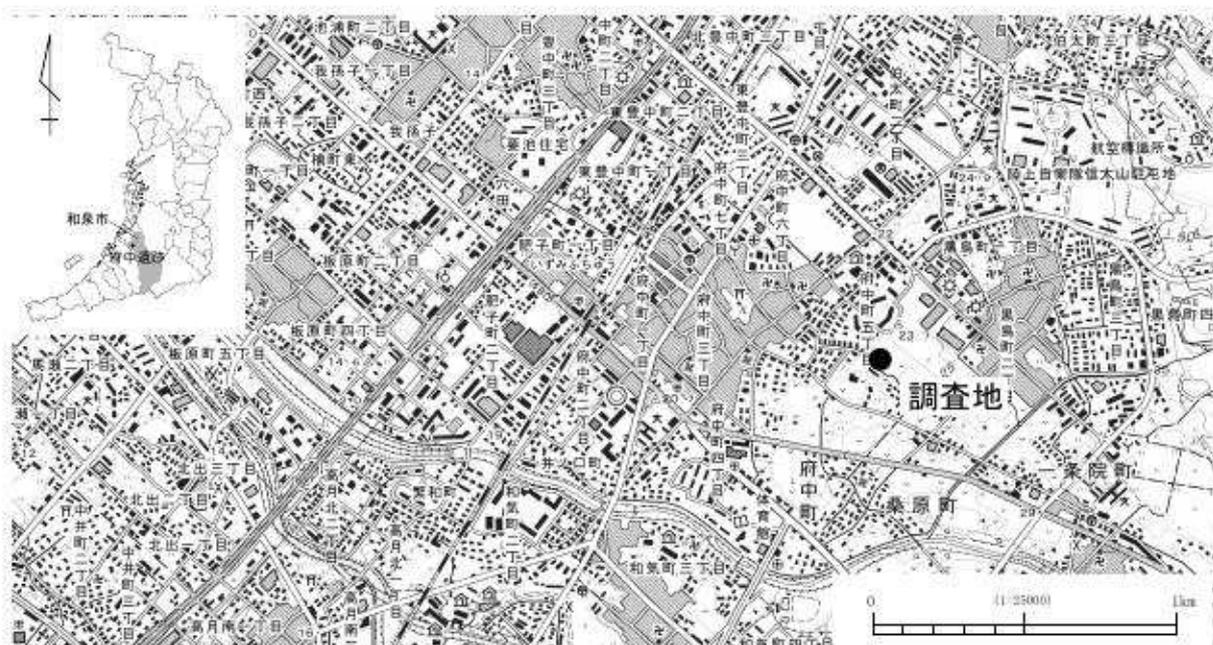


図1 調査地位置図 (1/25,000)
 (国土地理院2万5千分の1地形図「岸和田東部」平成19年6月1日発行 より作成)

28年9月30日まで実施した。調査地は和泉市府中町五丁目である。調査面積はA～C区が2463㎡、D・E区が1261㎡、F・G区が855㎡、合計4579㎡である（図2）。

なお、府中遺跡における既往の調査地点とその主な成果（既公表）について、表1、図5に示す。

第2節 調査方法

調査区は、光明池水路から里道まで、市道府中阪本線から物流倉庫（民間）まで、大規模集合住宅東側の3か所に分かれており、掘削残土の仮置きを考慮し、それぞれを2ないしは3分割した。したがってそれぞれ、A・B・C区、D・E区、F・G区となる（図2）。国道480号線と市道府中阪本線の間で、未調査部分（約30㎡）があったため、これをH区とした。なおH区は、平成24・25年度のD区（大阪府教育委員会2015）に南接し、平成20年度の0819-4区（大阪府教育委員会2012）に東接する調査区であるが、遺構、遺物が認められなかった。

調査は盛土や旧耕作土をバックホウによって除去後、調査区の長辺、短辺に土層観察用のサブトレンチを設定し、土層を確認しながら1層ごとに人力により掘削した。なお遺構面の図化については、空中写真測量を実施し、作業の効率化を図った。

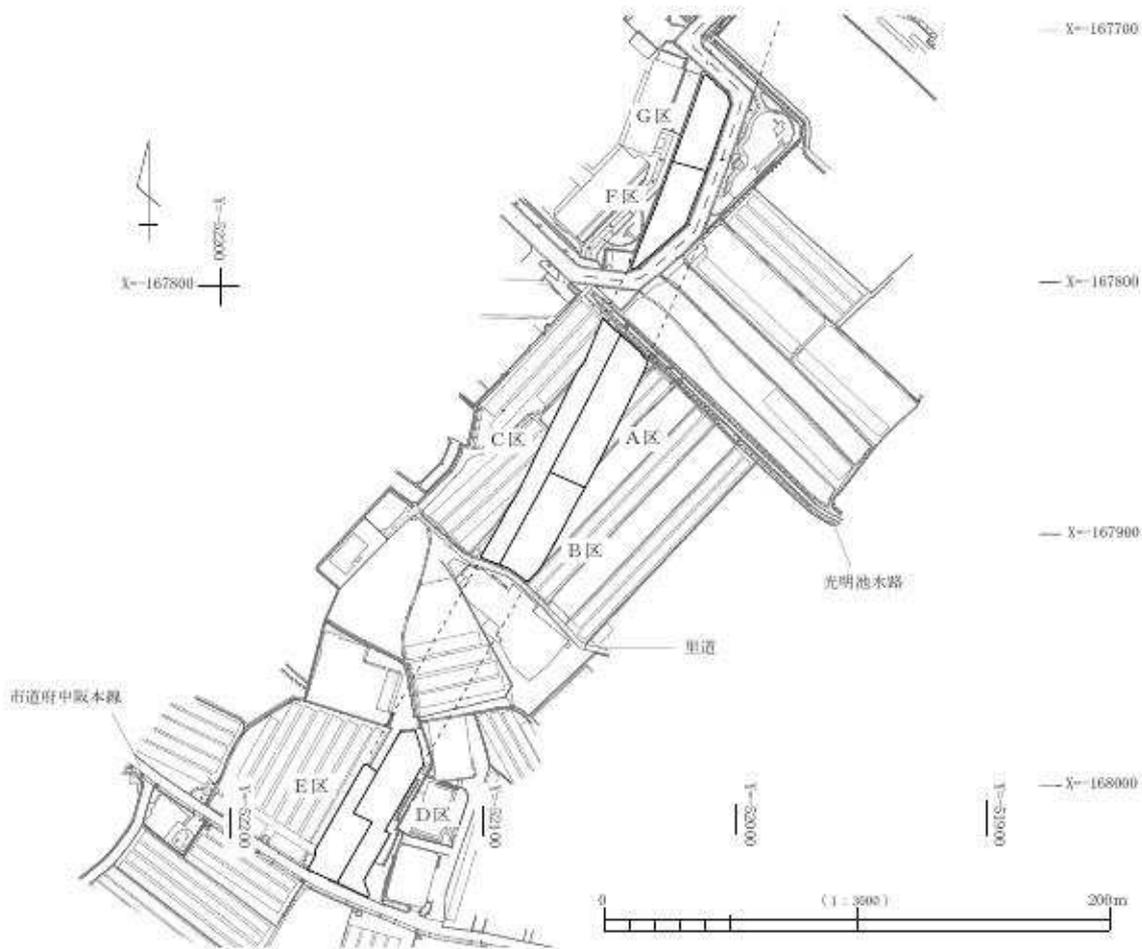


図2 調査区配置図 (1/3000)

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

和泉市は大阪府の南西部の位置する。南部は和歌山県との境となる和泉山地があり、その北側は海岸部に向けて泉北丘陵地や信太山台地が広がっている。横尾川や松尾川は和泉山地に端を発してこれらの丘陵地や台地を流れており、流域に小規模な三角州や谷底平野を形成するもののその発達が悪く、段丘崖を形成させながら蛇行している。横尾川右岸の丘陵地、台地は、信太山丘陵と呼ばれ、現在自衛隊の駐屯地や演習場がある。丘陵上部は比較的平坦な部分もあり縁辺部には谷部を発達させる。これらの中には光明池や大野池などのように谷下流に堤を設けた溜池がみられる。また横尾川と松尾川の間の丘陵地、台地は和泉丘陵とよばれ、こちらも縁辺部には谷を発達させており、梨本池や谷本池などのように堤を設けて溜池となっている部分がある。府中遺跡は、横尾川右岸の低位段丘に立地するが、これは信太山丘陵から派生する段丘面であり、調査地の標高は約23m前後を測る。この付近は海岸線と平行し北西に向きをとる条里地割が認められ、後述するA・B・C区、F・G区は地割が認められるが、A・B・C区に南接する里道を境に、D・E区を含むそれより南側ではこの地割が乱れており、横尾川やその支流の河道変遷の範囲を示すものとみられる。

第2節 歴史的環境

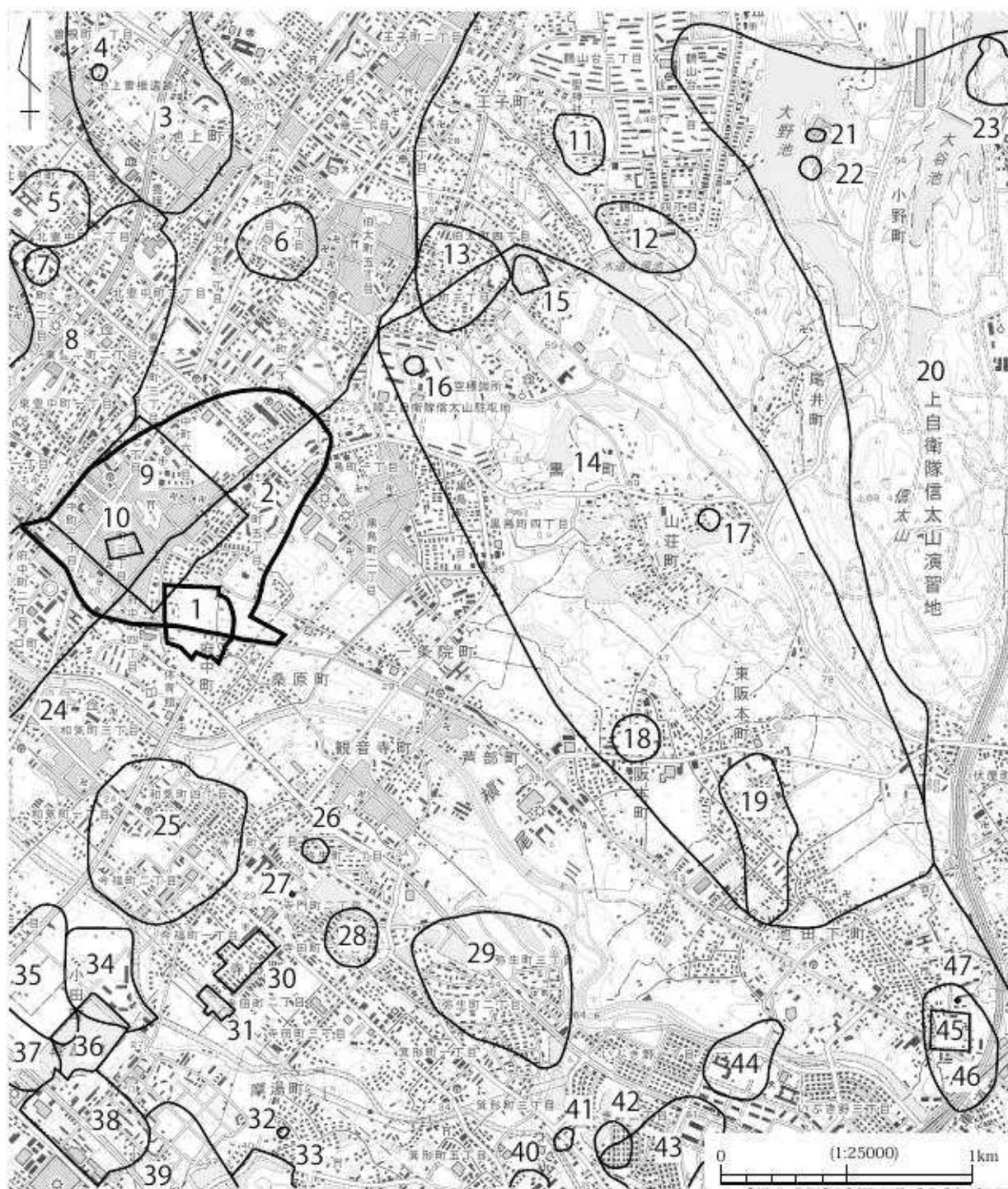
旧石器時代 和気遺跡で翼状剥片が、大床遺跡、伯太北遺跡、万町北遺跡、観音寺遺跡、上フジ遺跡、西山遺跡等で国府型ナイフ形石器が見つかっている。

縄文時代 前期では仏並遺跡、池田寺遺跡、小田遺跡などで土器が出土している。中期では仏並遺跡で竪穴建物や土器棺墓、府中遺跡、池田寺遺跡、池上曾根遺跡、万町北遺跡などで土器などが出土している。晩期では仏並遺跡、府中遺跡、池上曾根遺跡、万町北遺跡などで土器などが出土している。

弥生時代 前期中葉には池浦遺跡、前期後葉には環濠をもつ大集落である池上曾根遺跡が現れる。中期には池上曾根遺跡で集落の拡大が認められ中期後葉には最盛期を迎える。この時期には横尾川中流域の万町北遺跡、池田下遺跡、松尾川右岸の寺田遺跡、左岸の軽部池遺跡で建物遺構が検出されている。後期には池上曾根遺跡の大規模集落が解体し規模が縮小する。また観音寺山遺跡や惣ヶ池遺跡が認められるようになる。後期後葉には今木遺跡、軽部池西遺跡、山ノ内遺跡で建物遺構が検出されている。庄内式併行期には府中遺跡や豊中遺跡、七ノ坪遺跡、寺田遺跡でも集落が検出されている。

古墳時代 前期には府中遺跡、和気遺跡、寺田遺跡、小田遺跡、田治米宮内遺跡遺跡、西大路遺跡等で引き続き集落が営まれ、寺田遺跡、田治米宮内遺跡は後期にかけて継続する。古墳では和泉黄金塚古墳、摩湯山古墳、丸笠山古墳、久米田古墳群、信太千塚古墳群などが造営される。また陶器窯跡群では須恵器生産が盛行する。

飛鳥～奈良時代 飛鳥時代には万町北遺跡、二俣池北遺跡などが古墳時代から継続する。奈良時代で



- | | | | | | | |
|------------------|---------------|-------------|-----------|----------|---------------|-----------------|
| 1 和泉寺跡 | 2 府中遺跡 | 3 池上曾根遺跡 | 4 曾根城跡 | 5 七ノ坪遺跡 | 6 伯太北遺跡 | 7 大福寺跡 |
| 8 豊中遺跡 | 9 和泉国府跡 | 10 国府城跡 | 11 聖神社遺跡 | 12 惣ヶ池遺跡 | 13 伯太藩陣屋跡 | 14 信太千塚古墳群 |
| 15 丸笠山古墳 | 16 王塚古墳 | 17 黒島山荘遺跡 | 18 坂本寺跡 | 19 願成遺跡 | 20 陶呂窯跡群大野池地区 | |
| 21 大野池遺跡(北地区) | 22 大野池遺跡(南地区) | 23 山田古墳群 | 24 熊野街道 | 25 和氣遺跡 | 26 観音寺城跡 | |
| 27 孤塚古墳 | 28 寺門古墳群 | 29 観音寺山遺跡 | 30 寺田遺跡 | 31 摩湯北遺跡 | 32 イナリ古墳 | 33 摩湯山古墳 |
| 34 軽部池遺跡 | 35 小田遺跡 | 36 軽部池 | 37 軽部池西遺跡 | 38 山ノ内遺跡 | 39 山県北遺跡 | 40 和泉丘陵 A1 地点遺跡 |
| 41 和泉丘陵 A87 地点遺跡 | 42 池田山遺跡 | 43 唐国池田山古墳群 | 44 池田下遺跡 | 45 池田寺跡 | 46 池田寺遺跡 | 47 池田寺瓦窯 |

図3 周辺の遺跡 (1/25000)

はこれらに加え、府中遺跡、板原遺跡、小田遺跡などで集落が形成されている。この時期の古代寺院跡としては、信太寺跡、和泉寺跡、坂本寺跡、池田寺跡、和泉国分寺跡等がある。今回の調査と一連の道路事業による和泉寺跡の調査では、推定寺域の外側、南西部付近から文字瓦等が多数出土している。府中遺跡内には和泉国府が推定されているが、関連する明確な遺構は見つかっていない。

平安時代 池田寺遺跡、万町北遺跡、二俣池北遺跡などで奈良時代から集落が継続している。万町北遺跡では「大同五年」（810年）と記された木簡が出土している。

中世 二俣池北遺跡、水込遺跡、山直中遺跡、和気遺跡、府中遺跡で集落跡が検出されている。

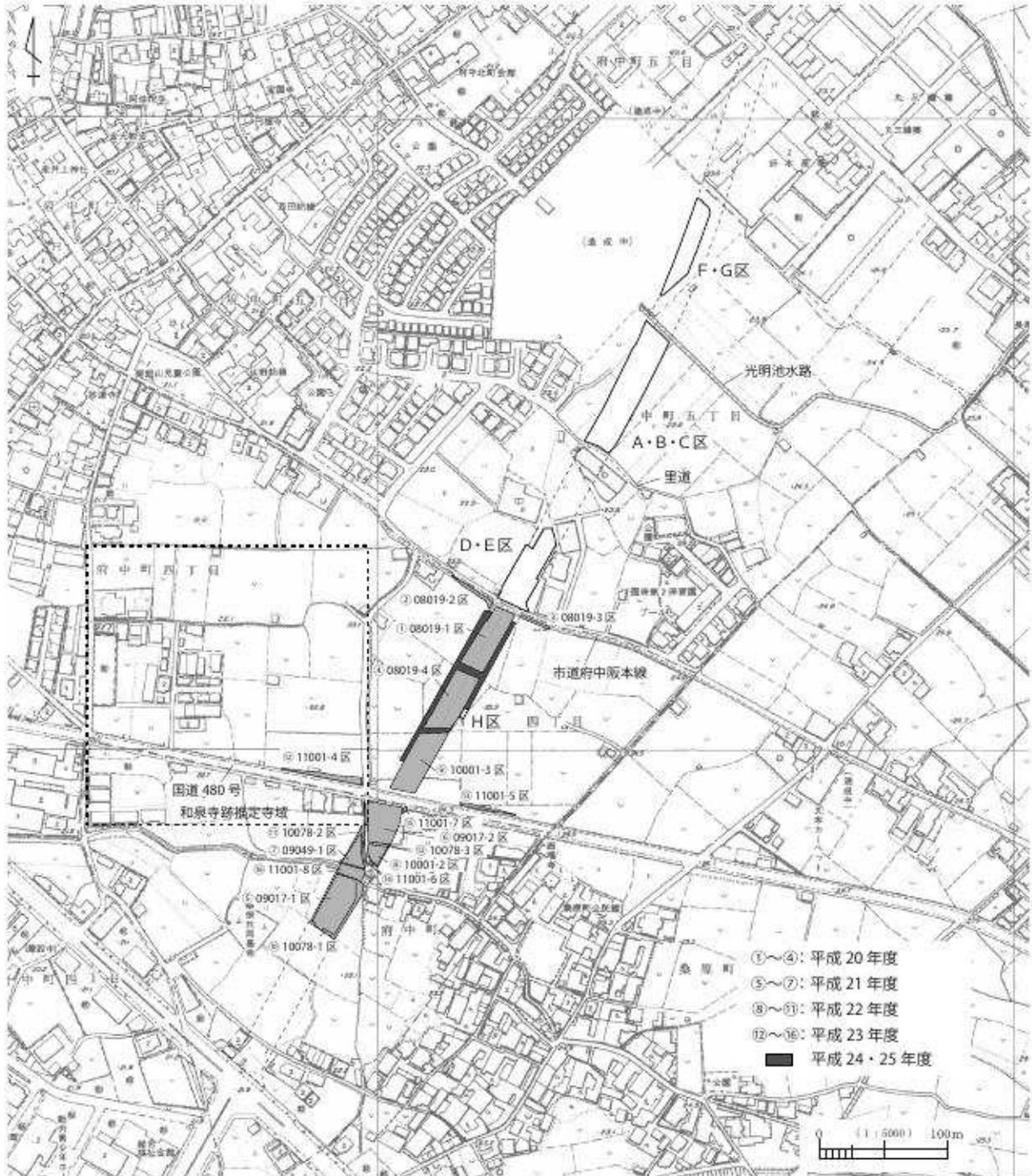


図4 既往の調査区 (1/5000、(都)大阪岸和田南海線事業関連、平成3年作成大阪府地形図を使用)

第2章 地理的・歴史的環境

表1 府中遺跡における既往の調査

番号	時代	主な遺構	主な遺物	報告書	発行機関	発行年月
81-6	弥生中～弥生半, 平安	竪立柱建物1棟、溝、土坑、ピット	須恵系弥生系、埴山群、弥生製粘土器、弥生土器、埴山陶器	府中遺跡群発掘調査報告・Ⅱ	和泉市教委	1981-3
82-1			土、須恵系弥生系、土師器小皿			
77-1次	弥生～古墳前期	竪立柱居2基、竪土坑、溝	大塚の古式土師器	府中遺跡群発掘調査報告・Ⅱ	和泉市教委	1978.1
77-2次	弥生～古墳前期	竪立柱居、土坑、溝	弥生土器			
75-1次	弥生～古墳	溝、落ち込み、ピット	弥生土器			
75-2次		土坑、ピット				
75-3次	弥生中期～弥生末	竪立柱居、溝、竪状土坑	弥生、須恵系	府中遺跡群発掘調査報告	和泉市教委	1976-3
75-4次			土師器、弥生、須恵系			
79	弥生中～奈良	竪立柱建物1棟(器具)、土坑、溝、落ち込み	土師器	府中遺跡群発掘調査報告・Ⅳ	和泉市教委	1980-9
86-1	近世		埴山群			
86-3	弥生半	溝、ピット、落ち込み	須恵系弥生系、土器	府中遺跡群発掘調査報告・Ⅲ	和泉市教委	1987-3
84-5	中世以降、近世	溝、土坑、落ち込み、ピット	伊万里・磁器・焼物	府中遺跡群発掘調査報告・Ⅷ	和泉市教委	1986-3
84-4	弥生中～奈良・平安	溝、ピット	須恵系弥生系、高坪、土師器遺土、高坪	府中遺跡群発掘調査報告・Ⅴ	和泉市教委	1985-3
80-1	中世～近世	ピット、土坑	土器、伊万里・磁			
80-2	古墳前期～中世以降	溝、ピット、井戸(中世以降)		府中遺跡群発掘調査報告	和泉市教委	1981-3
15-2		溝、円形土坑	土、土師器	和泉市地域文化財発掘調査報告・25	和泉市教委	2015-3
00-4	弥生	円形・方形溝遺構	弥生土器	和泉市地域文化財発掘調査報告・12	和泉市教委	2002-3
03020-06017	縄文中期～古墳	土器集積遺構、土坑、方形凹溝墓	縄文～弥生土器、土師器	府中遺跡(府中地域文化財調査報告2010-5)	大阪府教委	2010-10
81-1(Ⅲ)14	弥生中～飛鳥、古墳	竪立柱居、土坑	弥生Ⅲ様式、石作、石皿	府中遺跡群発掘調査報告	大阪府教委	1985-3
		瓦形筒溝墓	弥生Ⅴ様式			
		大塚、溝、土坑、ピット	弥生Ⅴ末、高坪、須恵系			
96	弥生中～飛鳥、古墳初	竪立柱建物、溝	弥生、土師器、縄文瓦器	府中遺跡群発掘調査報告・Ⅱ	大阪府教委	1987-3
04-09	縄文～近世	土坑、溝、中世以降敷地、竪立柱建物遺構、井戸、土坑	縄文、弥生、石器、土師器、瓦器類	府中・萱中・松原遺跡(府中支調査報告2011-9)	大阪府教委	2012-3
06	奈良	竪立柱建物、溝溝	須恵系、土師器、景観十二段、土器	和泉市府中遺跡群発掘調査報告	大阪府教委	1966
88-10	中世	ピット、土坑	須恵系、瓦器、土師器、滑石器、大塚遺土	和泉市地域文化財発掘調査報告-1	和泉市教委	1991-3
89-10	古墳後期	円形土坑	須恵系弥生系、高坪、土師器	府中遺跡群発掘調査報告・Ⅴ	和泉市教委	1990-3
98-7	奈良前半以降、近代	管地溝、溝	伊万里、須恵系、土師器	和泉市地域文化財発掘調査報告-9	和泉市教委	1999-3
98-8	平安以降	河川敷跡	土	和泉市地域文化財発掘調査報告-10	和泉市教委	1999-3
96-4	弥生中～Te	ピット、管地溝	須恵系、土師器、磁器(江戸時代)	和泉市地域文化財発掘調査報告-8	和泉市教委	1998-3
94-1	中世以降	溝	土師器片			
93-2	近世	ピット、溝	須恵系、磁器、伊万里	和泉市地域文化財発掘調査報告-6	和泉市教委	1995-3
93-6	近世	方形土坑				
92-10	古墳後期	落ち込み、ピット	須恵系、土師器			
90-6	中世以降	東方部土坑	土師器小皿	和泉市地域文化財発掘調査報告-2	和泉市教委	1992-3
90-7	中世以後	土坑	土、土器片			
92-3	古墳後期、中世	竪立柱建物、ピット、土坑、溝	土師器、須恵系、瓦器類、瓦質羽釜	和泉市地域文化財発掘調査報告-3	和泉市教委	1993-3
92-4	古墳後期	円形ピット	須恵系、土師器			
08019-10001・12072	奈良末～古墳初、奈良、中世	土師器土器、自然露出、竪立柱建物、土坑、溝	大塚の弥生末～古墳初土器、有孔円盤、白土、瓦器土器	和泉市跡・府中遺跡(府中支調査報告2012-1) Ⅲ(府中支調査報告2014-5)	大阪府教委	2012-3 2015-2
08019-11001	弥生中	竪立柱建物、土坑、溝	須恵系、瓦器土器、瓦器、須恵系、土師器			
09017-11001	弥生～古墳	土坑、自然露出	弥生、土師器、韓式土器	和泉市跡・府中遺跡-Ⅱ(府中支調査報告2012-1)	大阪府教委	2013-3
03048	縄文	竪立柱建物、土坑、溝	土師器、須恵系、瓦器類、瓦器	府中遺跡(府中支調査報告2012-1)	大阪府教委	2013-3
		板石遺構	菅石、石皿、石	府中遺跡(府中支調査報告2012-1)	大阪府教委	2005-3

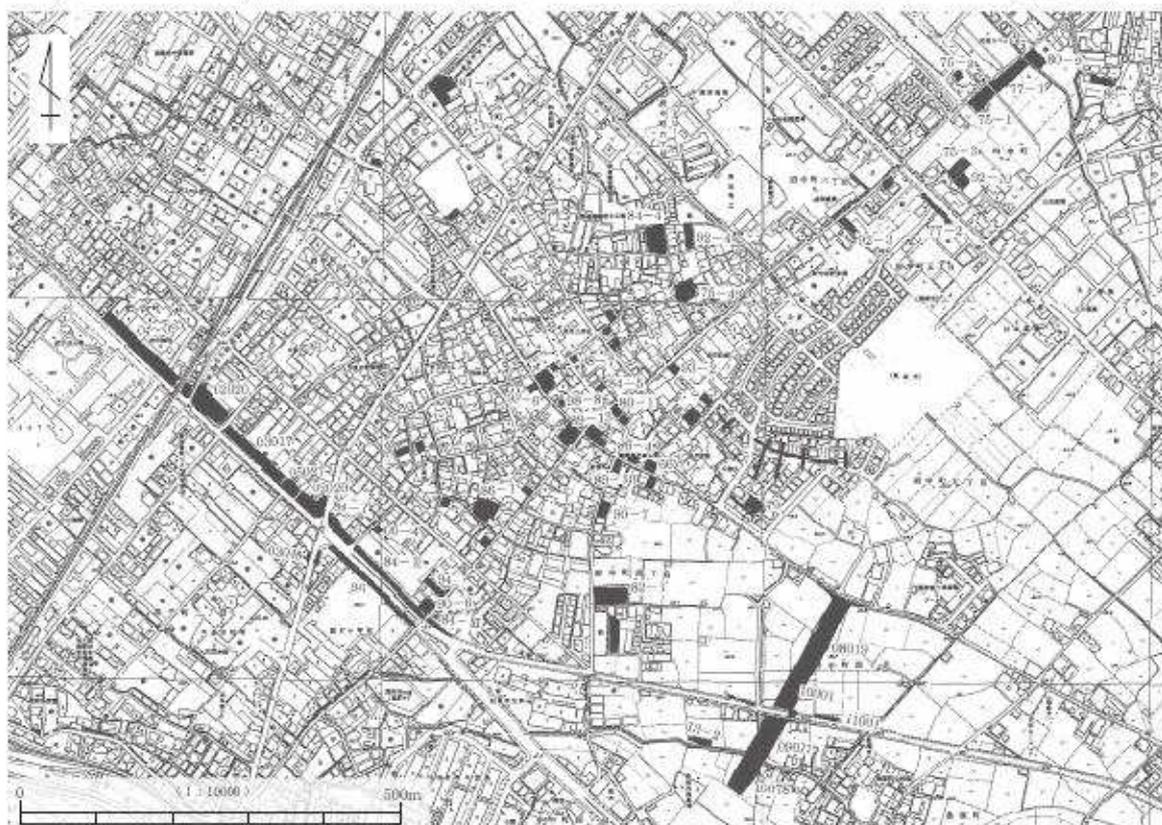


図5 府中遺跡における既往の調査地点 (1/10000)

第3章 調査の成果

第1節 A・B・C区の調査

第1項 層序

図6の1層は暗灰色粘質土で、旧耕作土である。当該地一帯は、道路用地となる以前は生花を栽培する畑地であり、1層はその耕土である。10cm～30cmの層厚で、A・B・C区のほぼ全域で認められた。

2層は赤褐色粘質土で、旧耕土の1層に伴う床土と思われる。数cmの層厚で、こちらもA・B・C区のほぼ全域で認められた。

2層の下は、A・C区北半が4層明黄褐色粘質シルトで、地山（基盤層）である。4層直上が遺構面（第1遺構面）で、中世～近世の遺構が検出された。

A区からB区北端にかけては、2層の下は3層の橙色粘質シルトが5cm～10cmの層厚で堆積し、3層上面が第1遺構面で、A区と同様に中世～近世の遺構が検出された。また、3層は包含層で中世の遺物が含まれる。

A区南端からB区北端にかけては3層の下は7層黒褐色粘質シルトで、地山（基盤層）である。A区北半およびC区北半では4層の下に7層が認められる。

B区中央付近以南およびC区南半では、3層の下に5層明赤褐色粘質シルトが数cmの層厚で、その下に6層灰白色粘質シルトが20cm～30cmの層厚で認められる。6層は遺物包含層であり古代の遺物が含まれる。

B区中央付近では6層の下は7層となり、7層上面は北から南へ緩やかに傾斜し、B区南半部で急激に南に落ち込む状況を呈する。これは7層上面をベースとする東北東から西南西方向の自然流路が存在するためであり、B区南半部はその影響を受けた層序が認められるものと考えられる。そのためB区南半部では6層の下に8層灰白色粘質シルト混じりの明赤褐色粘質シルト、9層灰色粘質シルトがそれぞれ数cmの層厚で認めらる。これらは自然流路が埋没した後に堆積した覆土で遺物包含層であり、古代が主体であるが、古墳時代中・後期の遺物が含まれる。A区南半からB区北端にかけては7層上面が、B区中央部以南では9層上面が第2遺構面となり、古代の遺構が検出された。また、B区南半で検出された自然流路の肩部付近では、9層の下が7層となっており、7層上面で古墳時代中期の遺構を検出した。これが第3遺構面である。

自然流路には10層灰色粘質シルト混じりの明赤褐色シルト、11層灰色粘質シルト、12層明赤褐色シルト混じりの灰色粘質シルト、13層褐灰色粘質シルト、14層黒褐色粘質シルトの5層の埋土が認められ、これらは遺物包含層で、14層からは古墳時代前期～中期初頭のもの、12層、13層からは古墳時代中期～後期のものが、10層、11層からは古墳時代後期を主体とする遺物が出土した。これらから、自然流路は古墳時代のもと考えられた。また、自然流路を掘削したことによって地山の堆積状況の一端が確認できた。流路の底面付近には暗灰色粗砂混じりの礫層（16層）が認められ、この礫層の上に7層が

堆積していることがわかった。また、A区の北端部付近で東北東から西南西方向の自然流路が検出された。こちらは埋土が1層で、茶褐色砂礫層であり、急激に埋没した状況を呈していた。埋土内に遺物は認められず、時期は不明と言わざるを得ない。

第2項 検出された遺構と遺物

(1) 第1面

A区北半～中央部付近では4層上面、A区南半～B区では3層上面をベースとする遺構面である。検出された遺構には、溝、土坑などがある。中世から近世の遺構面と考えられる。主に遺物が出土した遺構を中心に報告する。

1. 近世の遺構

溝 001(図7・8、図版2・3)

A区の北半部からC区の南端部付近には、南東が高く北西が低い段が認められる。この段は近世以降の整地によって生じたものと考えられる。溝 001はその段の境目に掘られた溝で、A区北端部付近の $X=-167835$ 、 $Y=-52035$ 付近からB区中央部付近の $X=-167882$ 、 $Y=-52085$ 付近にかけて、北東から南西方向に走りB区の溝 086につながる。延長約68 m、幅0.5 m～0.8 m、深さ約0.4 mを測った。埋土は2層で、上より黒褐色粘土、暗灰褐色粘土である。埋土内より陶磁器、瓦、土師器などが出土した。(図9、図版23)。これらによって、溝 001は近世に比定できるものとする。

溝 002(図7・8、図版2・3)

溝 001の東側に重複する位置で検出された。A区の中央部の $X=-167846$ 、 $Y=-52048$ 付近から、B区の北端部付近の $X=-167870$ 、 $Y=-52070$ 付近までの延長約34 mの範囲で認められた。溝 001によって削られているため、幅は計測できなかった。深さは残存部で約0.2 mを測った。こちらも検出したのは部分的であるが、B区の溝 087につながる。埋土は1層で、灰色粘土である。埋土内より須恵器、土師器、瓦、瓦質土器などが出土した(図9、図版23)。これらによって、溝 002は近世初頭に比定できるものとする。

溝 034(図7・8、図版3)

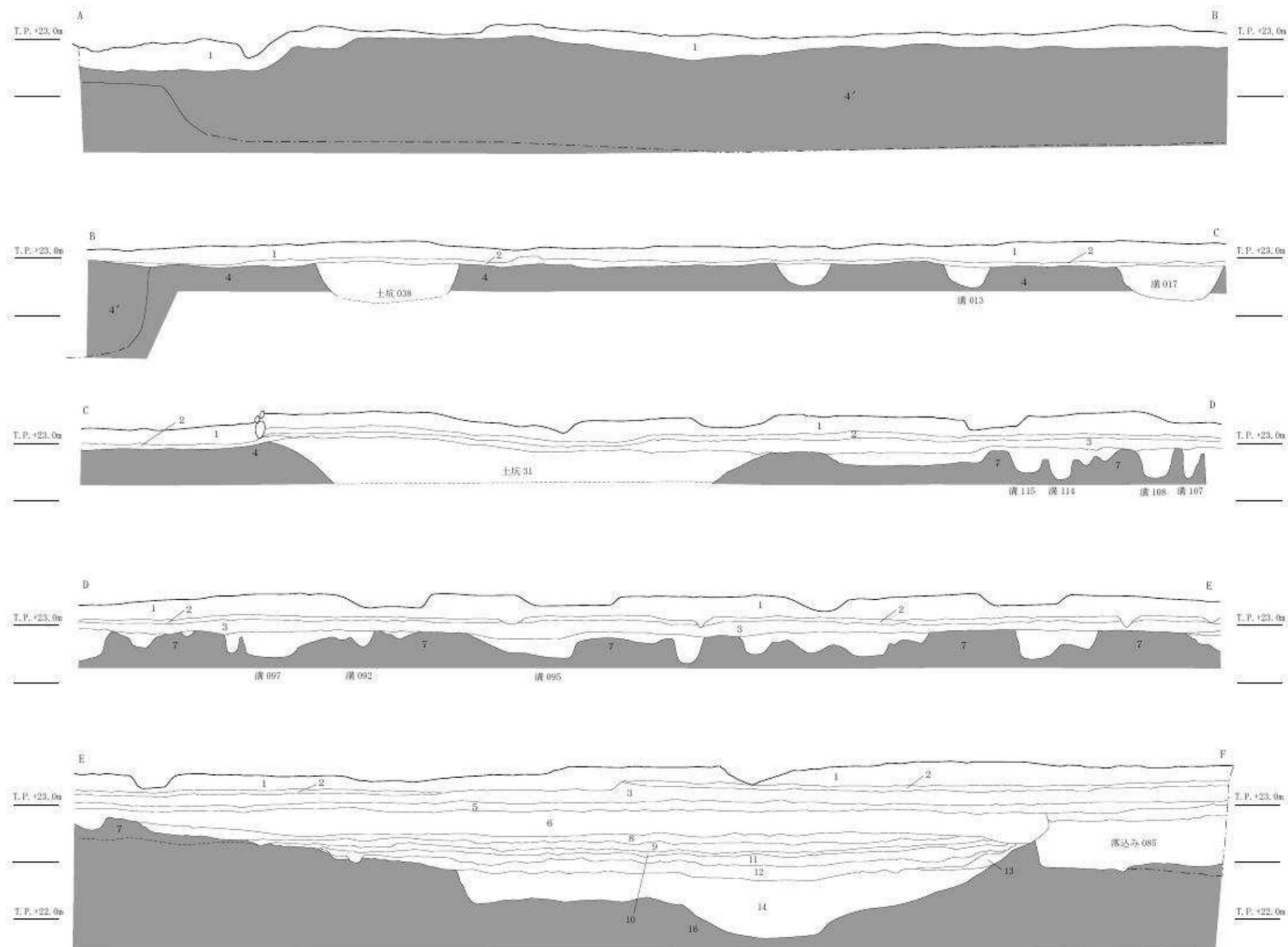
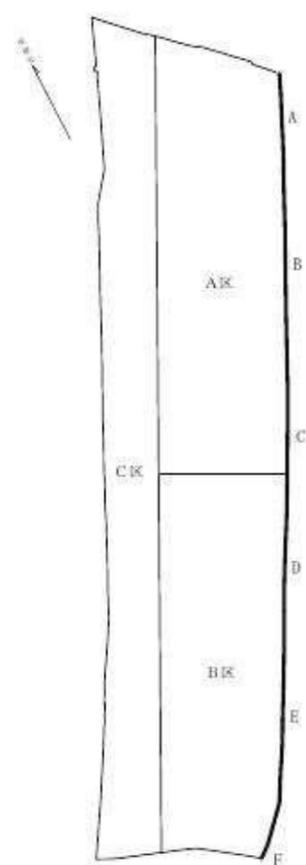
A区南半部の $X=-167869$ 、 $Y=-52053$ 付近からB区南端部付近の $X=-167880$ 、 $Y=-52063$ 付近にかけて、北東から南西方向に走る。延長約14.5 m、幅0.2 m～0.3 m、深さ約0.4 mを測った。埋土は1層で、黒褐色粘土である。埋土内から遺物は出土しなかったが、溝 001とほぼ並行すること、埋土が溝 001と酷似していること、後述する中世の遺構を切って掘られていることなどから、溝 001と同時期の近世初頭のものと考えられる。

溝 105(図7・8、図版3)

B区の中央部の $X=-167885$ 、 $Y=-52066$ から $X=-167888$ 、 $Y=-52069$ までを、北東から南西方向に短く走る溝で、幅約0.3 m、深さ0.18 mを測った。埋土は1層で、黒褐色粘土である。内部から須恵器、土師器、瓦質土器、陶磁器などが少量出土した。これらによって溝 105は近世に比定される。

溝 106(図7・8)

B区の中央部の $X=-167888$ 、 $Y=-52063$ から $X=-167887$ 、 $Y=-52064$ までを、南東から北西方向に短く走



- 1: 暗灰色粘質土 (田耕作土)
- 2: 赤褐色粘質土 (田耕作の床土)
- 3: 橙色粘質シルト
- 4: 明黄褐色粘質シルト (A区~C区基礎層)
- 4': 茶褐色砂礫層 (自然河川 084)
- 5: 明赤褐色粘質シルト
- 6: 灰白色粘質シルト
- 7: 黒褐色粘質シルト (B区基礎層)
- 8: 灰白色粘質シルト混じり明赤褐色シルト
- 9: 灰色粘質シルト
- 10: 灰色粘質シルト混じり明赤褐色シルト (流路 232)
- 11: 灰色粘質シルト (流路 232)
- 12: 明赤褐色シルト混じり灰色粘質シルト (流路 232)
- 13: 褐灰色粘質シルト (流路 232)
- 14: 黒褐色粘質シルト (流路 232)
- 15: 流路 232 堆積物 (図 33 参照)
- 16: 暗灰色粗砂混じり礫層

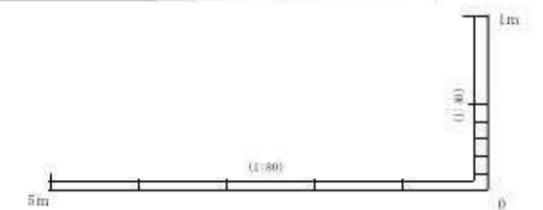


図6 A・B・C区 東壁断面図

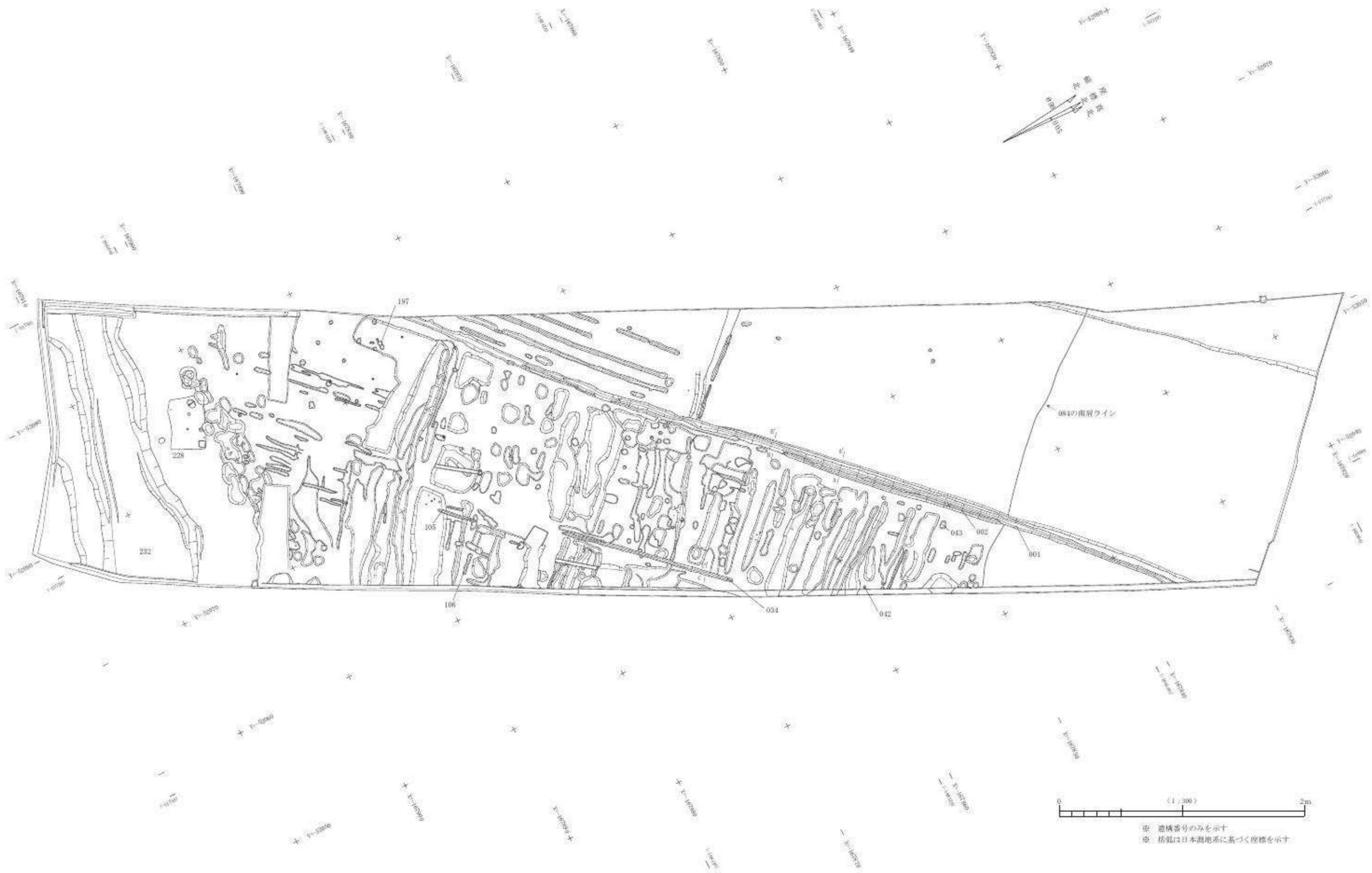


図7 A・B・C区 全体平面図 (1/300)

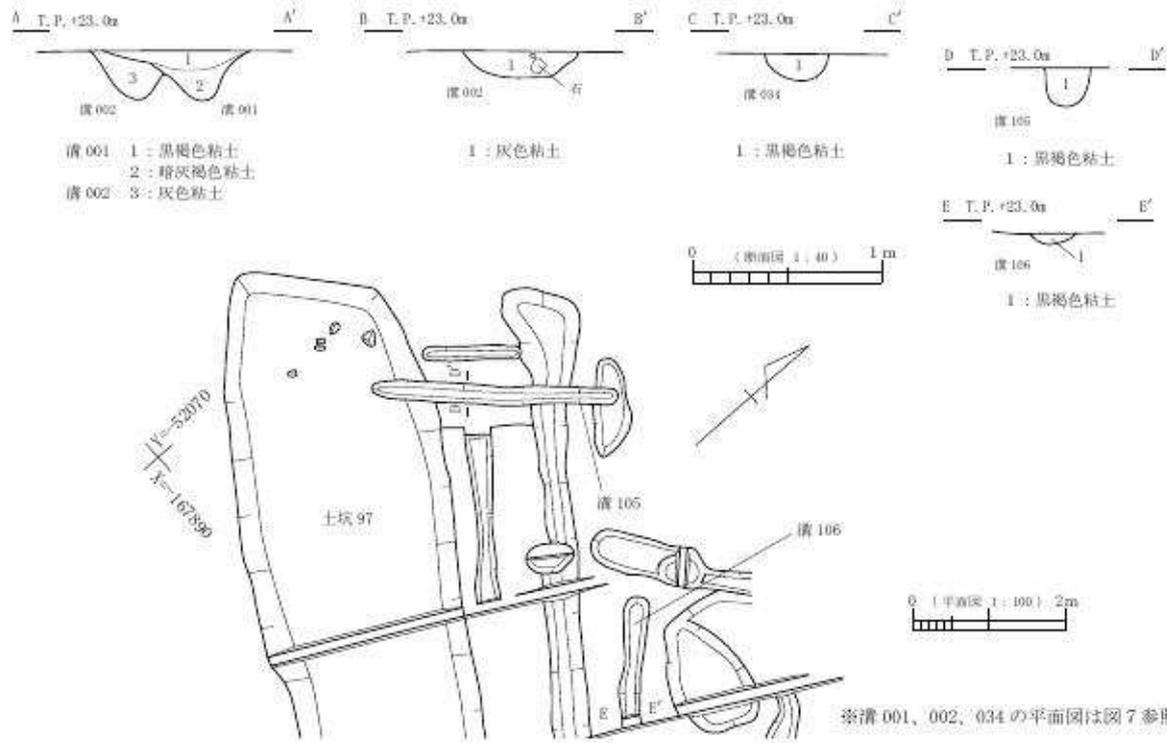


図8 A・B・C区 近世溝 平面図・断面図 (1/100・1/40)

る溝で、幅約0.3m、深さ0.07mを測った。埋土は1層で、黒褐色粘土である。内部から土師器、陶磁器などが少量出土した。これらによって溝 106 は近世に比定できる。

畦畔 083 (図版 3)

A区の北半部からC区の南端部付近で認められた段の北西下段側のX=-167865、Y=-52065 からX=-167858、Y=-52073 までの、C区南端部付近にあたるで認められた。幅約1.0mと比較的幅広で、溝 001 を起点に、直交する方向に延びる。溝 001 と同時期の近世に比定できる。

近世の遺構出土の遺物は、溝 001 から染付椀 (図 9 - 1・2)、唐津焼 (同図 3)、溝 002 から唐津焼 (同図 4) が出土している (図版 23 - 4・7・9・11)。

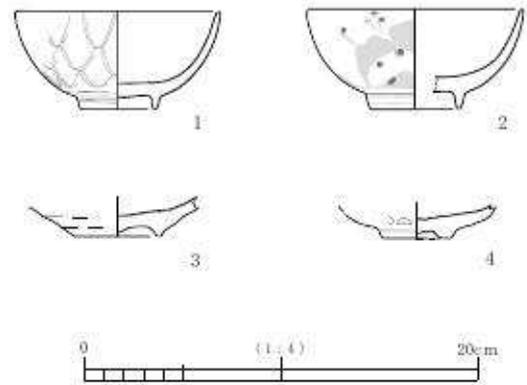


図9 A・B・C区 近世溝出土遺物 (1/4) (1～3：溝 001、4：溝 002)

2. 中世の遺構

土坑 006 (図 10、図版 3)

A区の中央部東壁付近のX=-167853、Y=-52047 の、土坑 005 の南側に隣接する位置で検出した。楕円形状を呈する土坑で、北西から南東方向に主軸を持つ。長軸1.3m、短軸0.5m、最深部の深さ0.08mを測った。埋土は1層で、灰褐色土である。埋土内より小片だが須恵器、土師器、瓦質土器などが出土した。これらによって、土坑 006 は中世後期に比定できる。

土坑 007 (図 10、図版 3)

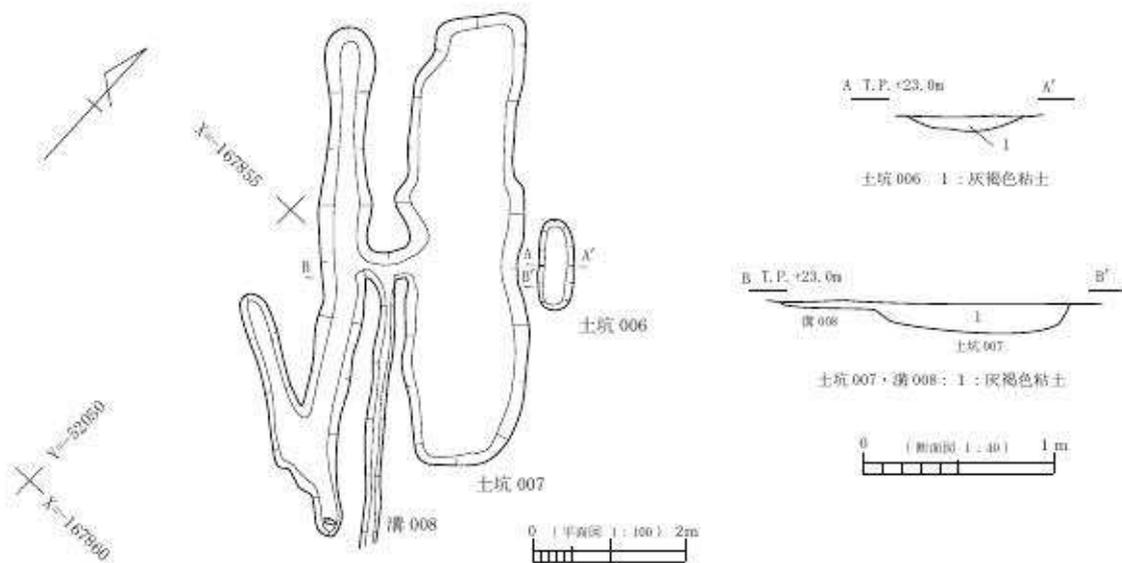


図10 土坑006・007、溝008 平面図・断面図 (1/100・1/40)

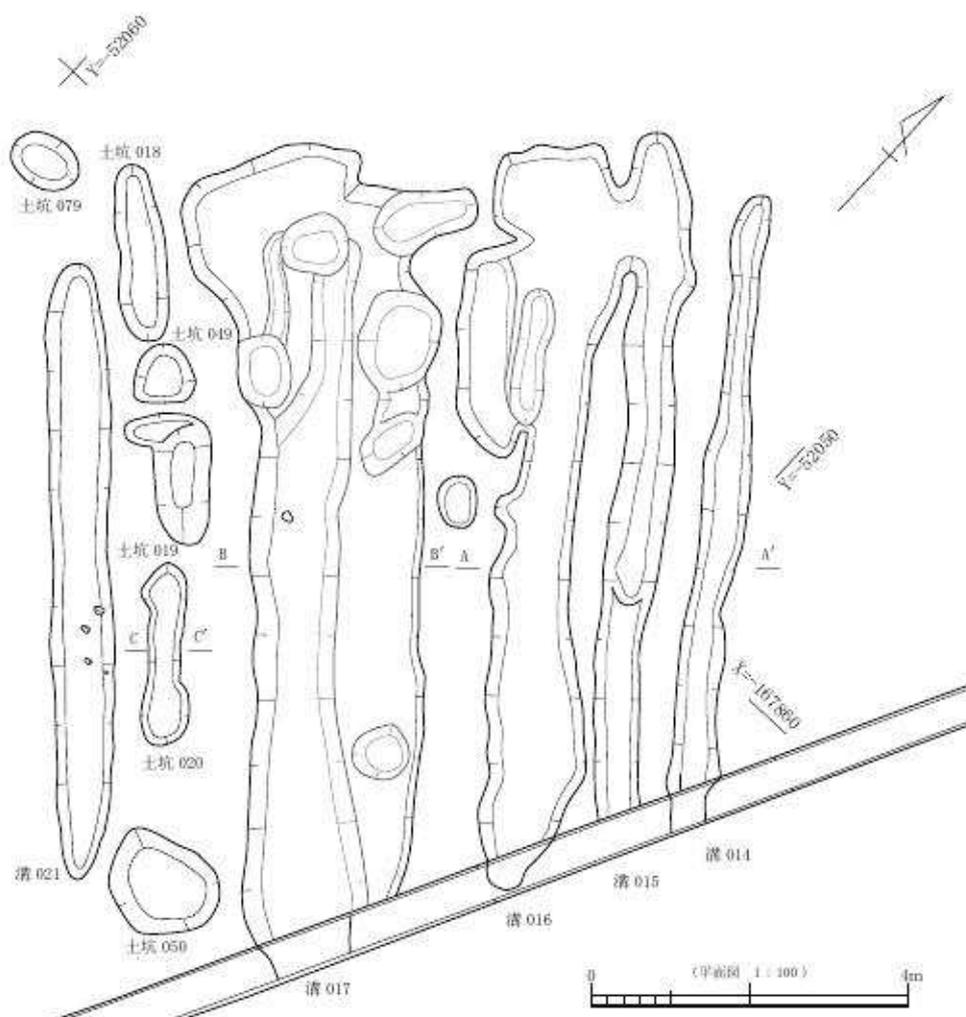


図11 溝014・015・016・017・土坑020 平面図 (1/100)

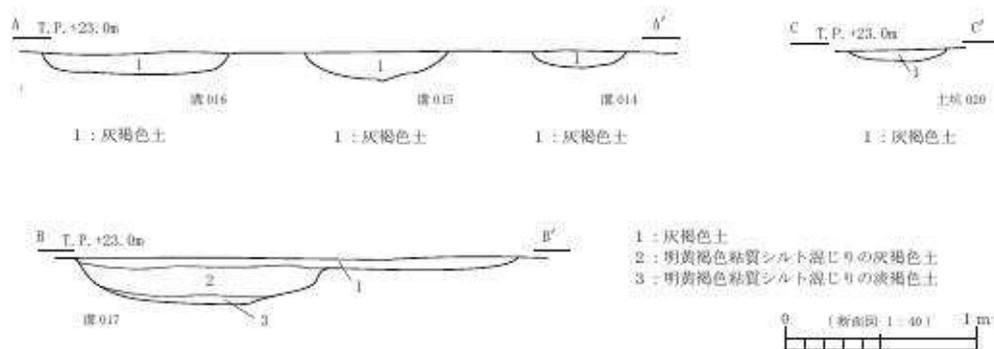


図12 溝014・015・016・017・土坑020 断面図 (1/40)

A区の中央部付近のX=-167851、Y=-52050 からX=-167854、Y=-52046 までの、土坑006の南側に隣接する位置で検出した。隅丸長方形を呈する土坑で、北西から南東方向に主軸を持つ。長軸6.0m、短軸1.7m、最深部の深さ0.08mを測った。埋土は1層で、灰褐色土である。埋土内より小片だが土師器、瓦質土器などが出土した。これらによって、土坑007は中世後期に比定できる。

溝008(図10、図版4)

A区の中央部東壁部のX=-167855、Y=-52048 からX=-167858、Y=-52046 までの、土坑007の南側に隣接する位置で検出した。南東から北西方向に走ってその後土坑007に合流する。幅0.2m、深さ0.1mを測った。埋土は1層で、灰褐色土である。遺物は出土しなかったが、土坑007と合流しており同じ埋土であることから、溝008は中世後期に比定できる。

溝014(図11・12、図版3)

A区の中央部東壁部のX=-167862、Y=-52048 からX=-167855、Y=-52052 までの、溝013の南側に隣接する位置で検出した。南東から北西方向に走って終わる。幅0.3～0.7m、深さ0.04mを測った。埋土は1層で、灰褐色土である。埋土内から土師器、瓦器などがごく少量出土した。これらによって、溝014は中世に比定できる。

溝015(図11・12、図版3)

A区の中央部東壁部のX=-167861、Y=-52048 からX=-167855、Y=-52054 までの、溝014の南側に隣接する位置で検出した。南東から北西方向に走って終わる。幅0.6～0.8m、深さ0.14mを測った。埋土は1層で、灰褐色土である。埋土内から土師器、瓦器、瓦質土器などがごく少量出土した。これらによって、溝015は中世に比定できる。

溝016(図11・12、図版3)

A区の中央部東壁部のX=-167863、Y=-52048 からX=-167857、Y=-52054 までの、溝015の南側に隣接する位置で検出した。両端部は溝015と接している。南東から北西方向に走って終わる。幅1.0～1.9m、深さ0.2mを測った。埋土は1層で、灰褐色土である。埋土内から土師器、瓦器、瓦質土器、瓦類などがごく少量出土した。したがって溝016は中世に比定できる。

溝017(図11・12、図版4)

A区の中央部東壁部のX=-167867、Y=-52053 からX=-167860、Y=-52058 までの、溝016の南側に隣接

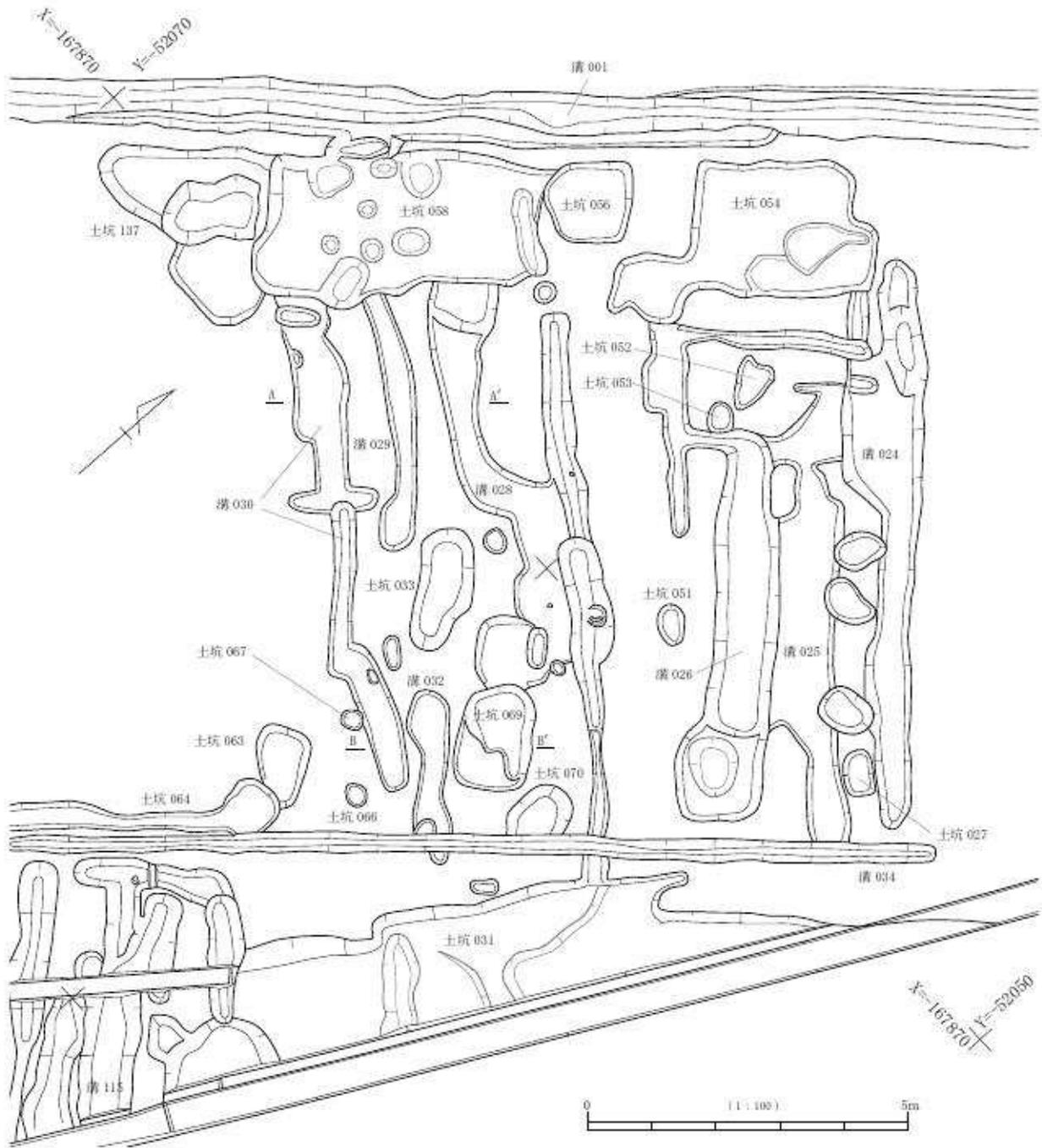


図13 溝028・030・032・土坑031等 平面図 (1/100)

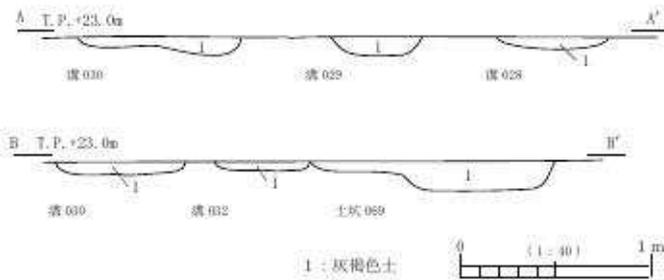


図14 溝028・030・032等 断面図 (1/40)

する位置で検出した。南東から北西方向に走って終わる。幅2.0～3.0m、最深部の深さ0.24mを測った。埋土は3層で、灰褐色土、明黄褐色粘質シルト混じりの灰褐色土、明黄褐色粘質シルト混じりの淡褐色土である。埋土内から土師器、瓦器、瓦質土器、瓦類などが出土した(図27、図版23)。これらによって、溝017は中世に比定できる。

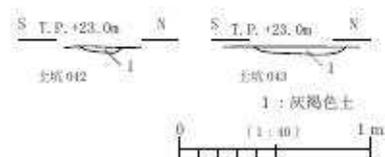


図15 土坑042・043 断面図(1/40)

土坑020(図11・12、図版4・6)

A区の中央部のX=-167864、Y=-52056付近の、溝017の南側に隣接する位置で検出した。不整楕円形状を呈する土坑で、長軸2.1m、短軸0.5m、深さ0.06mを測った。埋土は1層で灰褐色土である。埋土内から土師器、瓦器、瓦質土器などがごく少量出土した。これらから土坑020は中世に比定できる。

溝028(図13・14、図版4・6)

A区の南半部のX=-167870、Y=-520656から溝027と分離し、その南側を4m走り、X=-167868、Y=-52065で土坑058に切られて終わる溝で、幅0.5～1.0m、最深部の深さ0.06mを測った。埋土は1層で、灰褐色土である。埋土内から瓦質土器がごく少量出土した。これらによって、溝028は中世に比定できる。

溝030(図13・14、図版4・6)

A区の南半部のX=-167874、Y=-52059からX=-167870、Y=-52065まで、一度西北西に約2m走り、その後、くの字状に北西方向に折れて約6m走って終わる溝で、土坑058の南側で土坑061に切られて終わる。幅0.3～1.0m、最深部の深さ0.15mを測る。埋土は1層で、灰褐色土である。埋土内から土師器、瓦器などがごく少量出土した。これらによって、溝030は中世に比定できる。

土坑031(図13、図版6)

A区の南半部のX=-167870、Y=-52066付近で検出した。楕円形状を呈する土坑で、長軸0.7m、短軸0.4m、深さ0.26mを測った。埋土は1層で、砂利混じりの灰褐色土である。埋土内から土師器、瓦器などがごく少量出土した。これらによって、土坑031は中世に比定できる。

溝032(図13・14、図版4・6)

A区の南半部のX=-167874、Y=-52058からX=-167873、Y=-52060までの、溝030の北側に接する位置で検出した。東端部を近世の溝である溝034に切られている。幅0.4～0.7m、深さ0.05mを測った。埋土は1層で、灰褐色土である。埋土内から須恵器、土師器などがごく少量出土した。これらによって、溝032は中世に比定できるものとする。

土坑042(図7・15、図版4・6)

A区の中央部のX=-167859、Y=-52047付近の、溝013の北に隣接する位置で検出した。円形状を呈する土坑で、径約0.3m、深さ0.04mを測った。埋土は1層で、灰褐色土である。遺物が出土しなかったため、遺構の時期は不明である。

土坑043(図7・15、図版6)

A区の中央部のX=-167851、Y=-52049付近の、土坑007の北に隣接する位置で検出した。楕円形状を呈する土坑で、長軸0.8m、短軸0.5m、深さ0.26mを測った。埋土は1層で、灰褐色土である。埋土内から瓦質土器がごく少量出土した。土坑043は中世に比定できるものとする。

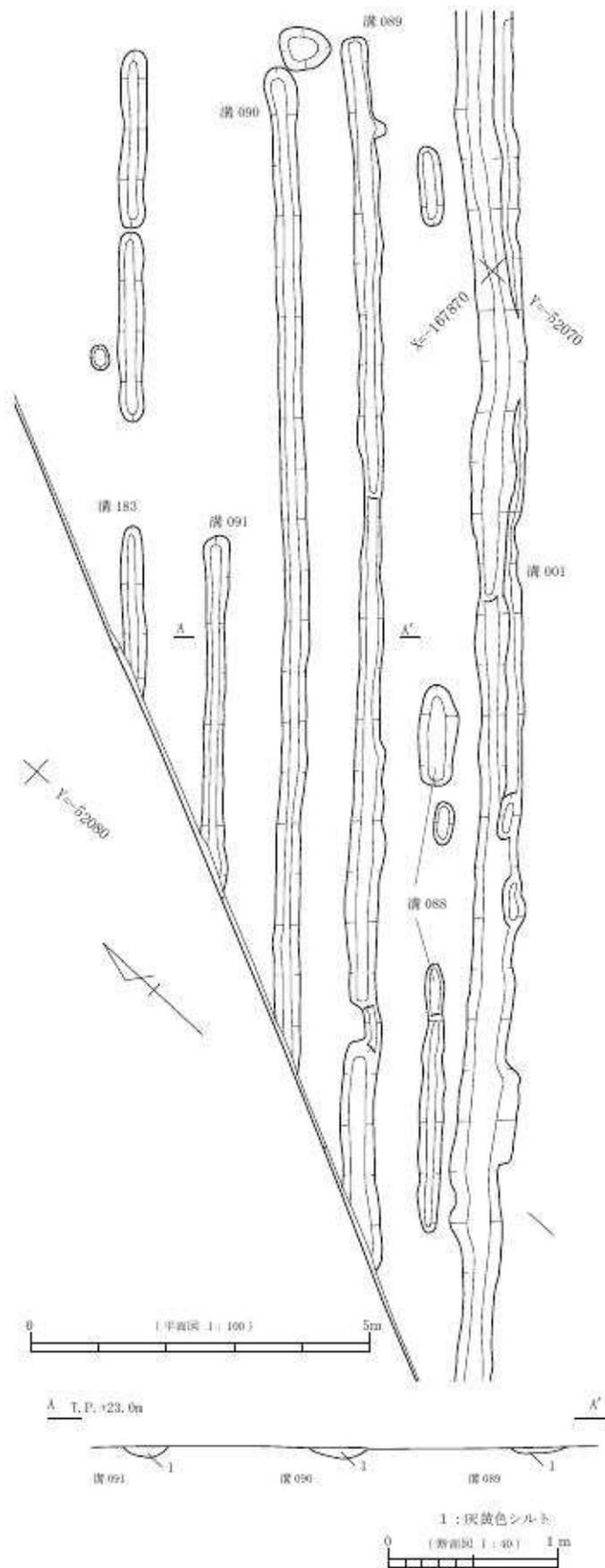


図16 溝089・090・091 平面図・断面図 (1/100・1/40)

溝089(図16、図版2)

B区の北西端部から北半部の、X=-67866、Y=-52069からX=-167879、Y=-52082までの、溝001の北西側の位置で検出した。溝001とほぼ平行に走り、調査区西壁外に延びる。検出長約18m、深さ0.04mを測った。埋土は1層で、黄灰色シルトである。内部から須恵器、土師器、瓦類などが少量出土した。これらによって溝089は中世に比定できるものとする。

溝090(図16、図版2)

B区の北西端部から北半部の、X=-167865、Y=-52070からX=-167875、Y=-52080までの、溝089の北西側の位置で検出した。溝089とほぼ平行に走り、調査区西壁外に延びる。検出長約15m、深さ0.06mを測った。埋土は1層で、黄灰色シルトである。内部から瓦類がごく少量出土した。これらによって溝089は中世に比定できる。なお、溝089、090と並行する溝091、088についても、溝幅や埋土の状況から中世に属する遺構と考えられる。

溝092(図17、図版7)

B区の中央部のX=-167893、Y=-52065からX=-167881、Y=-52080までを、緩く弧を描きながら南東から北西方向に走る溝で、南東端部は調査区東壁外に延びる。幅約0.5m～0.8m、深さは最深部で0.24mを測った。埋土は1層で、黄灰色シルトである。内部から須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器などが少量出土した。これらによって溝092は中世に比定できる。

溝093(図17、図版7)

B区の中央部のX=-167895、Y=-52066からX=-167889、Y=-52073までを、南東から北西方向に走る溝で、南東端部は調査区東

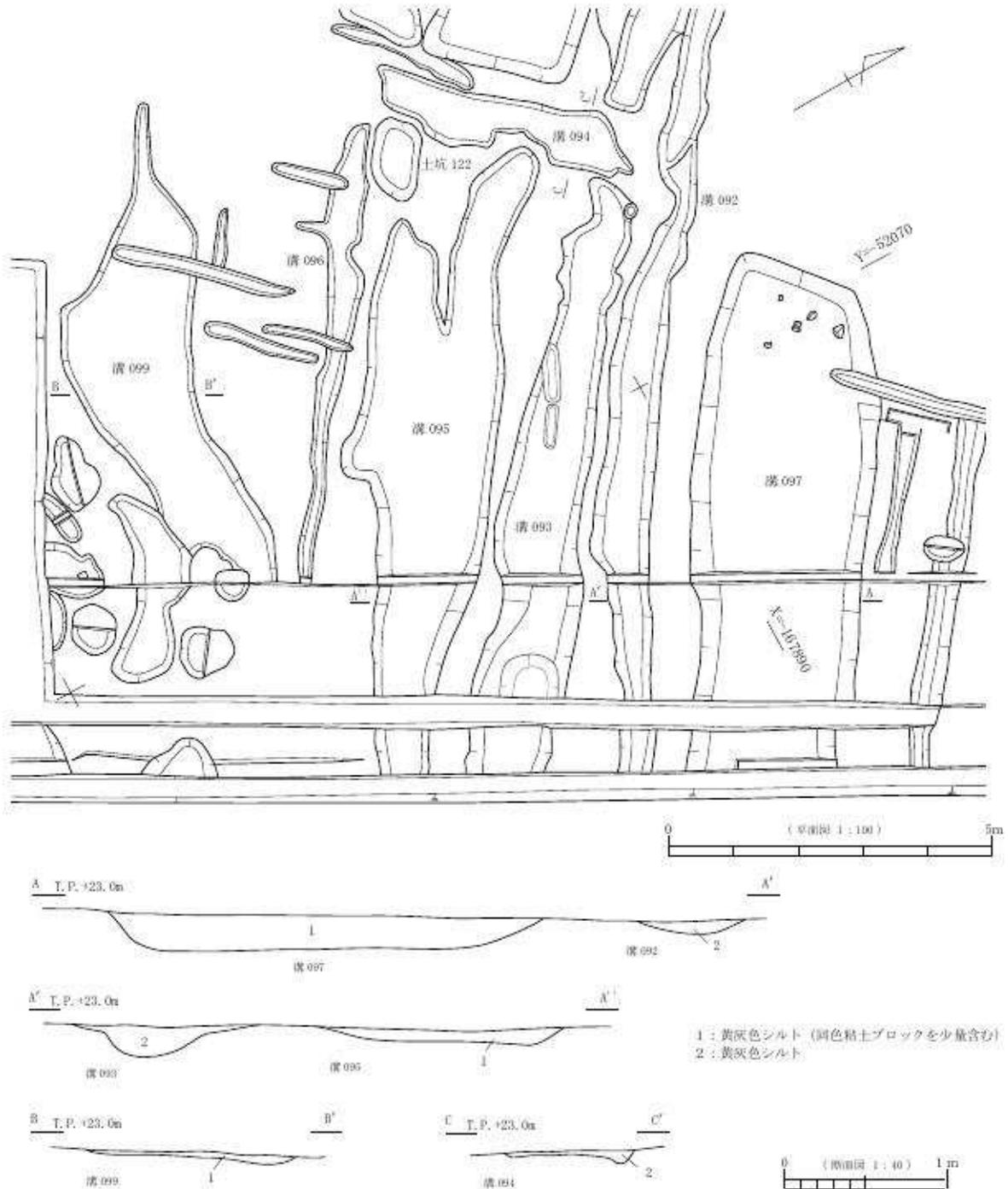


図17 溝092・093・094・095・097・099 平面図・断面図 (1/100・1/40)

壁外に延びる。幅約1.0m～1.4m、深さは最深部で0.15mを測った。埋土は1層で、黄灰色シルトである。内部から土師器、瓦器などがごく少量出土した。これらによって溝093は中世に比定できる。

溝094(図17)

B区の中央部のX=167889、Y=52073からX=167891、Y=52076までを、北東から南西方向に短く走る溝で、幅約0.6m～1.0m、深さは最深部で0.1mを測った。埋土は1層で、黄灰色シルトである。内部から須恵器、土師器、瓦器などがごく少量出土した。これらによって溝094は中世に比定できる。

溝 095 (図 17)

B 区の中央部の X=-167896、Y=-52066 から X=-167890、Y=-52074 までを、南東から北西方向に走る溝で、南東端部は調査区東壁外に延びる。幅約 1.0 m ～ 2.1 m、深さは最深部で 0.13 m を測った。埋土は 1 層で、黄灰色粘土ブロックを少量含む黄灰色シルトである。内部から須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、平瓦などが出土した (図 27、図版 23)。これらによって溝 095 は中世に比定できる。

溝 097 (図 17、図版 7)

B 区の中央部の X=-167891、Y=-52063 から X=-167887、Y=-52071 までを、南東から北西方向に走る溝で、南東端部は調査区東壁外に延びる。幅約 3.0 m、深さは最深部で 0.25 m を測った。埋土は 1 層で、黄灰色粘土ブロックを少量含む黄灰色シルトである。内部から須恵器、土師器、瓦器などが少量出土したほかに、北西端部付近で花崗岩と思われる自然石が置かれた状態で認められた。これらによって溝 097 は中世に比定できる。

溝 099 (図 17、図版 7)

B 区の中央部の X=-167897、Y=-52070 から X=-167895、Y=-52077 までを、緩く弧を描きながら東西方向に走る溝で、幅約 0.3 ～ 2.0 m、深さ 0.06 m を測った。埋土は 1 層で、黄灰色粘土ブロックを少量含む黄灰色シルトである。内部から須恵器、土師器、瓦器などが少量出土した。これらによって溝 099 は中世に比定できる。

溝 100 (図 18、図版 7)

B 区の中央部の X=-167898、Y=-52074 から X=-167881、Y=-52081 までの位置で北側の溝 095 に重なっ

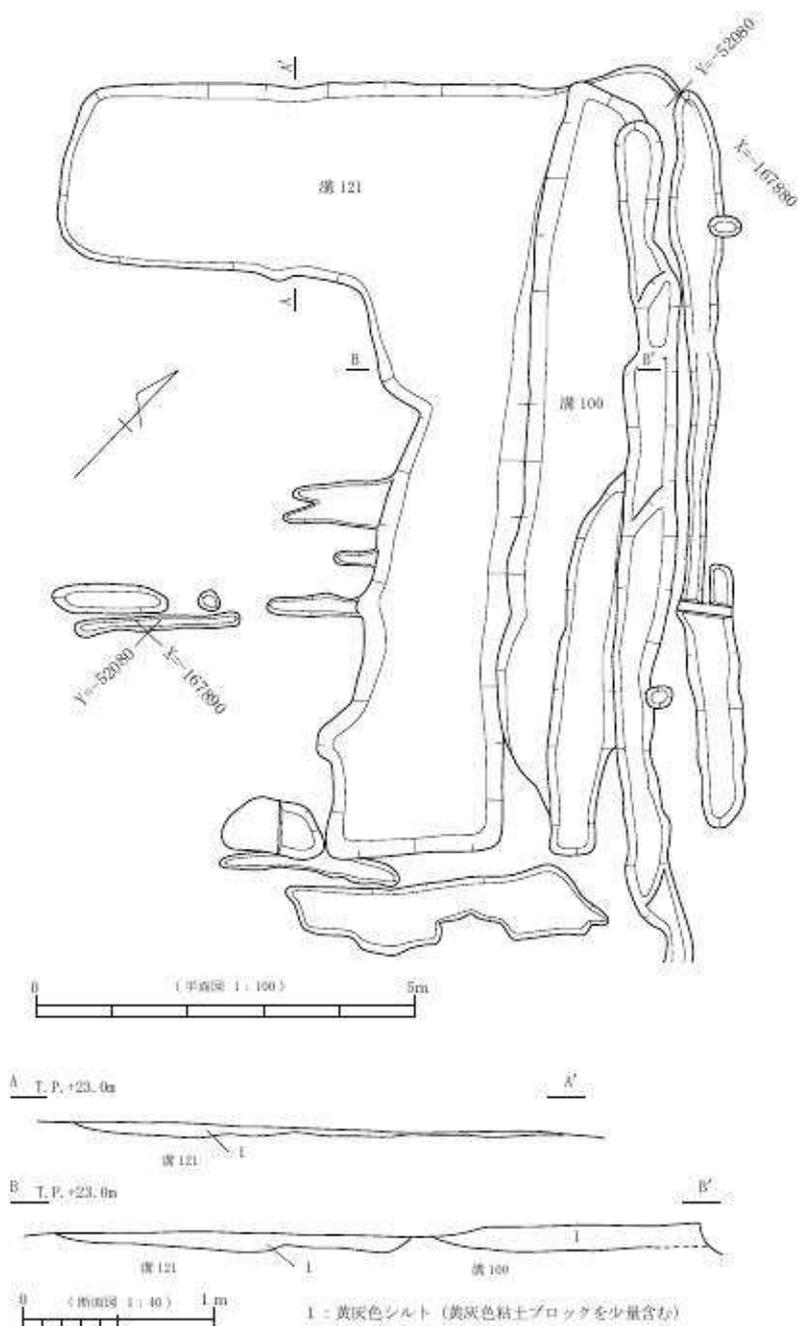


図 18 溝 100・121 平面図・断面図 (1/100・1/40)

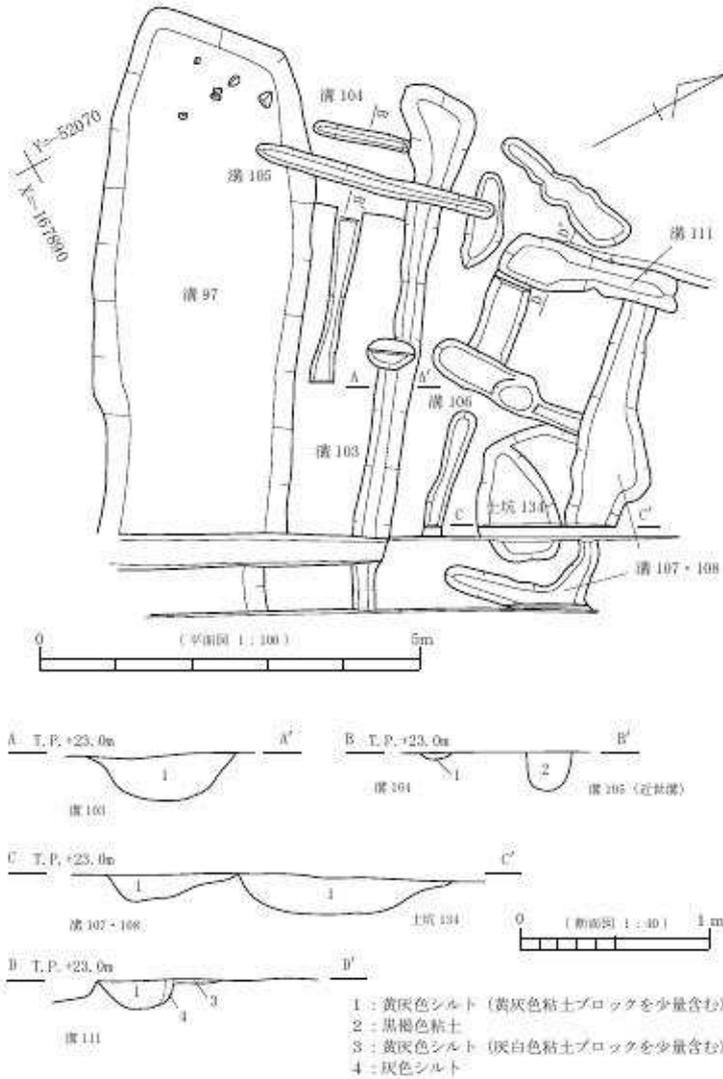


図19 溝103・104・107・108・111
 平面図・断面図 (1/100・1/40)

南東端部は調査区東壁外に延びる。幅約0.3m～1.0m、深さは最深部で0.11mを測った。埋土は1層で、黄灰色粘土ブロックを少量含む黄灰色シルトである。内部から須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器などが少量出土した。これらによって溝103は中世に比定できる。

溝104(図19、図版7)

B区の中央部のX=-167886、Y=-52068からX=-167887、Y=-52069までを、北東から南西方向に短く走る溝で、北東端部付近を溝103に切られている。幅約0.3m、深さ0.03mを測った。埋土は1層で、黄灰色粘土ブロックを少量含む黄灰色シルトである。内部から須恵器、土師器、瓦器などが少量出土した。これらによって溝104は中世に比定できる。

溝107・108(図19)

B区の中央部のX=-167884、Y=-52065からX=-167887、Y=-52061までを、南東から北西方向に走り、その後直角に折れて南西方向に短く延びて終わる溝で、幅約0.3m～1.1m、深さ0.16mを測った。

て切られた状態で検出された、南東から北西方向に走る溝で、幅1.5m、深さ0.02mを測った。埋土は1層で、黄灰色粘土ブロックを少量含む黄灰色シルトである。内部から須恵器、土師器、瓦器などが少量出土した。これらによって溝100は中世に比定できる。

溝121(図18、図版7)

B区の中央部のX=-167868、Y=-52085からX=-167882、Y=-52081までを、南西から北東方向に走り、その後直角に折れて、X=-167890、Y=-52076まで延びる溝で、幅約2.4m～3.0m、深さ0.13mを測った。埋土は1層で、黄灰色粘土ブロックを少量含む黄灰色シルトである。内部から須恵器、土師器、瓦器などが出土した(図27、図版23)。これらによって溝121は中世に比定できる。

溝103(図19)

B区の中央部のX=-167889、Y=-52063からX=-167885、Y=-52068までを、南東から北西方向に走る溝で、

埋土は1層で、黄灰色粘土ブロックを少量含む黄灰色シルトである。内部から土師器、瓦質土器などが少量出土した(図27、図版23)。調査時は2条の溝に分けていたが、埋土、出土遺物などから一連のものと考えられる。溝107・108は中世に比定できる。

溝111(図19)

B区の中央部のX=-167883、Y=-52067からX=-167885、Y=-52066までを、北東から南西方向に短く走る溝で、北東端部付近で溝108を切っている。幅約0.6m、深さ0.03mを測った。埋土は3層に分層でき、黄灰色粘土ブロックを少量含む黄灰色シルト、灰白色粘土ブロックを少量含む黄灰色シルト、灰色シルトなどである。内部から須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器などが少量出土した。これらから溝111は中世に比定できる。

溝113(図20)

B区の北半部のX=-167882、Y=-52059からX=-167880、Y=-52060までを、南東から北西方向に短く走る溝で、北西端部付近で溝115に切られて終わる。幅約0.9m、深さ0.28mを測った。埋土は3層に分層でき、黄灰色シルト、黄灰色粘土ブロックを少量含む黄灰色シルト、灰白色粘土ブロックを少量含む黄灰色シルトなどである。内部から土師器、瓦器などが少量出土した。これらによって溝113は中世に比定できる。

溝115(図20、図版7)

B区の北半部のX=-167878、Y=-52060からX=-167881、Y=-52058までを、南東から北西方向に短く走る溝で、北西端部付近で溝114を切っている。幅約1.0m、深さ0.1mを測った。埋土は1層で、黄灰色粘土ブロックを少量含む黄灰色シルトである。内部から須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器などが少量出土した。これらによって溝115は中世に比定できる。

溝119(図20)

B区の北半部のX=-167883、Y=-52063からX=-167883、Y=-52064までを、北東から南西方向に短く走る溝で、幅約1.0m、深さ0.28mを測った。埋土は1層で、黄灰色粘土ブロックを少

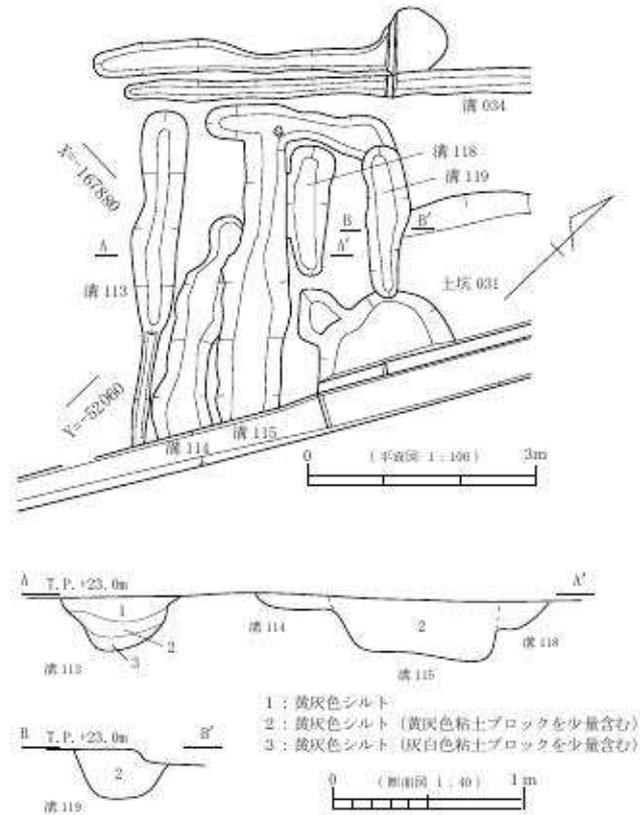


図20 溝113・114・115・119 平面図・断面図 (1/100・1/40)

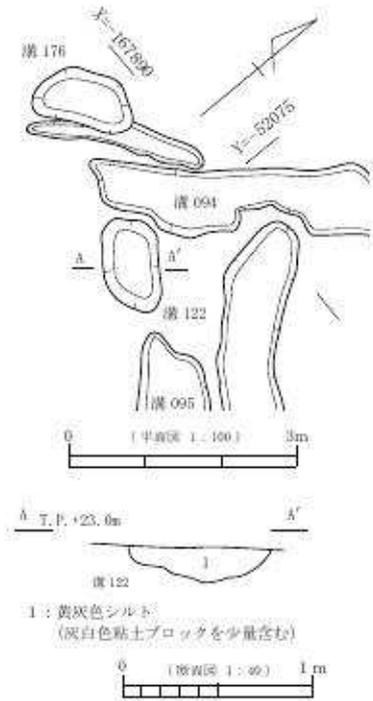


図21 土坑122 平面図・断面図 (1/100・1/40)

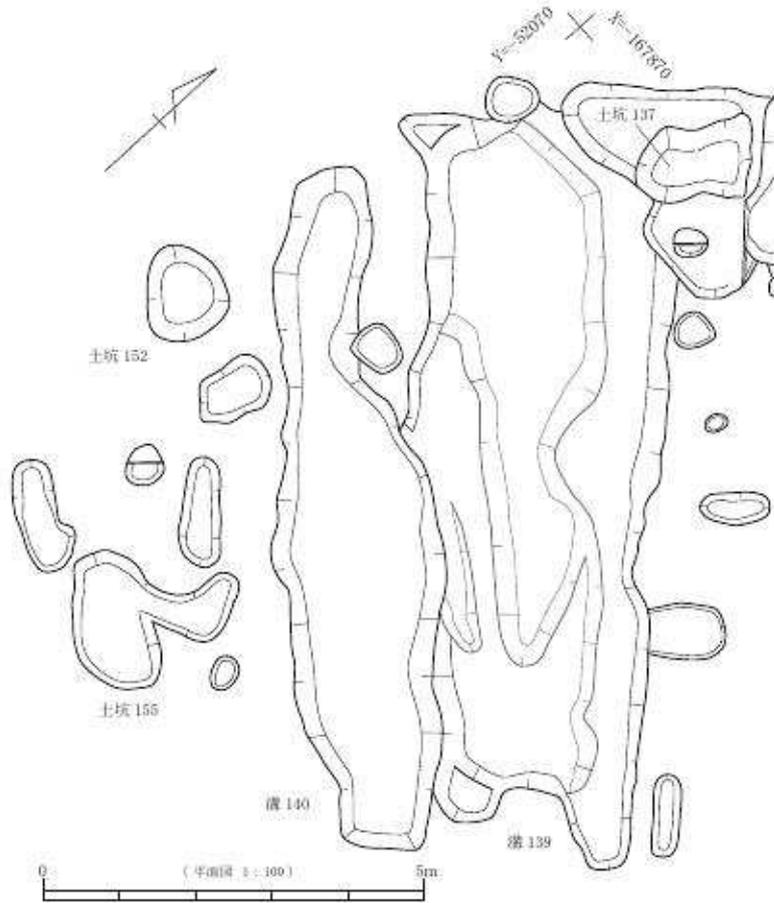


図22 溝139・140、土坑137・152・155 平面図 (1/100)

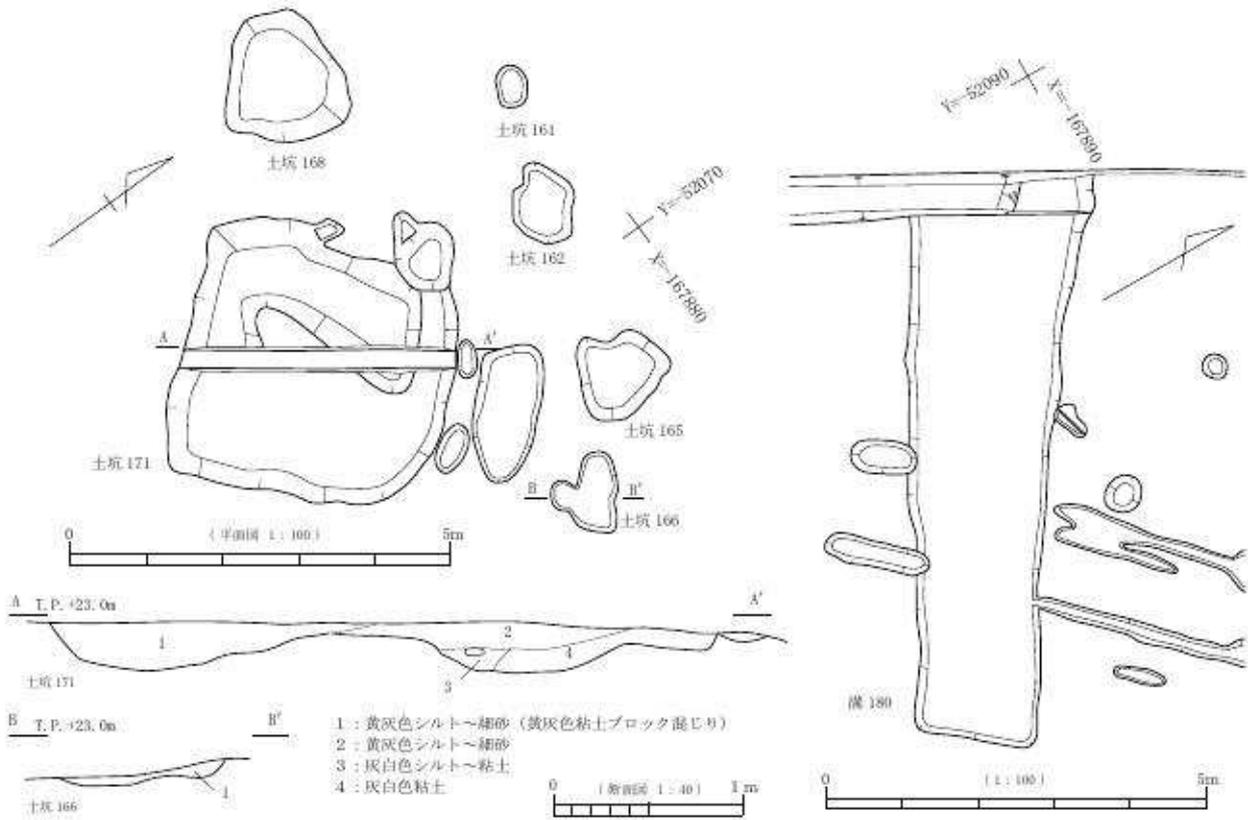


図23 土坑166・171 平面図・断面図 (1/100・1/40)

- 1: 黄灰色シルト～細砂 (黄灰色粘土ブロック混じり)
- 2: 黄灰色シルト～細砂
- 3: 灰白色シルト～粘土
- 4: 灰白色粘土

図24 溝180 平面図 (1/100)

量含む黄灰色シルトである。内部から土師器、瓦器などが少量出土した。これらによって溝 119 は中世に比定できる。

土坑 122(図 21、図版 8)

B 区の中央部の X=-167892、Y=-52075 付近で検出した。不整楕円形状を呈する土坑で、長軸 1.2 m、短軸 0.8 m、深さ 0.18 m を測った。埋土は 1 層で、灰白色粘土ブロックを少量含む黄灰色シルトである。内部から土師器、瓦器などが出土したため(図 28、図版 24)、土坑 122 は中世に比定できる。

土坑 137(図 22、図版 8)

B 区の北端部の X=-167870、Y=-52068 付近で検出した。不整楕円形状を呈する土坑で、長軸 1.6 m、短軸 0.9 m、深さ 0.18 m を測った。埋土は 1 層で、褐灰色シルト～粗砂である。内部から須恵器、土師器、磁器などが少量出土した。これらによって土坑 137 は中世に比定できる。

溝 139(図 22、図版 8)

B 区の北半部の X=-167872、Y=-52070 から X=-167877、Y=-52063 までを、南東から北西方向に短く走る溝で、幅約 1.0 m～2.0 m、深さ 0.28 m を測った。埋土は 2 層に分層でき、黄灰色シルト、黄灰色粘土ブロックを少量含む黄灰色シルトである。内部から土師器、瓦器などが少量出土した。これらによって溝 139 は中世に比定できる。

土坑 152(図 22、図版 8)

B 区の北半部の X=-167877、Y=-52069 付近で検出した。不整楕円形状を呈する土坑で、長軸 1.2 m、短軸 0.7 m、深さ 0.1 m を測った。埋土は 1 層で、黄灰色シルト～細砂である。内部から土師器、瓦質土器などが少量出土した。これらによって土坑 152 は中世に比定できる。

土坑 155(図 22、図版 8)

B 区の北半部の X=-167880、Y=-52068 付近で検出した。長軸 2.3 m、短軸 1.0 m の楕円形状の土坑の、長辺の一辺に幅 0.5 m の、くの字状の土坑が付いた形状を呈する。深さ 0.12 m を測った。埋土は 1 層で、黄灰色シルト～細砂である。内部から土師器、瓦器などが少量出土した。これらによって土坑 155 は中世に比定できる。

土坑 166(図 23)

B 区の北半部の X=-167883、Y=-52067 付近で検出した。長軸 1.1 m、短軸 0.6 m の楕円形状の土坑の、長辺の一辺に長軸 0.4 m、短軸 0.3 m の楕円形状の土坑が付いた形状を呈する。深さは最深部で 0.08 m を測った。埋土は 1 層で、黄灰色粘土ブロック混じりの黄灰色シルト～細砂である。内部から瓦器がごく少量出土した。これらによって土坑 166 は中世に比定できる。

土坑 171(図 23)

B 区の北半部の X=-167885、Y=-52071 付近で検出した。不整形形状を呈する土坑で、長軸 3.6 m、短軸 3.5 m、深さ 0.26 m を測った。埋土は 4 層に分層でき、黄灰色粘土ブロック混じりの黄灰色シルト～細砂、黄灰色シルト～細砂、灰白色シルト～粘土などである。内部から土師器、瓦器、瓦質土器などが出土した(図 28、図版 24)。これらによって土坑 171 は中世に比定できる。

溝 180(図 24、図版 8)

B 区の南半部の X=-1678895、Y=-52082 から X=-167891、Y=-52089 までを、南西から北東方向に走り、

調査区西壁外に延びる溝で、幅約1.6m～2.4m、深さ0.52mを測った。埋土は3層に分層でき、黄橙色混じりの浅黄色シルト、黄橙色シルト、黄橙色細砂などである。内部から土師器、瓦器、などが少量出土した。これらによって溝180は中世に比定できる。

掘立柱建物1 (図25、図版5)

ピット185～194からなる掘立柱建物である。2間×3間ないしはそれ以上の規模で、調査区西壁外に延びる可能性がある。側柱の他に検出範囲で2箇所(ピット186、187)ないしはもう1箇所の束柱(ピット185)を持つ総柱の建物と思われる。建物の主軸はN-25°-Wを指す。梁間5.5m×桁行間6.5mないしはそれ以上の規模で、柱間は梁間が約3m、桁行間が約2mを測った。柱穴は径0.2m～0.6mの円形ないしは楕円形状で、埋土は暗灰色粘質土のものが多数を占める。188、191、194の埋土内より土師器、瓦器がごく少量出土した。これらによって掘立柱建物1は中世に比定できるものと考えるが、

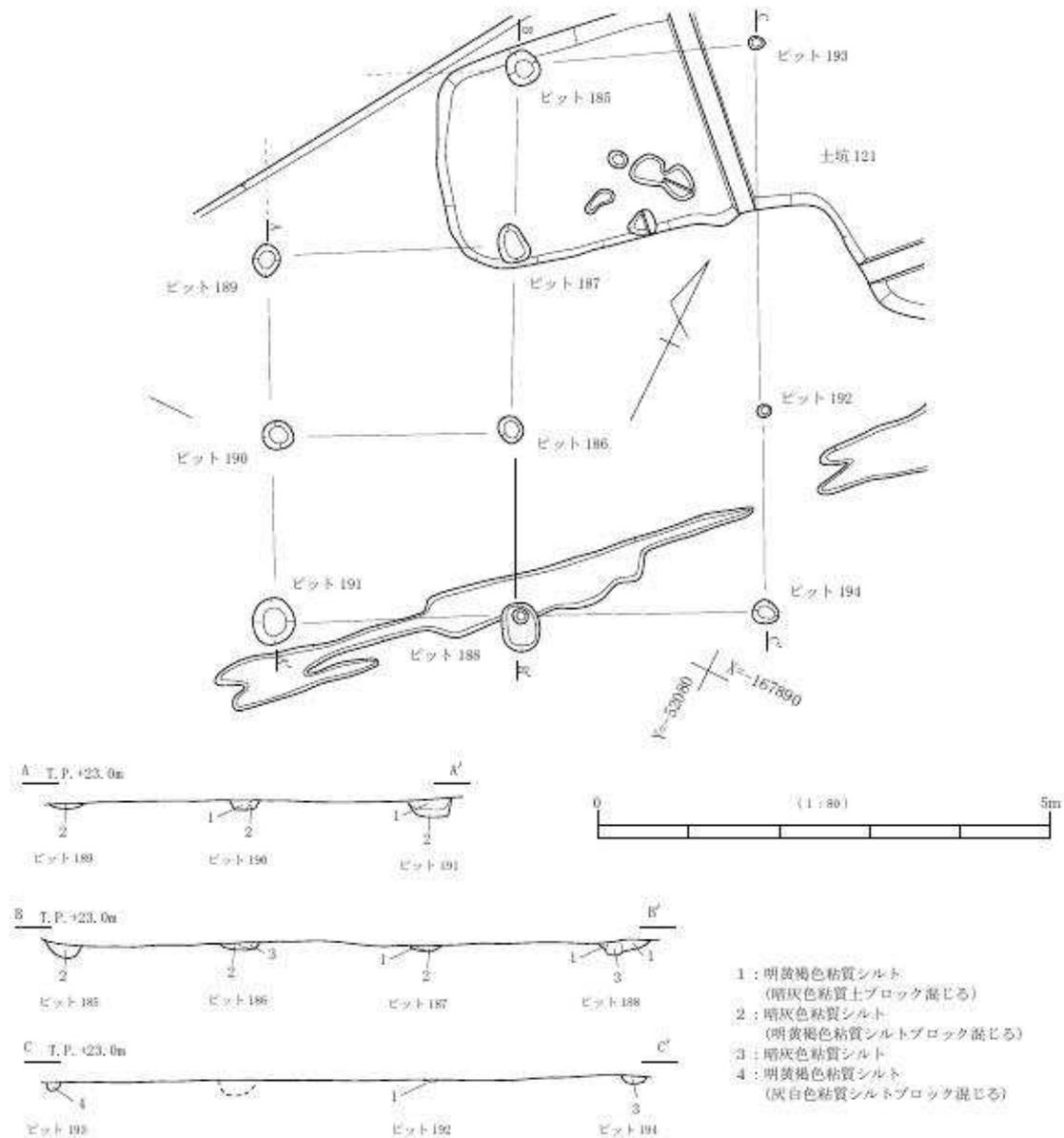


図25 掘立柱建物1 平面図・断面図 (1/80)

185、187、193 が中世の溝 121 に切られているため、掘立柱建物 1 は溝 121 より前出のものと言える。
 ビット 197(図 6)

B 区の北半部の X=-167889、Y=-52072 付近で検出した。楕円形状を呈するビットで、径約 0.2 m、深さ 0.09 m を測った。埋土は 1 層で、灰白色粘土ブロックを少量含む黄灰色シルトである。内部から須恵器、土師器などが出土した (図 28、図版 24)。

3. 古代以前の遺構

落とし込み 085(図 26)

B 区の南東端部で検出した。検出したのは東西約 7 m、南北約 3 m の三角形状の平面で、遺構は南壁および東壁の外側に延びており、全体の形状は不明である。検出部分の深さは約 0.5 m を測った。埋土は 1 層で、礫を大量に含む暗灰色砂質土である。内部から須恵器、土師器、丸瓦、平瓦などが大量に出土した (図 28、図版 24)。これらによって落ち込み 085 は古代に比定できる。

自然河川 084(図 7、図版 6)

A 区・C 区の北端部付近で検出した。東北東から西南西方向の自然流路で、北側の肩部は調査区北壁の外にある。幅 21.0 m 以上で、約 1.5 m まで掘り下げたが底面は確認できなかった。埋土は 1 層で、茶褐色砂礫層である。掘削範囲内では遺物が認められず、今回の調査結果では時期不明と言わざるを得ないが、西側に隣接するマンション建設の際に、和泉市教育委員会によって実施され調査において検出されたといわれる、弥生時代の自然河川につながる可能性がある。

4. 遺物 (図 27・28、図版 23・24)

図 27 - 1・2 は瓦器碗で溝 121、溝 178 から出土した。同図 3 は須恵質の小皿で溝 017、同図 4 は土師器小皿で溝 087 から出土した。同図 5 は瓦質羽釜で溝 107・108 から出土した。同図 6・7 は平瓦、図版 23 - 3 は瓦質羽釜とともに溝 095 から出土した。同図 8 は砂岩の砥石で溝 025 から出土した。縄文～弥生時代遺物の混入であろう。この他焼土塊 (図版 23 - 10・14)、結晶片岩破片 (同図版 18) などが出土している。

図 28 - 1・3 は B 区第 1 面検出の耕作溝から出土した弥生時代中期の壺口縁部、弥生土器甕の底部である。同図 2 は土坑 119 から出土した弥生中期の壺底部である。土坑 122、土坑 171、ビット 197 からは土師器皿が出土している (同図 9～11)。

落とし込み 085 からは須恵器坏身 (4)、壺口縁部 (5)、こね鉢 (6)、土師器鍋 (12)、土師器二重口縁壺口縁部 (図版 24 - 11) などが出土している。

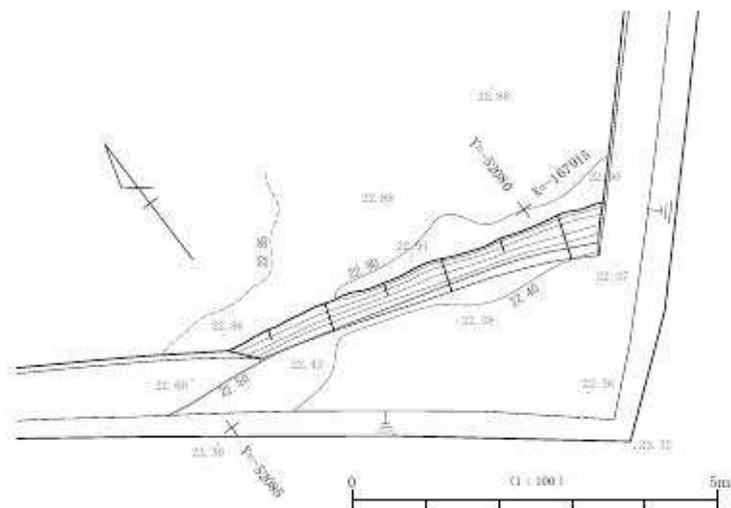


図 26 落とし込み 085 平面図 (1/100)

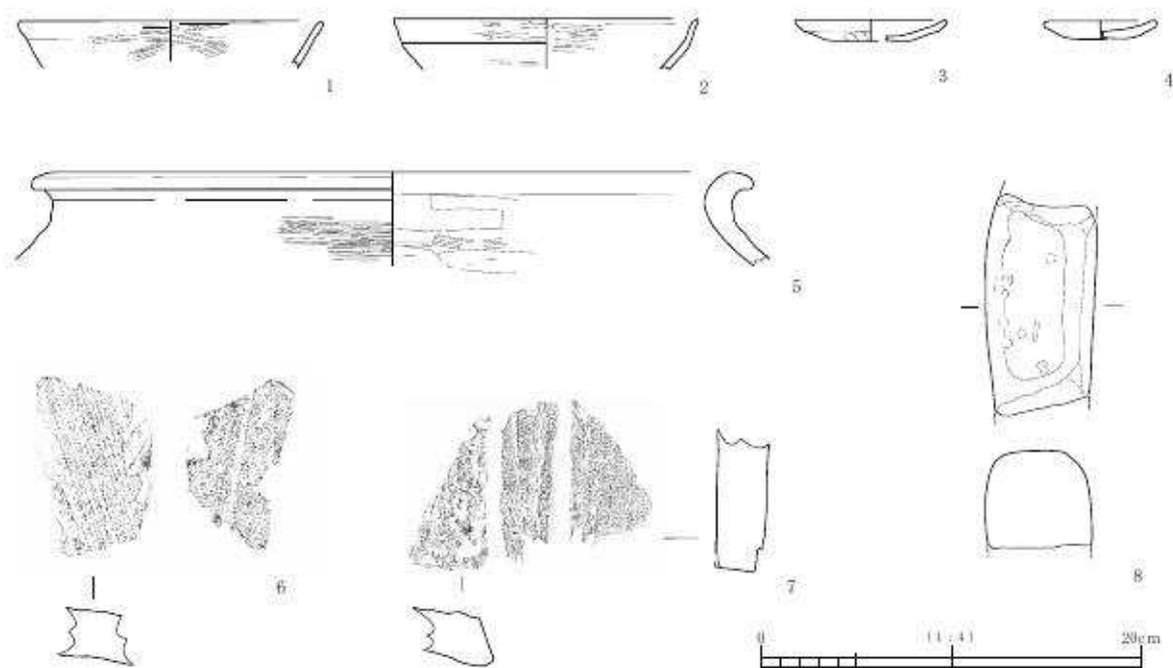


図27 A・B・C区 溝出土遺物 (1/4)

1 : 溝121, 2 : 溝178, 3 : 溝017,
4 : 溝087, 5 : 溝107, 6・7 : 溝095, 8 : 溝025

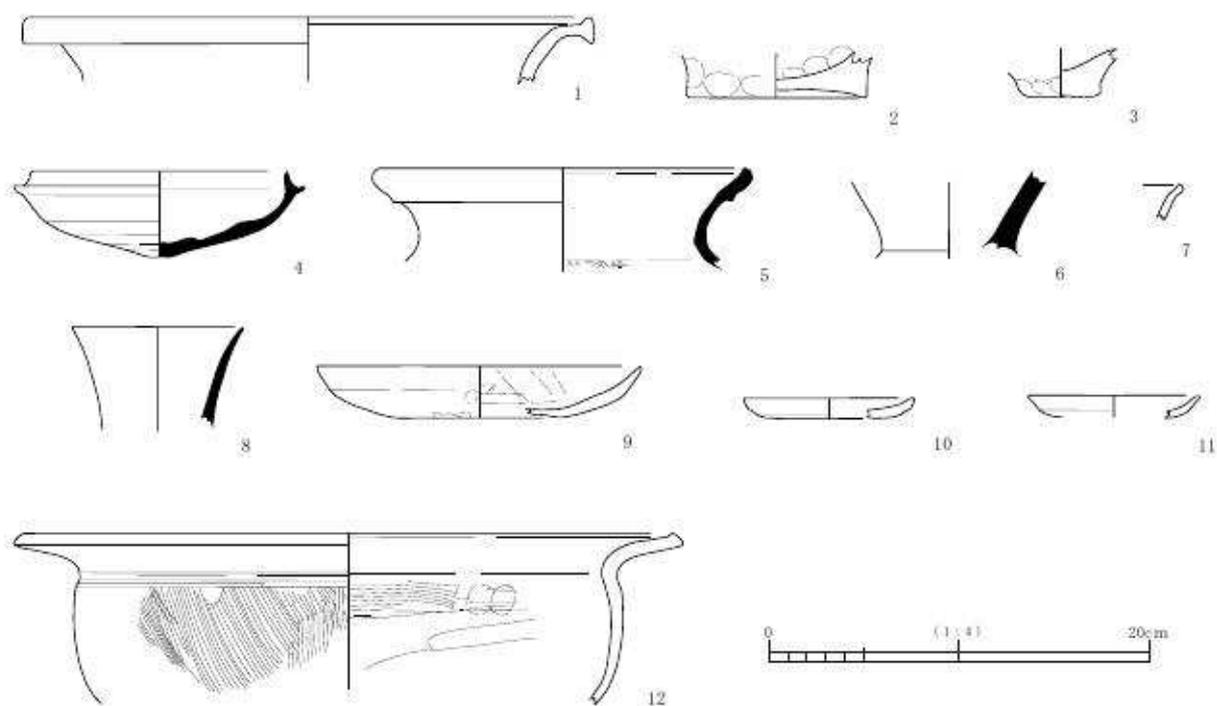


図28 A・B・C区 土坑等出土遺物 (1/4)

1・3 : 耕作溝群, 2 : 土坑119, 8・9 : 土坑122,
10 : 土坑171, 11 : ピット197, 4～7・12 : 落ち込み085

(2) 第2面

第2面はB区南半部以南で認められた9層灰色粘質シルト上面をベースとする遺構面で、B区中央部付近では7層黒褐色粘質シルト上面がこれに相当する。検出された遺構は土坑、溝などで、出土した遺物から古代の遺構面と考えられる。

土坑 220、土坑 221、土坑 222、溝 223(図 29、図版 8・9)

これらの遺構は検出時はX=-167900、Y=-52075からX=-167900、Y=-52088までの範囲で検出された。検出時は一連の不定形土坑としていたが、掘削の際に分離していったので、その時点でそれぞれ遺構番号を付して遺物を取り上げた。深さは0.06m～0.3mと幅があるが、埋土は明黄褐色シルト混じりの灰黄色シルトであった。内部から土師器、黒色土器A類などが出土した(図版 24-5・6)。これらによって土坑 220、土坑 221、土坑 222、溝 223などは古代に比定できるものとする。また土坑 238からは弥生土器甕が出土している(図版 24-15)。

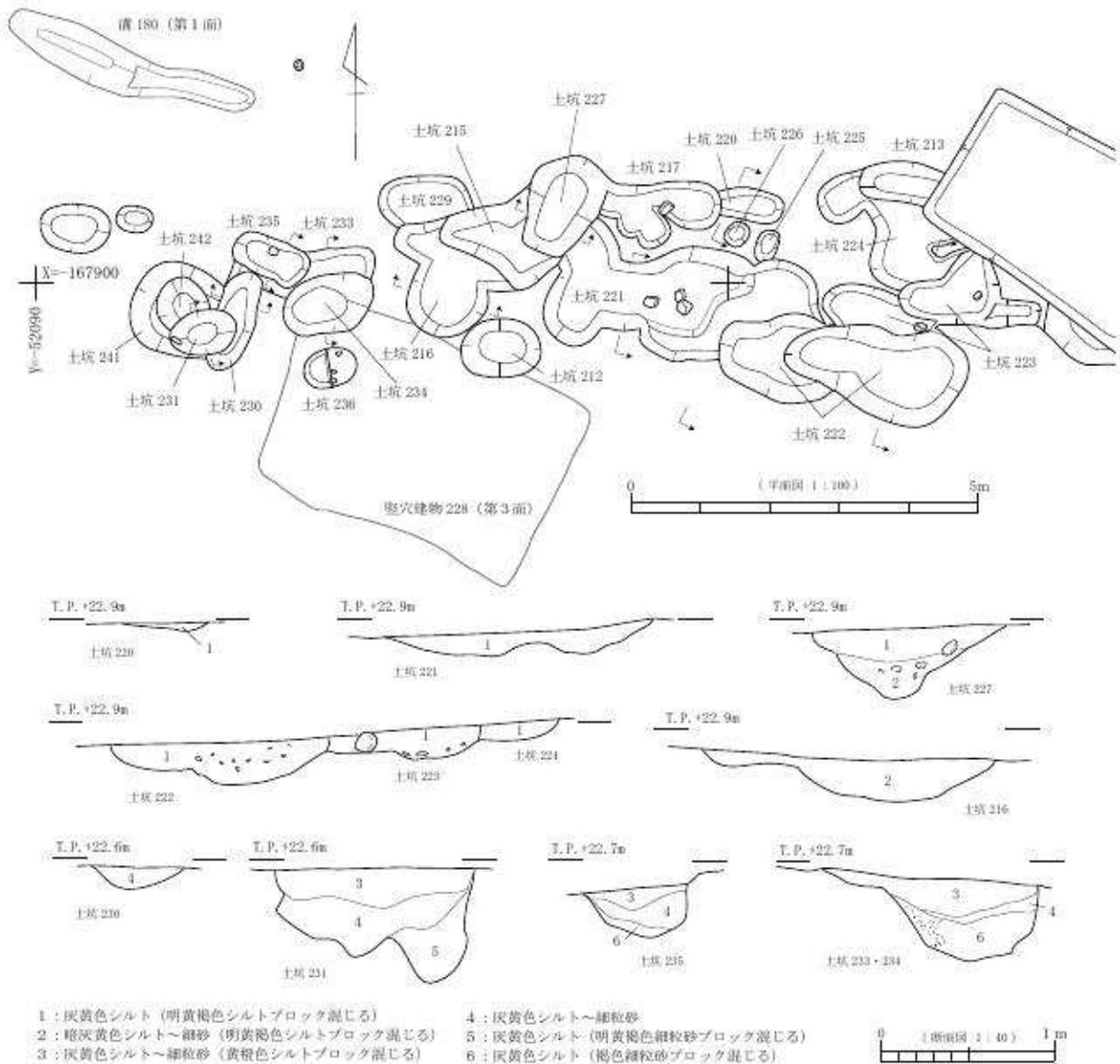


図 29 土坑 220・221・222、溝 223 平面図・断面図 (1/100・1/40)

(3) 第3面

B区南半部で7層をベースとする自然流路が検出されたが、その北側肩部付近の7層上面で古墳時代中期の遺構を検出した。

竪穴建物 228 (図30・31、図版10・11)

B区南半部の X=-167902、Y=-52084 付近で検出した。長方形を呈する竪穴建物で、後世の削平を受けて遺構の上半部を欠損しているため、正確な規模は不明であるが、現状で長軸 4.0 m、短軸 2.9 m、深さ 0.15 m を測った。埋土は 2 層が部分的に残存しており黄灰色微砂～シルト、明黄褐色微砂～シルトである。主軸はほぼ東西方向を指す。支柱穴と考えられるピットは認められなかったが、北東端部付近に造り付けのカマドの痕跡と考えられる固く焼け締まった部分が認められた。内部から土師器が出土した。造り付けのカマドが平面プランの端に設置されていることや、出土遺物より竪穴建物 228 は古墳時代前期後半から中期初頭に比定できるものとする。

遺物は床面と考えられる 3 層上から出土している (図30)。図30-1 は韓式系軟質土器の甕である。

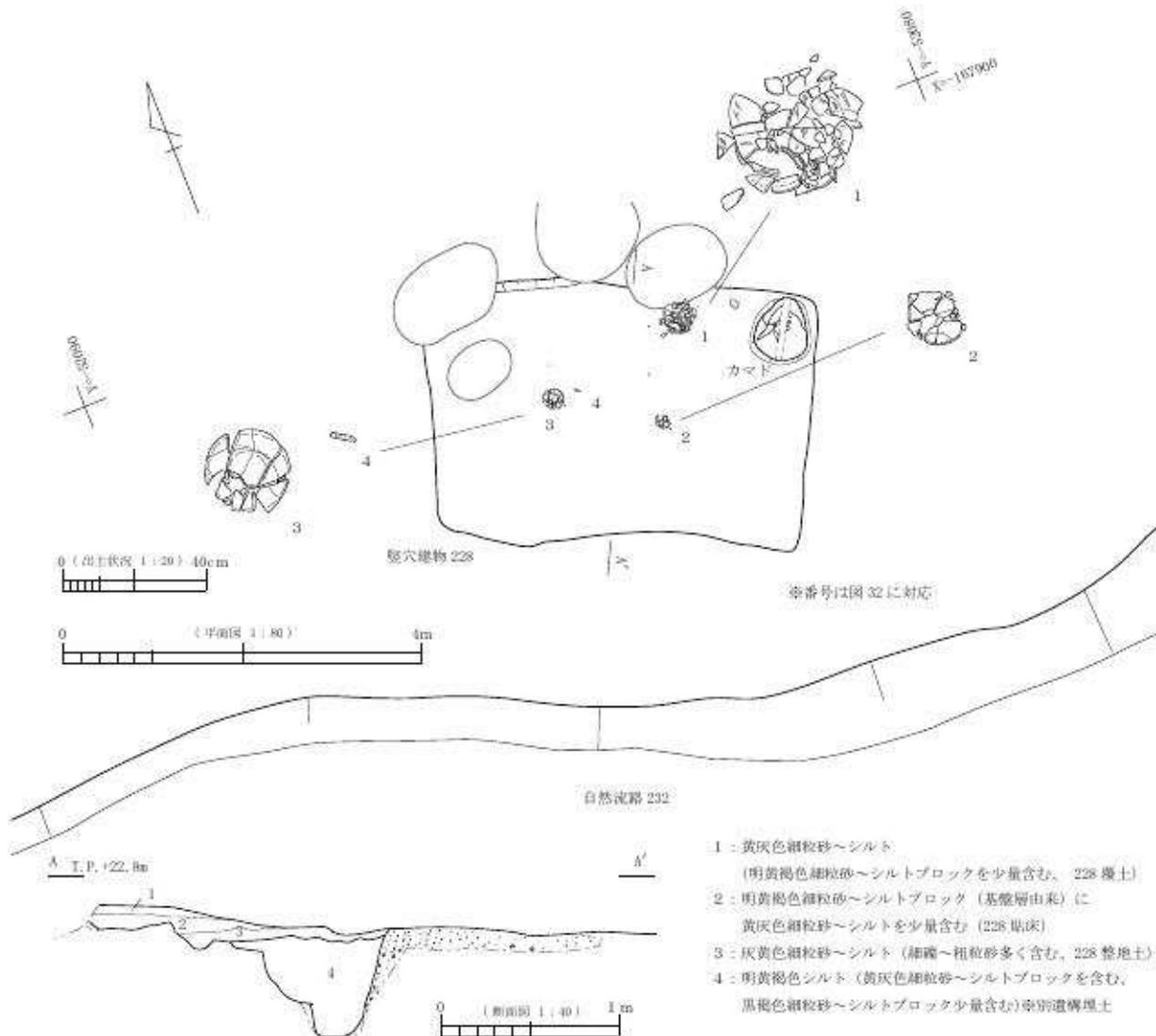


図30 竪穴建物 228 平面図・断面図・遺物出土状況図 (1/80・1/40・1/20)

外傾する口縁は内外面ともにヨコナデ調整で、やや肥厚し、端部は面をもたせる。体部外面はタタキ目が施され、内面はナデ調整で部分的にユビオサエが認められる。底部は丸い。同図2は土師器甕で口縁は外傾し端部に面をもつ。口縁部から体部の外面はハケ目調整で、内面は板状工具によるナデないしはケズリである。同図3は土師器高坏の坏部で口縁端部はナデ調整で面をもつ。また坏底部には稜をもち、坏底部外面には棒状工具による刺突が認められる。内外面ともに摩耗により調整は不明瞭である。同図4は鉄器で刀子とみられる。

自然流路 232 (図6・33・34、図版11)

調査区の南東端部を東から西方へほぼ東西方向に流れる流路を検出した。調査区内では北肩部から中央付近を検出したが、南肩部は調査区南壁外にあるため、川幅は

不明であるが、検出最大長 11 m を測った。埋土は 10 層灰色粘質シルト混じりの明赤褐色シルト、11 層灰色粘質シルト、12 層明赤褐色シルト混じりの灰色粘質シルト、13 層褐灰色粘質シルト、14 層黒褐色粘質シルトの 5 層が認められ、これらはそれぞれに遺物を包含しており、基本的には 14 層からは古墳時代前期末～中期初頭、10 層から 13 層にかけては古墳時代後期～奈良時代を主体とするものが出土

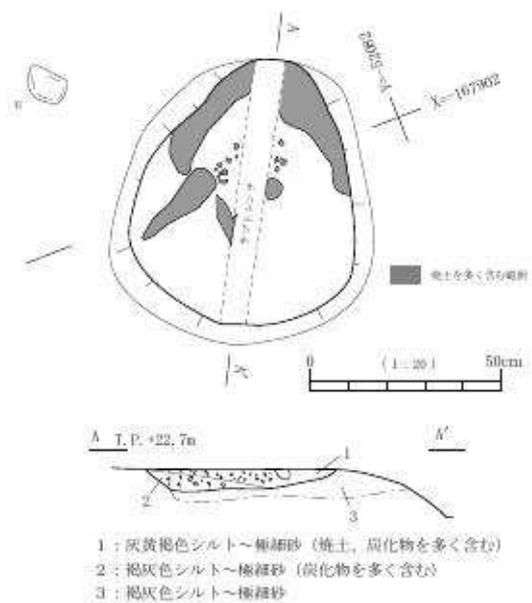


図 31 竪穴建物 228 カマド
 平面図・断面図 (1/20)

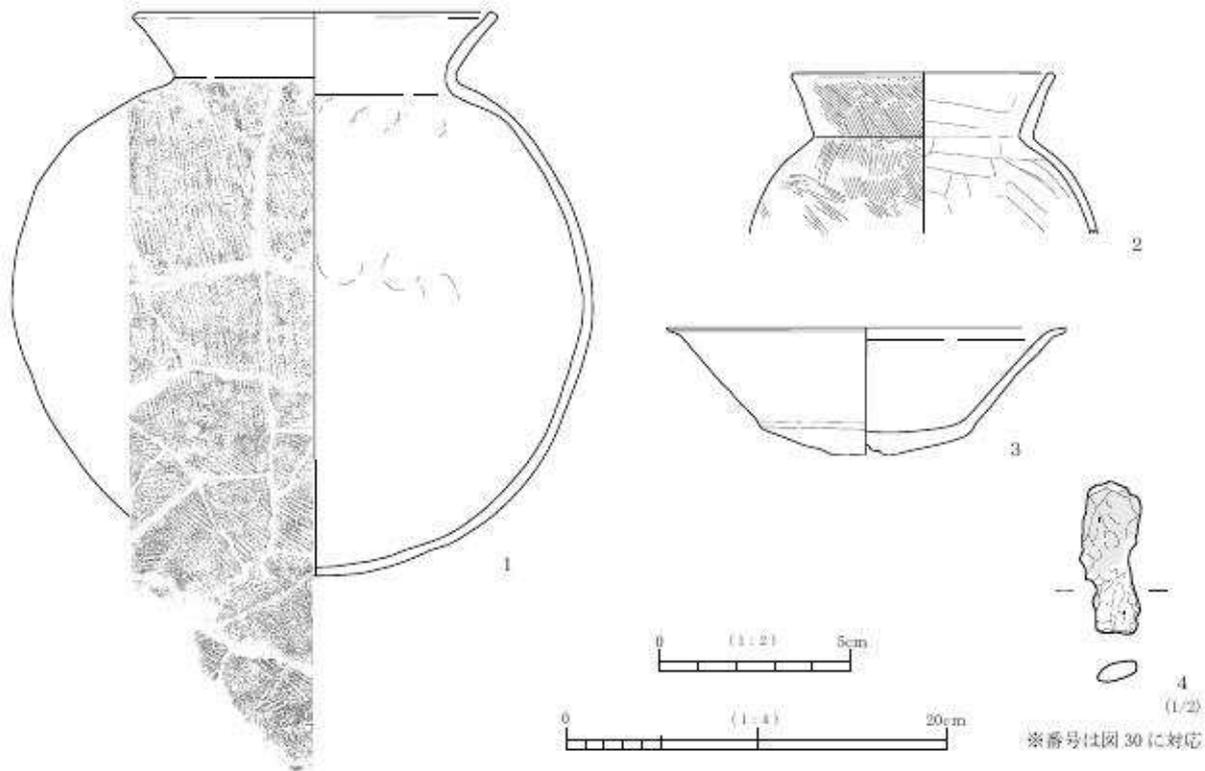


図 32 竪穴建物 228 出土遺物 (1/4・1/2)

した。奈良時代に属する遺物には流路内の層相が地点により複雑であったこともあり、14層として取り上げた場合も含まれる。しかし流路内から出土する遺物のあり方からは、自然流路 232 は古墳時代前期には形成されていたものと考えられる。また、流路の直上に堆積した9層、8層などからの出土遺物によって、流路は奈良時代～平安時代には埋没したものと考えられる。この自然流路 232 の14層は暗色帯であり、堆積速度が緩やかであった時期があることを示す。14層に遺物が認められるのは古墳時代前期後半以降であり、先述の竪穴建物 228 と時期的に近いことが指摘できる。

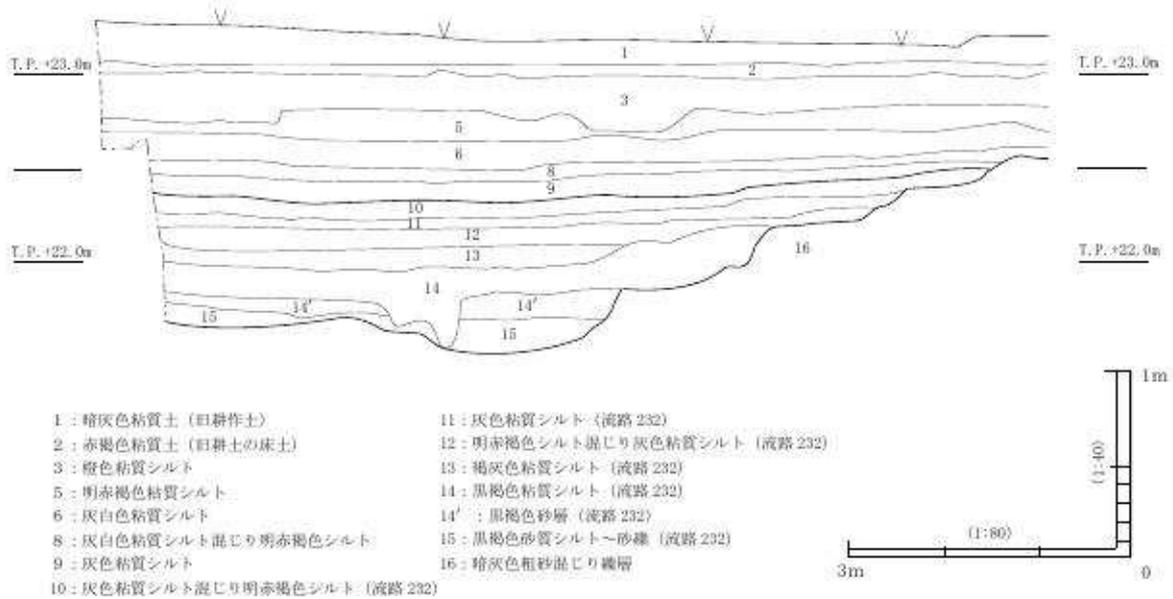


図 33 自然流路 232 断面図 (1/80・1/40)

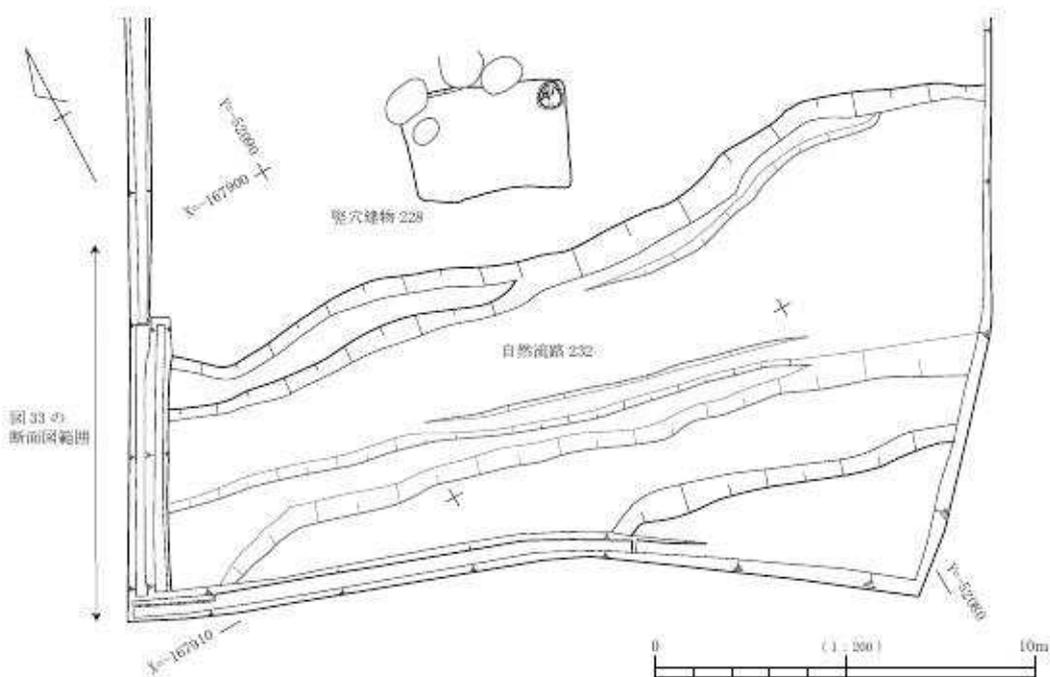


図 34 自然流路 232 平面図 (1/200)

第3章 調査の成果

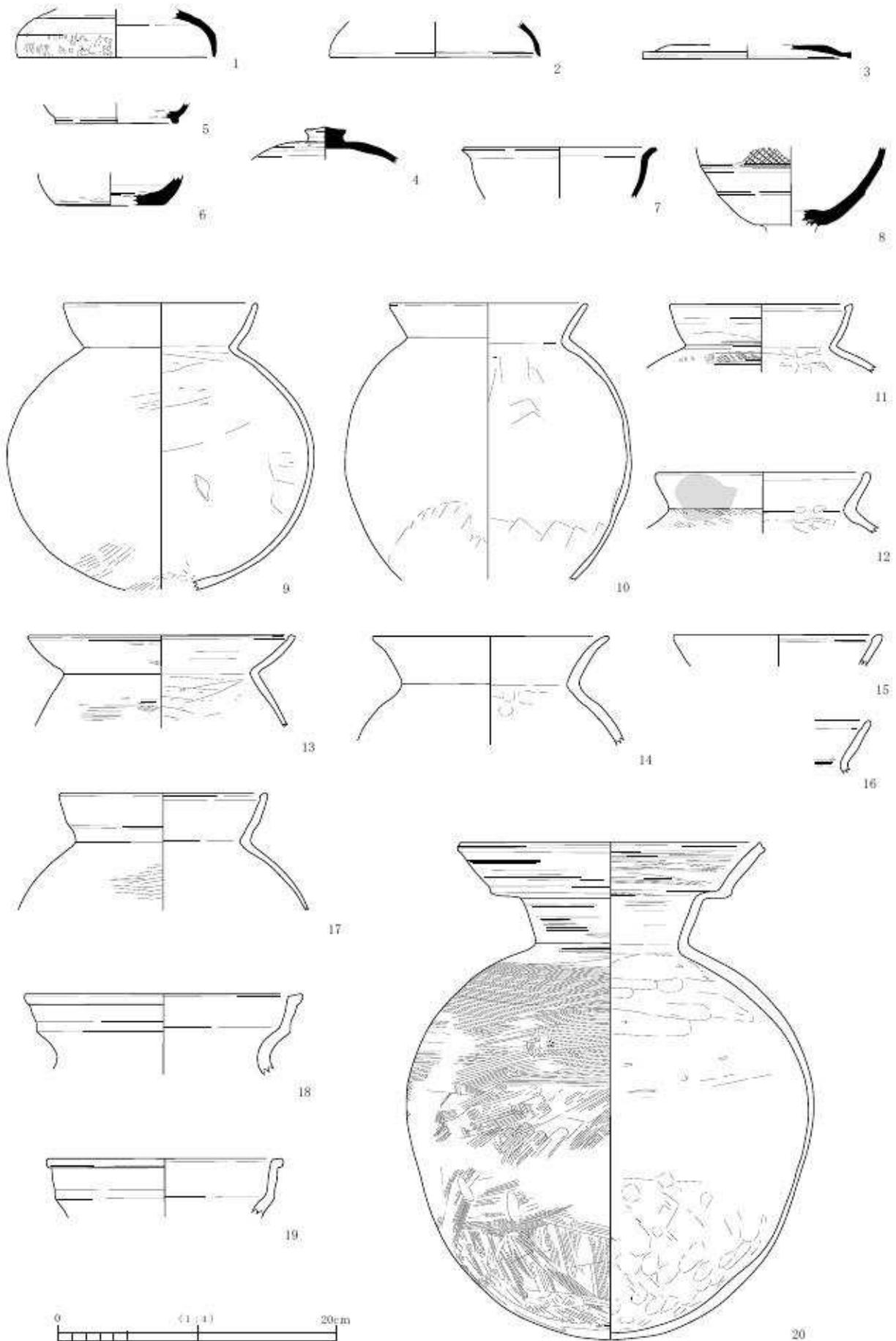


図35 自然流路232 出土遺物・1 (1/4)

1~20: 14層

遺物（巻頭図版、図35・36、図版26～29）は14層出土の遺物である。10～13層の出土遺物は後段の包含層出土遺物で触れる。

図35-1～4は須恵器蓋で1はⅡ形式第3段階（中村2001）、2はⅡ形式第5段階。3・4は坏B蓋（古代の土器研究会編1992）で奈良時代に属する。同図5は坏B、同図6は坏である。同図7は鉢、同図8は台付鉢もしくは壺とみられ、5世紀代に属すると考えられる。

図35-9～20、図36-1～22は土師器である。同図9～17は土師器甕である。口縁部が外傾、外半するもの（10・14）、内湾するものがみられる。口縁部外面はいずれもヨコナデ、一部にハケメが認められる（13）。体部外面はいずれもハケメ調整、体部内面はケズリが施される。同図18～20は二重口縁壺である。20は体部半ばでかろうじて接合するもので、やや縦長の球形に外傾する頸部をもち口縁部も外傾し端面をもつ。口縁部から体部外面、口縁部内面はハケメ、体部内面はケズリであるが下半部は後にナデ調整される。底部内面周辺にはユビオサエが明瞭に残る。14層中で横倒しの状態で検出された（図版11-c）。同図18・19は20とはやや異なり口縁端部を外方に曲げて面をもたせている。内外面ともにナデ調整されている。

図36-1は甕を模した土師器である内外面ともにナデ調整されており、体部中央の円孔あたりに粘土継ぎ目が認められる。同図2は小型丸底壺で器面調整は不明瞭だが、体部外面下半は板状工具によるナデが認められる。体部内面はケズリが認められる。同図3は小型の壺で厚い底部をもち、外面はナデ、内面はユビオサエである。同図4は器台で全体ナデ調整されている。透かし穴は4孔で部分的に黒斑が認められる。同図5は小型の甕である。同図6～7は鉢である。7は底部がやや丸く板状工具による強めのナデ調整が認められる。同図9～20は高坏で、9～14は坏部、15～19は脚部である。14は碗形だが、他は口縁部が外反する形態をとる。いずれも内外面ともにナデ調整で、坏底部外面には脚部と接合するための刺突が認められる（図版27）。13は刺突の周囲に円弧状に棒状工具により凹部を形成している（図版27-4）。脚部は屈曲するもの（15）と緩やかに広がるものが認められる。17は強めのナデで面取りのようになっている。18は縦方向のナデが施される。21は製塩土器である。22は甕もしくは鍋の把手である。

以上の土師器は、布留Ⅲ式（西村・池峯2006）を中心とする時期と捉えられる。

図36-23～25は鉄製品である。1は鉄鐸とみられる鉄製品である。長さ4.1cm、最大幅1.4cmで円錐形を呈し断面は円形を呈する。鉄鐸には中に舌を吊るすために頂部に懸通孔があるが、本例には明確には認められず、頂部には切断したような痕跡が認められる。また中に舌は存在しなかった。X線写真においても頂部の孔の有無は不明確である。また鉄板を曲げた際の合わせ目についても不明確である（図版33-23）。鉄鐸の出土例の多くが懸通孔と、鉄板の合わせ目が認められるのに対して、本例はこの点で異なっているので、他製品の可能性もある。なお鉄鐸は古墳時代中期（5世紀中葉（TK216型式期））前後に出現し古墳時代を通じて認められ、また古墳からの出土例が多いが集落跡等の遺跡からの出土例もあるという（早野2008）。本例が出土した14層は上記の土師器から古墳時代前期後半以降の堆積であるが、須恵器には5世紀以降のものも含まれるため、ここではその帰属を古墳時代前期後半～後期の時期幅で捉えておく。同図24は棒状品である。長さ2.8cm、幅0.8cmを測る。同図25は板状の鉄製品である。全長3.5cm、幅2.7cmを測る。

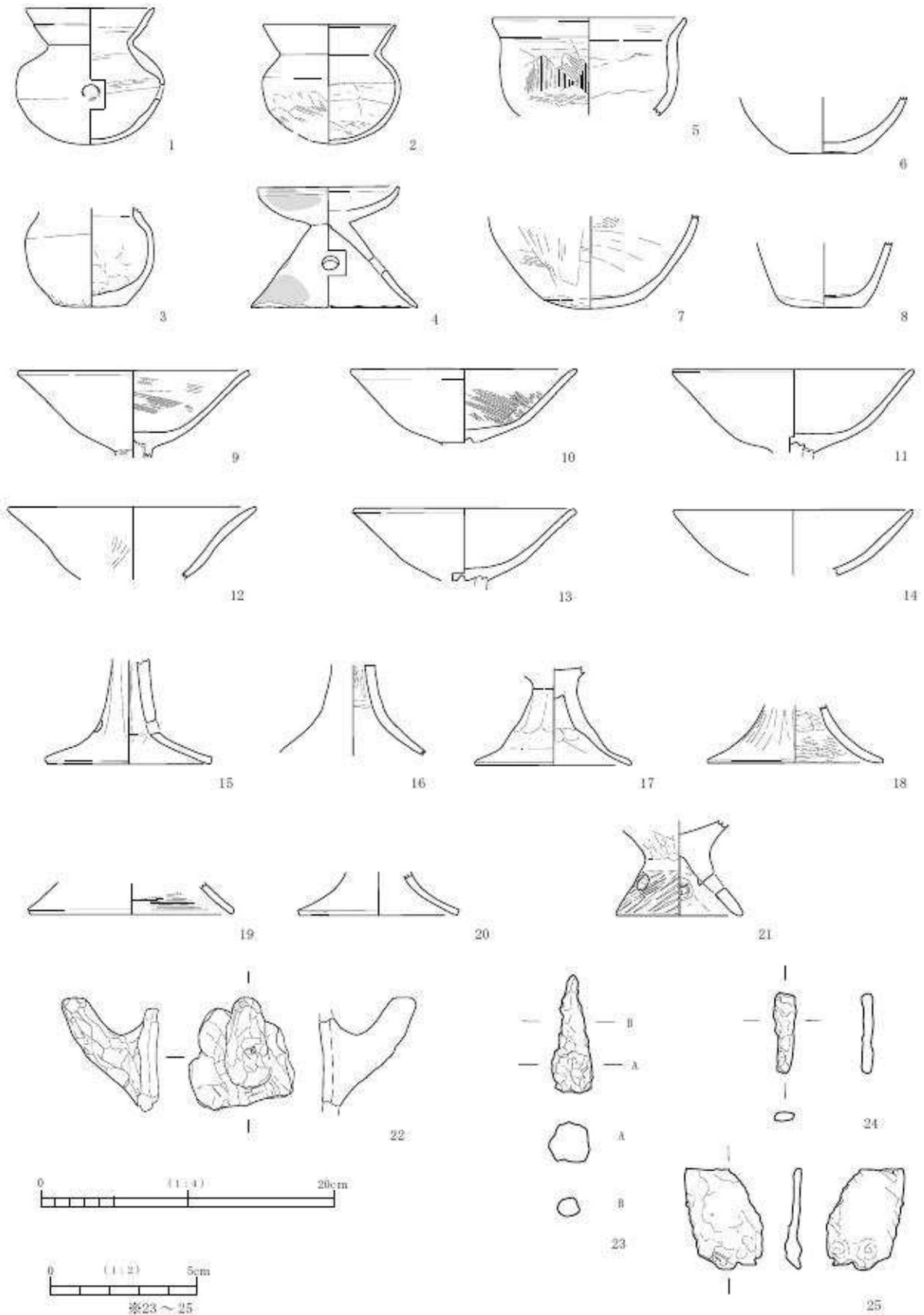


図36 自然流路232 出土遺物・2 (1/4・1/2)
1～25:14層

(4) 包含層出土遺物

包含層から出土した遺物について概要を記しておく。図37は2層および3層の出土遺物である。同図1～3・11、図版30-2・3は青磁碗である。同図4は染付碗である。同図5・6・10は白磁碗・皿である。この他にも陶磁器類が出土しており（同図7・12、図版30-12）、いずれも3層出土である。同図8は2層出土の唐津焼の碗である。同図9は土師器高杯脚部、同図13は土師器鉢、同図14は瓦質土器鉢である。16は須恵器小壺の底部、17は須恵器高杯脚部、18～20は土師器皿である。同図22～24、図版30-25は弥生土器甕の底部である。各包含層や前述の古代～中世の遺構からは、量は少ないが弥生時代中～後期の土器が散見される。付近に当該期の集落が存在した可能性が高い。図版30-26は円筒埴輪片である。以上の8・15は2層出土、その他は3層出土である。2～3層は近世に帰属する。

図38は6層から出土した遺物である。奈良時代～平安時代にかけての遺物包含層である。同図1・2は須恵器蓋、同図3・4は須恵器杯Bである。同図5は黒色土器A類（森1995）である。同図6は丸瓦、同図7・8は平瓦である。A・B・C区では包含層から瓦が多数出土しているが、軒丸瓦、軒平瓦はまったくない。また丸瓦よりも平瓦の方が量的にはかなり多い。

図39は8～9層出土の遺物である。同図1は杯蓋である。外面にカキメ状の直線文を3条めぐらせ、波状文をはさんで刺突文を施す。口縁部は端面をもつ。稜はそれほど突出しない。初期須恵器の範疇に入るものとみられる。同図2は杯蓋でⅡ型式第5段階とみられる。同図3・4は杯身でⅡ型式第5段階に属する。同図5～9、図版32-1は杯B蓋、同図10～13は杯B、同図14は杯A、同図15碗はである。底部外面に糸切痕が認められる。同図16～18は黒色土器A類、19は黒色土器B類である。図版32-25は円筒埴輪片である。同図20は土師器甕である。8～9層も奈良時代～平安時代にかけての遺物包

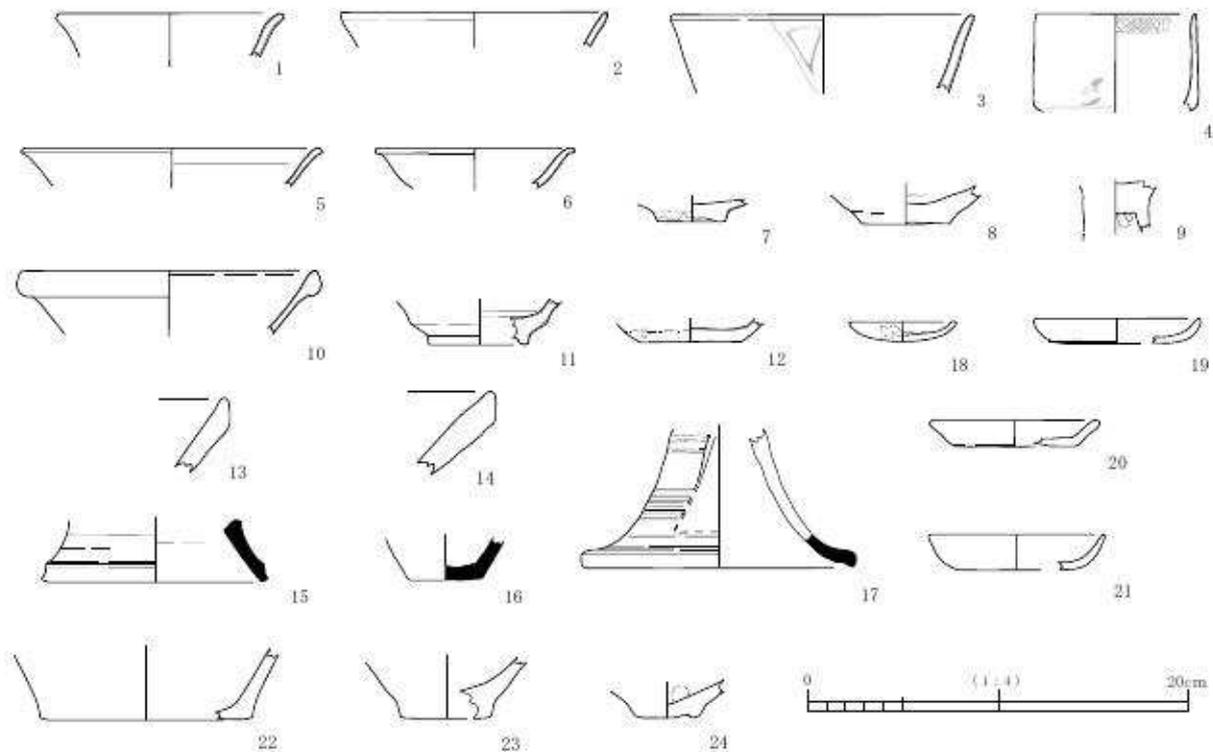


図37 A・B・C区包含層 出土遺物・1 (1/4)

1～25：2～3層

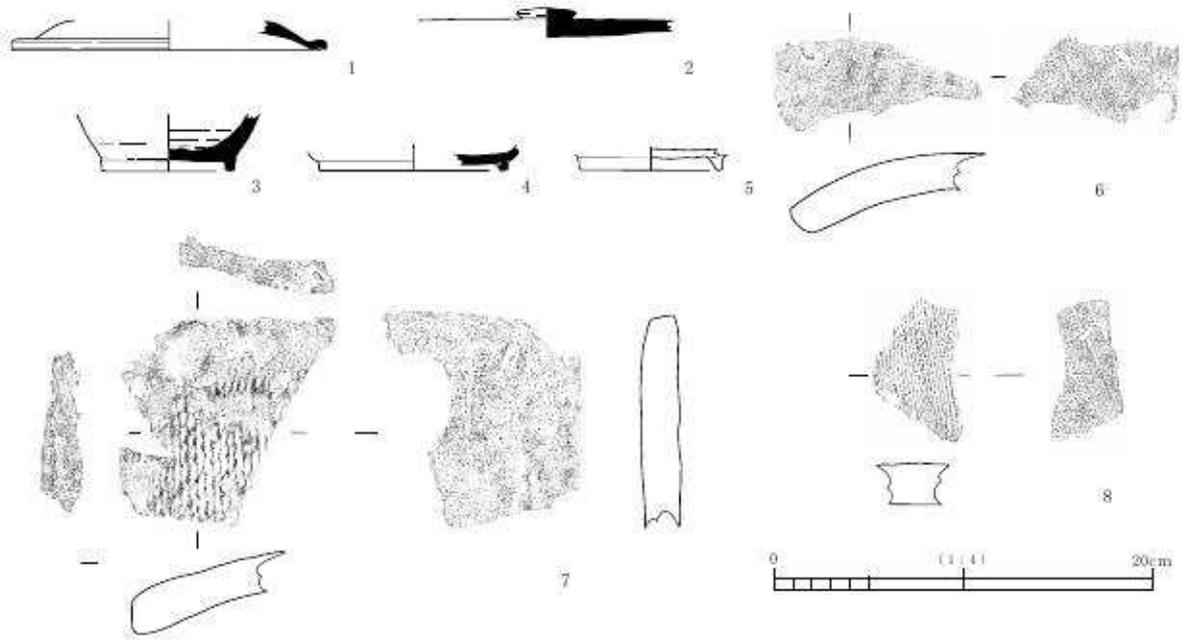


図38 A・B・C区包含層 出土遺物・2 (1/4)
1～8：6層

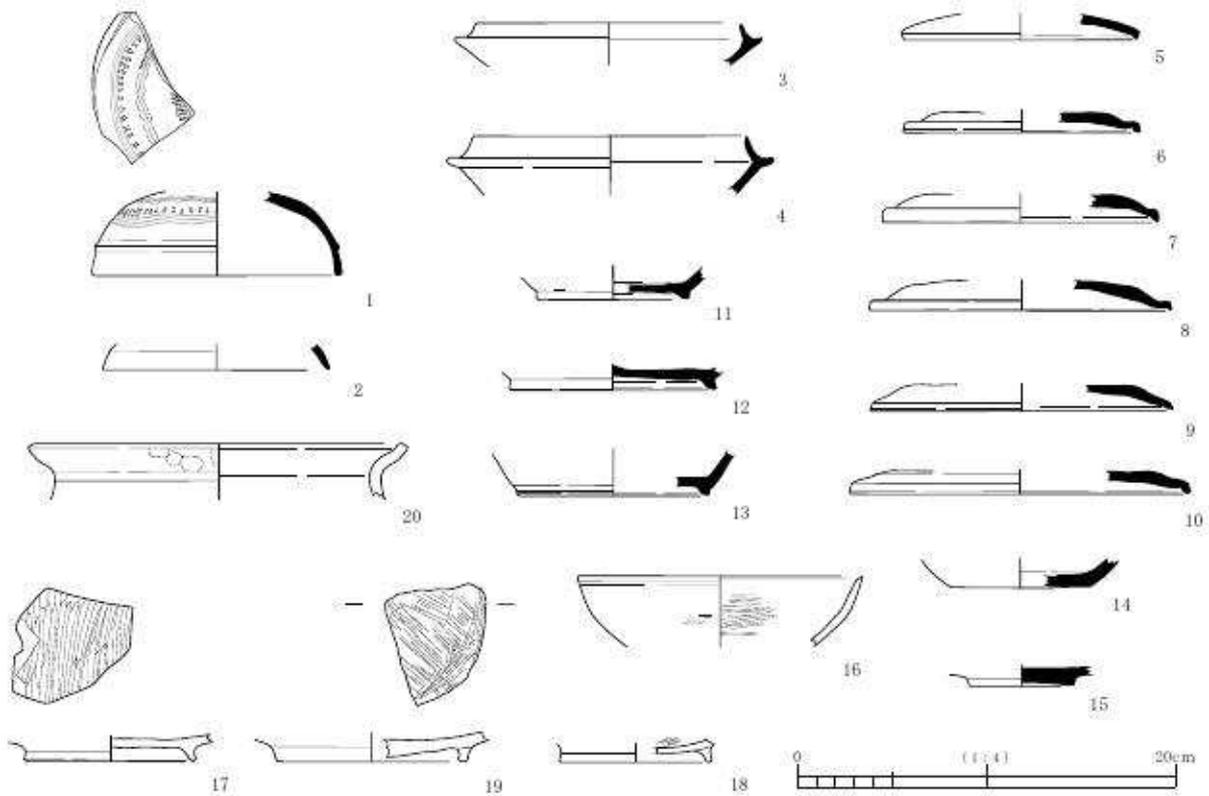


図39 A・B・C区包含層 出土遺物・3 (1/4)
1～20：8～9層

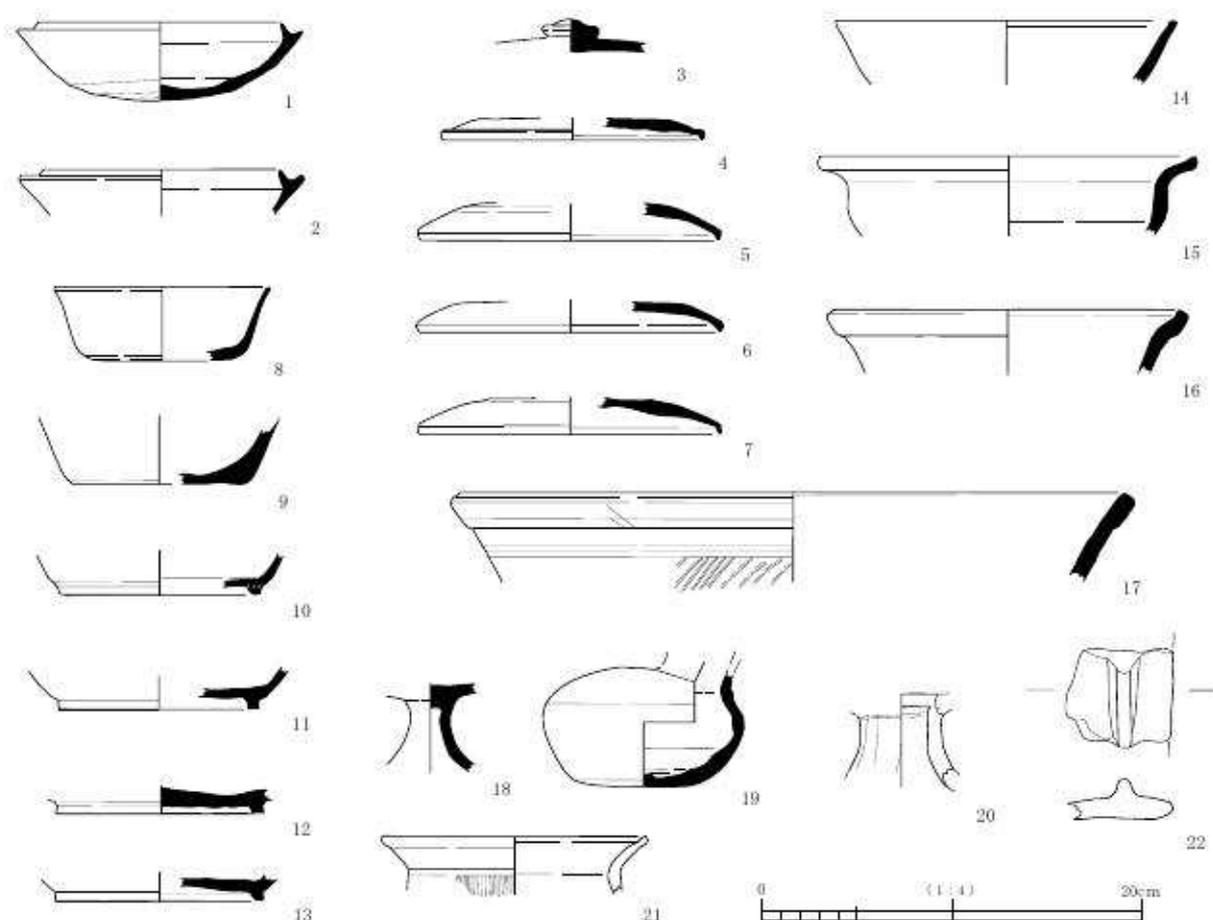


図40 A・B・C区包含層 出土遺物・4 (1/4)
1～22: 10～13層

含層である。

図40は10～12層から出土した遺物である。本層は自然流路232の構成層である。同図1・2は杯身である。Ⅱ型式5段階に属する。同図3～7は蓋である。同図8・9は杯A、同図10～13は杯Bである。同図14は椀、同図15は鉢、同図16・17は甕、同図18は高杯、同図19は平瓶である。同図20は土師器高杯、同図21は甕、同図22は竈とみられる土製品である。図版33-bは基盤層土から出土した石器である。サヌカイト製の石鎌（同図版18）、砂岩製の砥石（同図版22）などがある。

(5) 小結

第1面は、A区北半部以北では旧耕土、床土下が河川堆積土（自然河川084）の茶褐色砂礫層で、A区北半部から中央部にかけては4層明黄褐色粘質シルト、A区南半からB区にかけては、3層橙色粘質シルトが堆積し、これらの上面が第1面で、中世～近世の遺構が検出された。ただし、河川堆積土上には近世以降の遺構のみが認められ、中世の遺構が認められるのはA区北半部以南である。

調査区周辺の土地利用の現状は、多くが生花栽培を行う畑地となっている。当地付近が段状に整地されたのは、中世後期～近世初頭頃と考えられ、段の縁辺に添って調査区を縦断するように掘られた溝001、002などは同時期に属する耕作関連の遺構である。中世の遺構はA区北半部以北には認められず、

北半部以南の4層ないしは3層上面にのみ集中している。このうち本報告書に詳細を記載したのは、遺物が出土して遺構の時期が判明したごく一部の遺構であり、その他多くの遺構については具体的には触れなかったが、これらは位置関係や埋土の状況などから、ほぼ同時期中世（13～14世紀）頃のものと思われる。遺構の性格については定かではないが、遺構の基盤層が粘土質の部分にのみ集中して溝や土坑が掘削されており、粘土採取を目的とした可能性がある。A区北半やB・C区南部の基盤層が砂礫になるところでは、このような遺構は認められない。またこの溝や土坑は長方形や楕円形など平面形状が多様であり、溝と土坑の区別がつきにくいものもあるが、長軸の方向が座標北に対して西に約45度振っており、周辺の条里地割と同じくすることが指摘できる。また溝や土坑内からは遺物は少ないものの、拳大程度の自然石が置かれていたり、底面の凹凸が著しいという共通した特徴を有することが指摘できる（図版5b、7a）。掘立柱建物1についてはこれらの遺構よりも前出とみられるが、軸も一致しないため、溝、土坑との関係は不明と言わざるを得ない。

第2面は、B区南半部以南で認められた第9層上面をベースとする遺構面で、自然流路232が完全に埋没した北肩部付近の直上で認められた。検出されたのは土坑220、221、222などの不定形土坑や溝223などで、黒色土器A類が出土したことにより古代（平安時代）の遺構と判明したが、遺構の性格は分からない。ただしこれらの遺構が掘削された基盤層は、流路232に近いこともあり、やや砂質を帯びるものの第1面と同様に粘土層である。遺構底面に凹凸が著しく、また拳大の石が置かれている状況は第1面と共通する（図版9b）。その一方で第2面の遺構は、流路232の肩に平行して連続的に切り合いをもちながら形成されており、第1面とは長軸の方向に差異が認められる。第2面の遺構はほぼ東西方向であり、時代によって方向を違える点が特徴的である。

第3面は7層、16層をベースとする遺構面で、B区南半部で認められた自然流路232およびその北肩部付近で検出された堅穴建物228が検出されている。自然流路232は14層の出土遺物から古墳時代前期後半には形成されており、中期初頭にかけて堅穴建物228と併存しているといえる。

この自然流路232は12層より上位層が古墳時代中期以降、奈良時代の遺物を含み、232の上位層である8～9には平安時代の遺物も含まれる包含層となっている。これらは水平堆積であり、層相としては砂礫混じりの土砂であるため、自然堆積というよりは整地層である可能性もある。ただしその上面においてどのように土地利用されたかは不明である。第1面の中世段階では耕作地として利用されている。

堅穴建物228は4m×3m程度の小規模なもので、柱穴をもたず、カマドが建物プランのコーナー部に形成されている点で特徴的である。また出土遺物には体部外面にタタキ目を施した韓式系土器が出土しており、時期的にカマド導入期の建物といえる。周辺には流路以外に当該期の遺構がないため、集落の様相は不明であるが、付近に渡来系集落が存在するのかもしれない。

第2節 D・E区の調査

第1項 層序

図41の1層は、暗灰色粘質土の現耕作土である。D・E区における南北方向の土層断面を設定した場所が、北側にある民地への進入路とするため、厚さ0.1m程の現耕作土上に、付近の耕作土を盛り上げて道路を設置しており、土層断面図では周辺よりも厚い0.2～0.4mとなっている。

2層は、赤褐色粘質土の現床土である。遺物は、古墳時代から近代までの土器等が出土することから近・現代頃の形成時期を推定している。

3層は、褐色粘質土が混じる灰色粘質土である。遺物は、古墳時代から近世までの土器等が出土することから、近世頃を推定している。3層は、D・E区の南半部では厚さ0.1m弱で1層であるが、北半部では、3-2層の灰色混じり褐色粘質土と、3-3層の淡黄灰色砂質土に分かれ、堆積が0.2m弱と厚くなって、3層に分層出来る堆積層である。遺物は比較的多く包含されている。この層からの出土と思われるが、須恵器の円面硯が破片ではあるが出土している（図版51-16）。

4層は、厚さ0.05m程の黄褐色砂質土で、耕作に伴い形成された床土と考えられる。時期は、遺物から中世後半頃と推定している。

5層は、厚さ数cm～0.15mの小礫が混じる灰色砂質土である。遺物は比較的多く包含されている。

6層は、厚さ0.5m～0.1mの小礫が混じる黄褐色粘質シルトである。この調査区で確認した堆積層では、遺物が最も多く包含されており、土師器等の破片に磨耗が少ない状況から、短期間での形成が推定でき、人為的な堆積とも考えられる。5層も6層も遺物は古代から中世前半頃のもので明確な時期差は認められず、共に13・14世紀頃の堆積と推定している。6層の下位にある10-1層上面では遺構が検出され、これを第1面とした。7層から9層は部分的に認められる堆積である。

10層は、D・E区の中央付近では明確に2層に分層出来たが、南部や北部では明確に分層できない。上部の厚さ0.1m暗灰色礫混じり砂質土を10-1層、下部の厚さ0.2m暗灰色砂礫土を10-2層とし、10-2層の上面で遺構が検出され、これを第2面とした。10-1層はこの遺構面廃絶後に形成された遺物包含層と考えている。

10層より下位には、厚さ2m程の砂礫層を確認し、大きく3層に分層している。これは南東から北西方向の氾濫堆積と推察されるため、本調査区は氾濫堆積の一部を北西-南東方向のやや斜めに横断したことになる。

①層は極小砂や礫の混じる灰褐色中砂が大勢を占めるとしており、D・E区の南側3分の1付近が最も薄く0.2mで、南及び北が厚くなっている。最も厚いところで1mである。

②層は黄褐色極小砂・礫混じり中砂が大勢を占めるとしているが、細かく分層できる堆積状況である。氾濫の勢いが激しい時のものと考えられる。①層が最も薄い部分で②層の層厚が1.2mと、最も厚くなっている。

③層は厚さ0.3～0.5mのにぶい黄橙から褐色を呈する礫混じり小砂が大勢を占めるとしている。今回の調査では、この氾濫堆積の一部に確認トレンチを入れたのであるが、堆積層を完掘出来ていない。

更に下層は再び砂礫層のようである。

この氾濫堆積の①層、②層は年代的にも差はないものと推察している。遺物は主に②層より弥生時代後期から古墳時代前期のものが出土しているため、現状では古墳時代前期頃の堆積と推定し、③層より下層については、既往の調査等から、弥生時代後期頃の堆積と推定している。

第2項 検出された遺構と遺物

(1) 第1面

A・B・C区で検出した第1面に相当する遺構面を、D・E区でも検出しようと3層上面が該当するとして遺構検出に努めたが、近・現代の削平が激しく、この付近における遺構の遺存は皆無であった。D区南端部で確認した鉢状の穴は、植樹に伴う掘削による最近のものであることから、削平状況が窺える。そのためD・E区では、更に掘り下げた6層の下層上面を第1面とした。高さはT.P.+22.15～22.2mである。D・E区の南半部では、6層の下位は、10-1層で、これが第1面のベースである。D・E区の北半部では6層の下位は、7層や8層となり、さらにその下位が10-1層である。この遺構面では、用水路と考えられる溝、方形区画、畦畔、耕作に伴う小溝等、農耕関連遺構を検出した。他に窪地や土坑なども検出している。

1. 古代～中世の遺構

溝 300 (図 42・図版 13)

D区で検出した畦畔 303 の北西側に沿って掘られており、幅 2 m、深さ 0.15 m で直線的に北東-南西方向の溝である。溝の北東端は、D・E区から更に延びていることが分かるが、南西端は、D・E区の北側 3 分の 1 程で後世の削平により遺存状態も悪くなり検出できていない。南西に高くなる微地形や耕作痕の検出状況から、更に 5～7 m 程南西に延びて終わっていたものと考えられる。或は、E区で検出した溝 345 に続く可能性も考えられる。常に水が流れていた様な溝内堆積ではないが、流れの方向は溝底部の傾斜により、南西から北東方向である。遺物は第2面の遺構に伴うと思われる土器が比較的大きな破片で出土している (図 47、図版 34)。

溝 304 (図 42、図版 12)

D・E区の南半部で検出した南西-北東方向の小溝群である。溝 304 とした 3 条の溝は、幅 0.3 m、深さ 0.1 m で 1.2～1.4 m 程の間隔で平行する小溝である。畝間の一部が遺存したもので、溝の間には畑作用の畝が作られていたと考えている。

溝 346～348・358～360・362・363 (図 42・44、図版 12～14)

溝 346・347・362・363 は、幅 0.2 m、深さ 0.1 m で 0.9～1.4 m 程の間隔で平行する小溝である。溝 304 同様に、畝間の一部が遺存したものと考えている。溝 359・360 は、幅 0.2 m、深さ 0.1 m で、1.4 m の間隔で平行する小溝である。後述する溝 357 と溝 361 を考慮すると、検出長の 3 m は、本来の長さと考えられことから、幅 1.4 m、長さ 3 m の畝があったと考えている。溝 348・358 は、前述した小溝と直交する幅 0.2 m、深さ 0.1 m の小溝である。前述した小溝に切られており、先行するものと考えている。遺物は、2面の遺構に伴うと思われる土器小片が出土している。

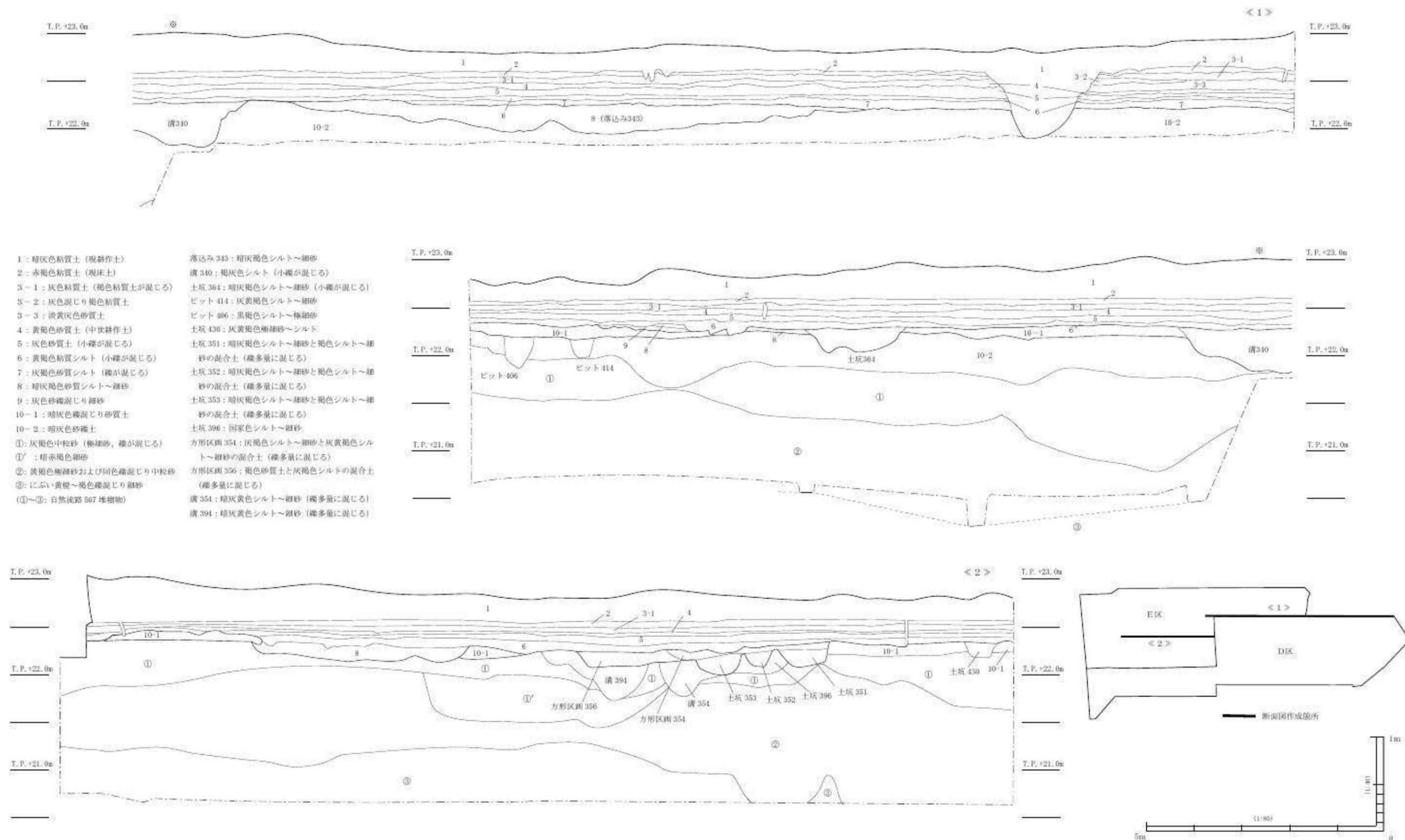


図41 D・E区 東壁断面図

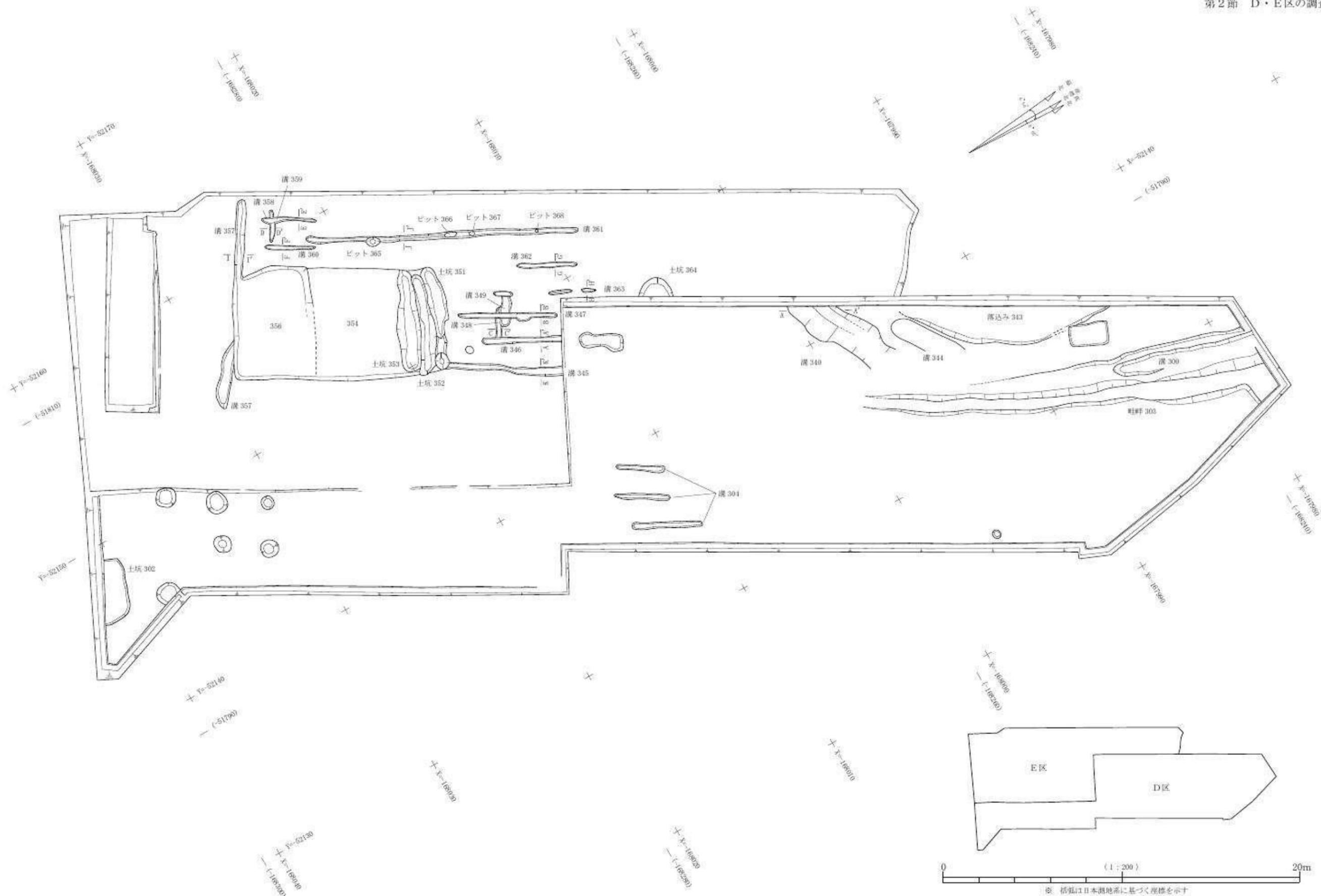


図42 D・E区 全体平面図・1 (第1面、1/200)

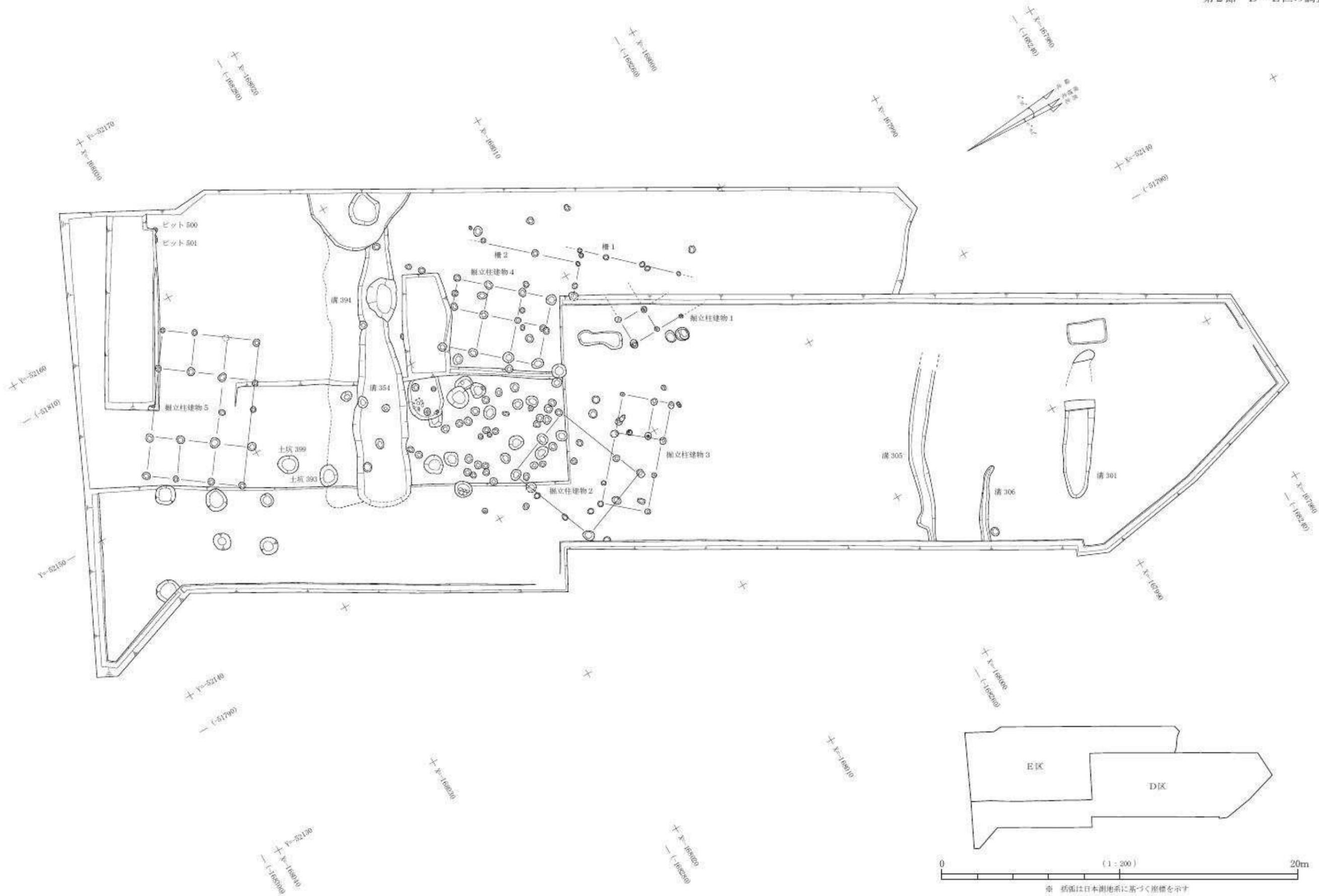


図43 D・E区 全体平面図・2 (第2面、1/200)

溝 340 (図 45、図版 13)

D区で検出した西南西-東北東方向の溝である。幅 2 m、深さ 0.35 m でE区に一部かかっていた様である。溝の東北東部は、徐々に不明確になっているが、おそらく溝 300 に切られて終わっていたと考えられる。一部が残存するだけであるが、溝底部の堆積状況から、溝 300 同様に常に水が流れていたのではないと考えている。遺物は、土器小片が出土しただけである。

溝 344 (図 45、図版 13)

溝 340 と落込み 343 の間で検出した幅 1.2 m、検出長 4 m 程の溝である。溝 340 と溝 344 は、共に不明瞭であるが、溝 300 や畦畔 303 に切られているとみられ、溝 340 同様にこれらに先行するものと考えている。遺物は、古墳時代以降の土器片が出土している。

溝 345 (図 42・46、図版 13・15)

E区中央部で検出した幅 0.3~0.4 m、深さ 0.12 m の南西-北東方向の溝である。前述の溝 346 の南東側に 1~1.4 m の間隔で平行していることから、この間にも畝が作られていた可能性が考えられる。溝の南西端は後述する方形区画 350 の北東隅から派生し、D区では削平されたためか、検出出来ていない。北東方向の延長上に溝 300 があり、これに続いていた可能性が考えられる。遺物は、土器小片が出土した。

溝 361 (図 42・46、図版 14)

E区南西部で検出した幅

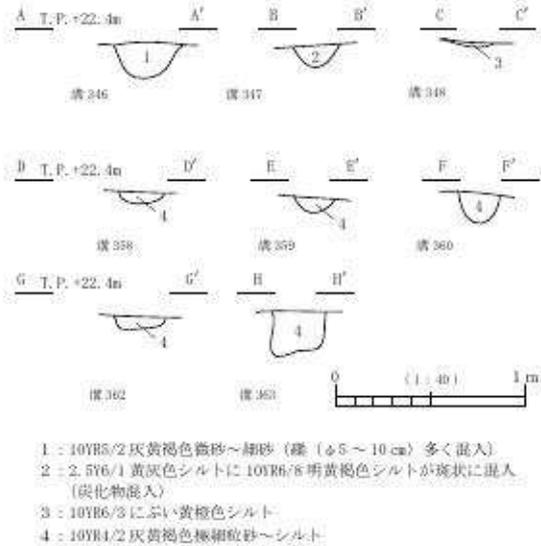


図 44 溝 346 ~ 348・358 ~ 360・362・363 断面図 (1/40)

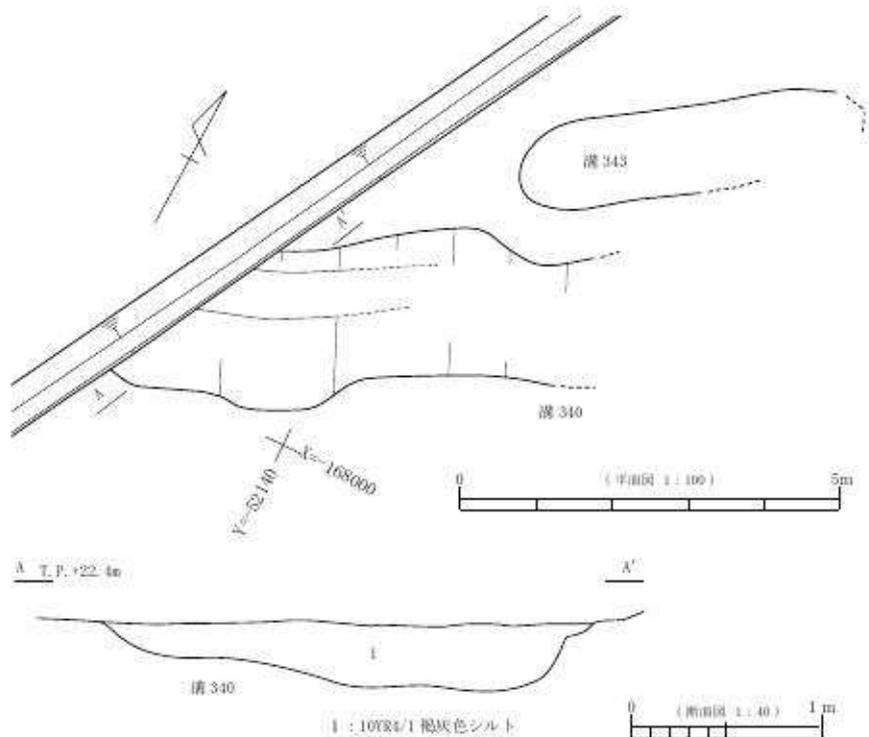


図 45 溝 340 平面図・断面図 (1/100・1/40)

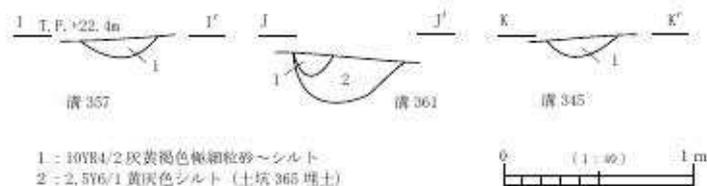


図 46 溝 345・361・357 断面図 (1/40)

0.2 m、深さ 0.1 m 程の南西－北東方向の溝である。方形区画 350 や溝 362 の北東に 1.5～1.6 m の間隔で平行して、延長 15 m 程を検出した。溝の南西端は、検出位置で大差ないと思われるが、北東端は削平されていると思われ、検出位置よりもう少し延びていたと考えられる。溝底部は凹凸があり、ピットと認識した穴が 4ヶ所（ピット 365～368）、あり、垣根のような施設の支柱を立てる布堀りの可能性を考えている。他の小溝と比べて、土器片が多く出土していることも、この可能性を補強すると考えている。なお図示できた遺物はないが、鉄滓が出土している（図版 34－16）。

溝 357（図 42・46、図版 14）

E 区で検出した北西－南東方向の溝で、方形区画 350 の北東辺に接して検出した。調査では、方形区画 350・356 に切られた状況で検出したが、遺構面のベースがこの付近では砂礫土であることから、雨等で方形区画の掘り方が崩れたことにより、切り合い関係のようになっている可能性も考えられる。延長 12 m 程を検出しており、ほぼ元の長さと考えている。この遺構も溝としているが、溝 361 と同じく柴垣の様な施設の可能性を考えている。遺物は土器小片が出土している（図 47、図版 34）。

畦畔 303（図 42・図版 13）

D 区で検出した溝 300 の南東側に沿ってある畦畔である。幅 0.6～1.5 m、高さ 0.1～0.2 m で直線的に北東－南西方向に 21m 程延び、D 区北端で東に曲がっている。おそらく T 字状に分岐していると考えている。南西端は、D 区の北側 3分の1 程で後世の削平により遺存状態も悪くなり検出も途絶えている。南西に高くなる地形や耕作痕の検出状況から更に 5～7 m 程南西に延びて終わるか、南東に曲がっていたと考えられる。畦畔の構成層から遺物は出土していない。

土坑 302（図 42）

D 区南東端で検出した一辺 3～3.5 m、深さ 0.15 m で、平面形が隅丸形状の浅い土坑である。近世染付け片を含む土器小片が少量出土している（図 47、図版 34）。

土坑 351～353（図 42、図版 13・14）

E 区で検出した方形区画 350 の北東端で検出した幅 0.7～1 m、深さ 0.2～0.3 m、長さ 5.5～6 m の溝状土坑である。遺物は、比較的多く出土しているが、大部分は下層である 2 面の遺構群からと考えられるもので、遺構の時期を示す瓦器等が含まれていた（図 47、図版 34・35）。土坑の性格としては、砂礫土を畑とするために深耕したものと考えている。

土坑 349（図 42、図版 13）

E 区小溝群の溝 347 と溝 363 に切られ、溝 348 を切っている幅 0.5～0.6 m、深さ 0.05 m、長さ 1.8 m 程の溝状土坑である。遺物は、少量の土器小片が出土している。

土坑 364（図 42）

D・E 区の中央部で検出した径 1.9 m、深さ 0.2 m の円形土坑である。土坑底面は平坦ではなく凹凸が認められる。先に調査を行った D 区では確認することができなかったが、E 区の調査時に検出したため、半円形を呈している。遺物は細片であるが比較的多く出土している。大部分は第 2 面の遺構のものであると考えられる。

方形区画 350（図 42、図版 13）

D 区小溝及び小溝群の分布の中で検出した幅 6 m、長さ 12 m、深さ 0.1～0.15 m の長方形区画である。

区画内の北東部は、前述の土坑 351～353 で、長さ 12 m の 4 分の 1 にあたる 3 m を占めている。区画内の南西部は、方形区画 356 で、長さ 12 m の内 4.5 m を占め、深さが 0.15 m 程一段深くなっている。方形区画 354 は、検出時溝と考えていたが、方形区画 350 内の方形区画 356 と土坑 351～353 の間の区画である。これら方形区画 350 内の 3 区分は耕作深度の差異によるものと考えている。方形区画 350 の面積は、70 m² 程と小規模であること、区画内が更に三分割されているなどの観点から、一般的な畑とは異なるものと考えている。遺物は、上面付近から土器小片が比較的多く出土したが、下部では、小片が少量出土しただけである（図 47、図版 34）。

方形区画 354・356（図 42、図版 13）

方形区画 350 の区画内の、土坑 351～353 より南にはやや大きめの区画と認識できる方形の凹部があり、これを方形区画 354、356 とした。354 は深さ 0.1 m 程で、底部は、2 面の遺構である溝 354 と盛土 394 が露出する。遺物は、方形区画 350 として取り上げている。356 は南西端の幅 4.5 m 部分である。深さ 0.2 m 程で、底面は第 2 面の下層遺構である自然流路 507 が露出する。遺物は出土していない。

落込み 343（図 42、図版 13）

D 区北西部の溝 340・344 の北側に広がる窪地である。遺構の東端部を円弧状に検出しただけで、更に北及び西に広がると思われるが、全容は不明である。深さは、最大で 0.3 m であるが、更に調査区外に深くなるのが分かる。埋土から基盤層に由来する弥生時代後期の甕が出土している（図版 70-1）。溝 340・344 と同様に、溝 300 や畦畔 303 が作られた時には埋没していた様である。

2. 各遺構の出土遺物

図 47、図版 34・35 は上述した各遺構から出土した遺物である。溝 300 からは坏 B（図 47-1）、土師器甕（同図 2）が出土している。溝 357 からは土師器小皿（同図 3）、碗（同図 4）が出土している。土坑 302 からは須恵器壺口縁部（同図 6）、土師器皿（同図 5）、黒色土器 A 類碗（同図 7）が出土している。5 の土師器皿は復元径 10.4 cm、器高 2.5 cm を測る。口縁部がやや外反し外面は 1 段ナデが施される。土坑 352 からは瓦器碗（同図 8）土師器皿（同図 9）、小皿（同図 10・13）、瓦器皿（同図 11・12）が出土している。8 は復元径 15.2 cm、器高 5.4 cm を測る。Ⅱ-2～3 期（森島 1995・12 世紀中頃～後半）に属するとみられる。9 は復元径 14.8 cm、器高 3 cm を測る。11・12 の瓦器皿は口径 8.3、8.7 cm で口縁部に 1 段ナデを施し外反する。土師器小皿は内湾する口縁をもつもの（10）と外傾するもの（11）がある。復元径は 8.2～8.8 cm を測る。方形区画 350 からは黒色土器 A 類碗（同図 33）、土師器甕（同図 34）が出土している。土坑 353 からは比較的まとまって遺物が出土しており、瓦器碗（同図 14・15、図版 35-9）、瓦器皿（同図 17・20・21）、土師器碗（同図 16）、土師器小皿（同図 18・19、22～26、図版 36-7）、土師器皿（27～30）がある。この他に弥生土器（同図 31・32）がある。14 は外面下半のミガキが略されている。15 は高台が低く断面が丸みを帯びる。Ⅲ期に属する。瓦器皿はいずれも口縁が外反する。土師器小皿は口縁部が外反するもの（18・19）とゆるく立ち上がり端部を丸く収めるものがある（22～27）。両者とも 1 段ナデ調整である。口径は 8～10 cm、器高は 1.2～1.7 cm を測る。皿は 1 段ナデで口縁部が立ち上がるか外方にのびるもの（28・30）2 段ナデ（29）がみられる。30 は破片であるが口縁端部に外傾面をもつ。29 の口径は 13.4 cm、器高は 2.7 cm を測る。以上の土器から土坑 353 は 12 世紀後半から 13 世紀前半にかけての遺構と考えられる。

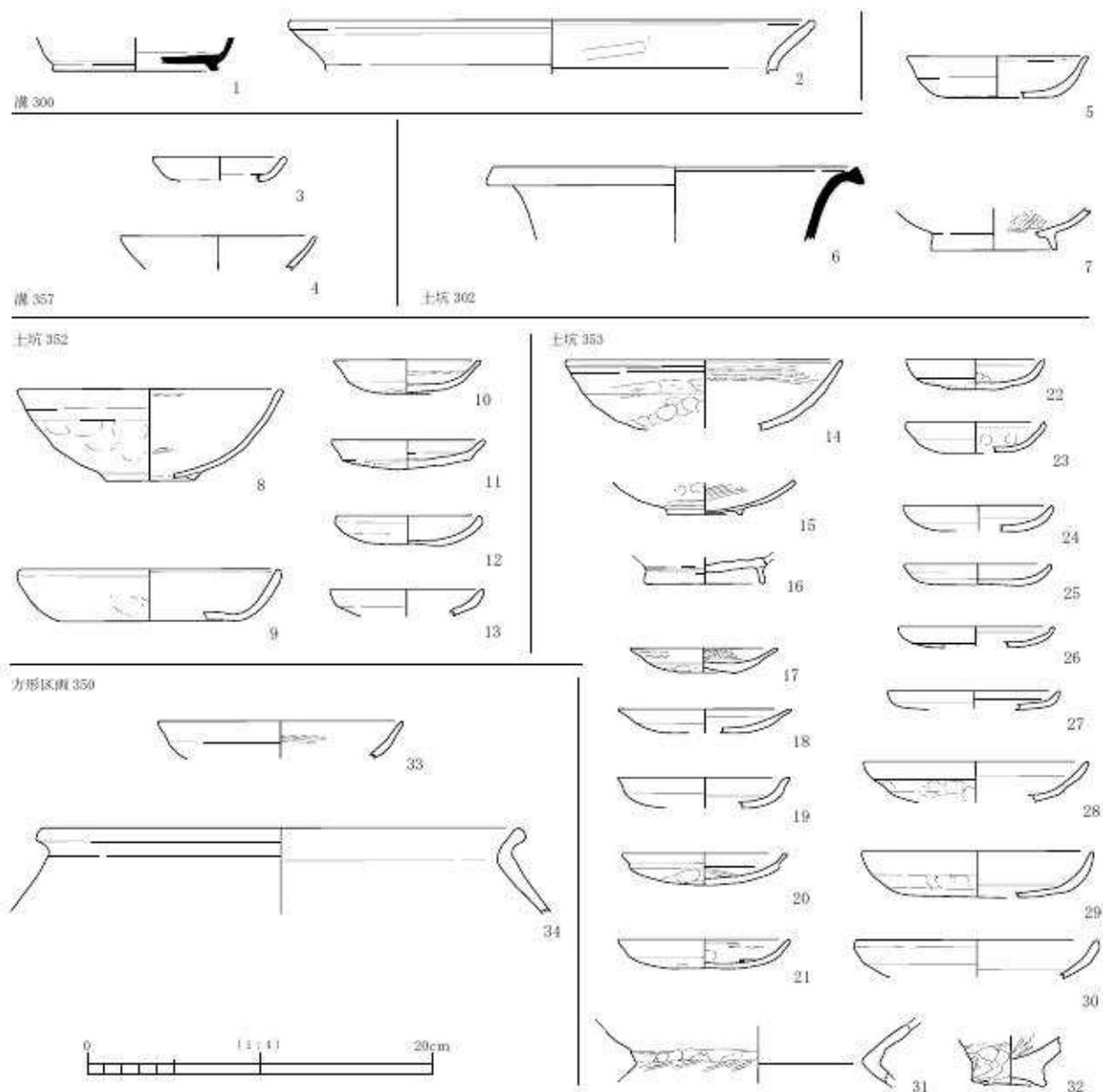


図47 D・E区第1面 遺構出土遺物 (1/4)

1・2：溝 300、3・4：溝 357、5～7：土坑 302、8～13：土坑 352、14～32：土坑 353、33・34：方形区画 350

(2) 第2面

10-1層を掘り下げた10-2層の上面、高さT.P.+22.1～22.2m付近で検出している。ただし、D・E区の南端部では、10-1層を掘り下げると直ぐに下層①層となり、10-2層は認められない。この付近での遺構の遺存状況からも地形がやや高くなっており、後世の削平によると推定される。この遺構面では掘立柱建物、溝、土坑等を検出した。

1. 古代の遺構

溝 301 (図43・48、図版16)

D区で検出した溝である。第1面の調査時点で確認している。検出遺構の中の切り合い関係で最も古いものとして調査した。出土した遺物は奈良時代の瓦片等で、中世後半や近世の遺物を含まないことが

ら、第2面の遺構として報告する。(図版34)。幅1.5m、深さ0.2mで、横断面が浅い皿状を呈し、埋土は1層だけで水が流れていた様子はない。北西-南東方向の延長8m程を検出している。溝の北西端がやや北に曲がるようで、北側は地形が浅い窪地状を呈することから、排水路であった可能性がある。このD・E区北側付近は、中世以降に深さ数十cm削平されている可能性があり、溝の延長は10m程度と考える。

溝 305・306 (図 43、図版 16)

D区で検出した溝である。溝 301 の調査後、2面の検出に向けて掘り下げる過程で検出したが、出土した遺物に中世後半や近世のものが含まれないことや、溝 301 と同じ北西-南東方向であることや位置からこの3条の溝は、ほぼ同時期のものと考えられる。溝 305 と溝 306 は、共に幅0.2~0.5m、深さ0.1m程で、常時水が流れていたとは考えられない。遺物は黒色土器B類碗が出土している(図 64)。

溝 354 (図 43・49、図版 16)

D・E区で検出した北西-南東方向の溝である。溝幅が2~4m、深さが0.1~0.3mであるが、溝としては北東側の幅2mの部分であり、溝の南西側に幅0~2m程の段状に高くなっている部分はこの溝の南西側に接してある溝 394 と一体と考えて、幅3m程の整地と考えたい。整地土は、溝の掘削土である砂礫に搬入土を加えたものの様である。この溝は、D・E区の境付近から土坑 389・395 までの延長15m程の検出であるが、その底部に幅0.5m程の水が流れていた様な砂の薄い砂層堆積が認められた。水流の方向は、南東から北西と考えられることから、この溝は更に南東に伸びていたと考えられる。遺物は比較的多く須恵器、土師器などが出土している(図 64、図版 37~39)。

掘立柱建物 1 (図 43・50、図版 17)

D区で検出した一間以上×二間以上の規模の総柱の高床建物と考える。ピット 307・310~313 を柱穴とする建物で、E区において建物の柱穴全体の検出を試みたが、中世以降と考えられる削平がT.P.+21.9~22.1m付近まで及んでおり検出できなかった。

この建物では5ヶ所の柱穴の内、ピット 307 (礫)・311 (平坦面のある礫)・312 (板石) の3ヶ所で根石と思われる石を、T.P.+22.10m付近で検出している。建築の土台となる地質が砂礫層のため、地盤が軟弱な部分での柱の沈下対策と思われる。ピット 313 は、掘り方や根石から埋設された柱の太さが



図 48 溝 301 断面図 (1/40)

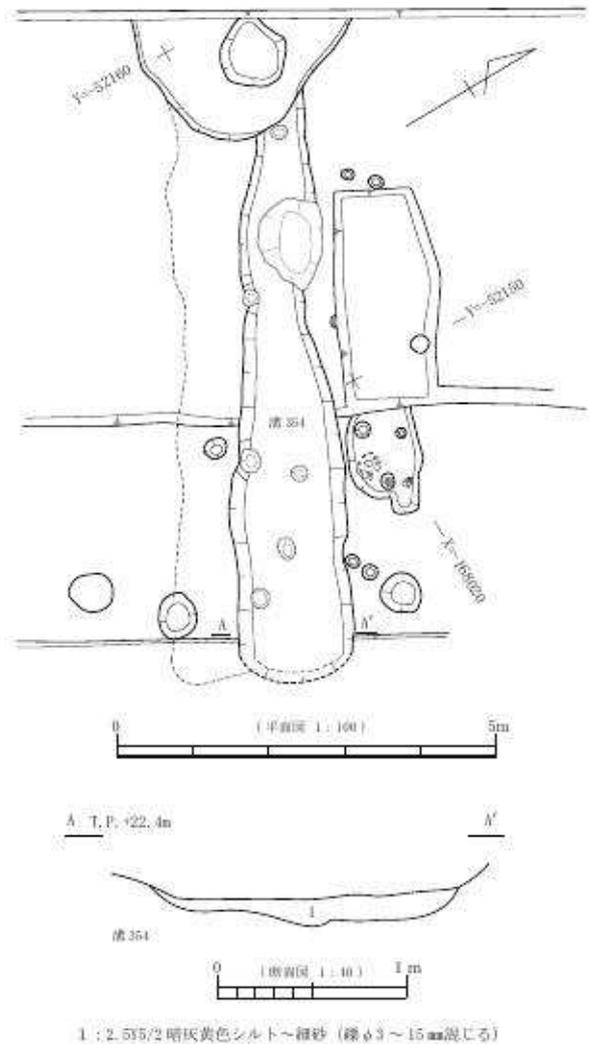


図 49 溝 354 平面図・断面図 (1/100・1/40)

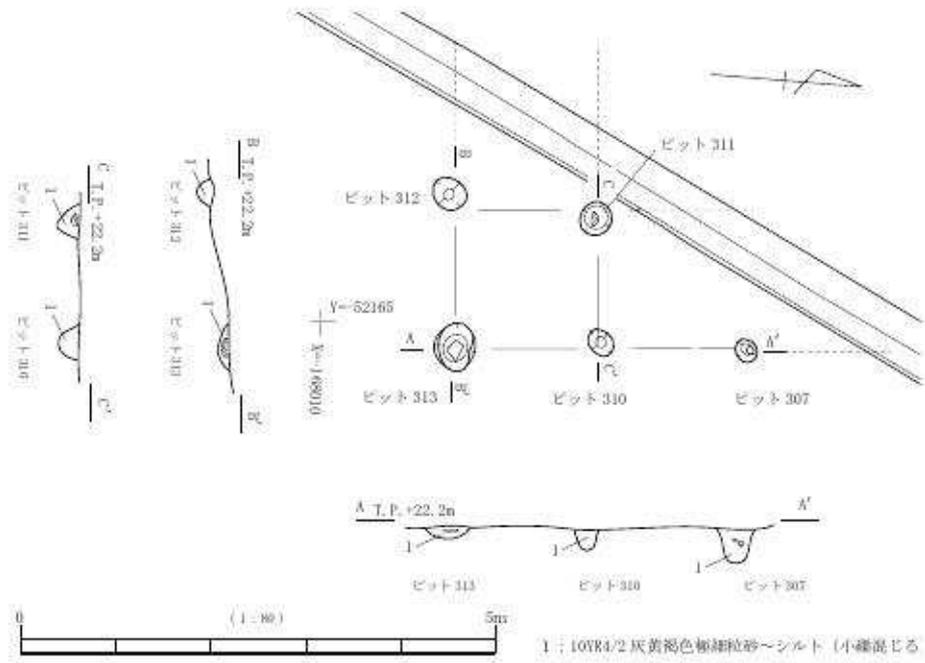


図 50 掘立柱建物 1 平面図・断面図 (1/80)

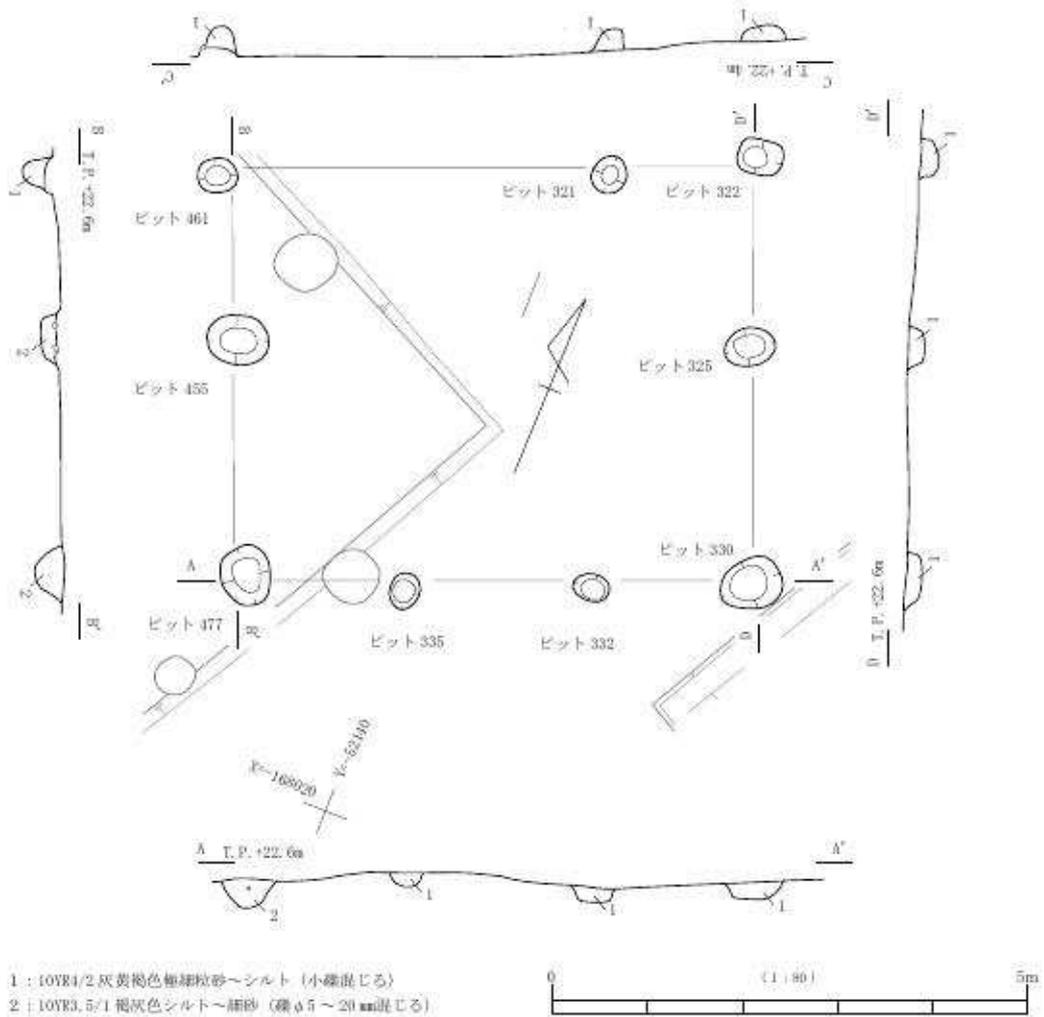


図 51 掘立柱建物 2 平面図・断面図 (1/80)

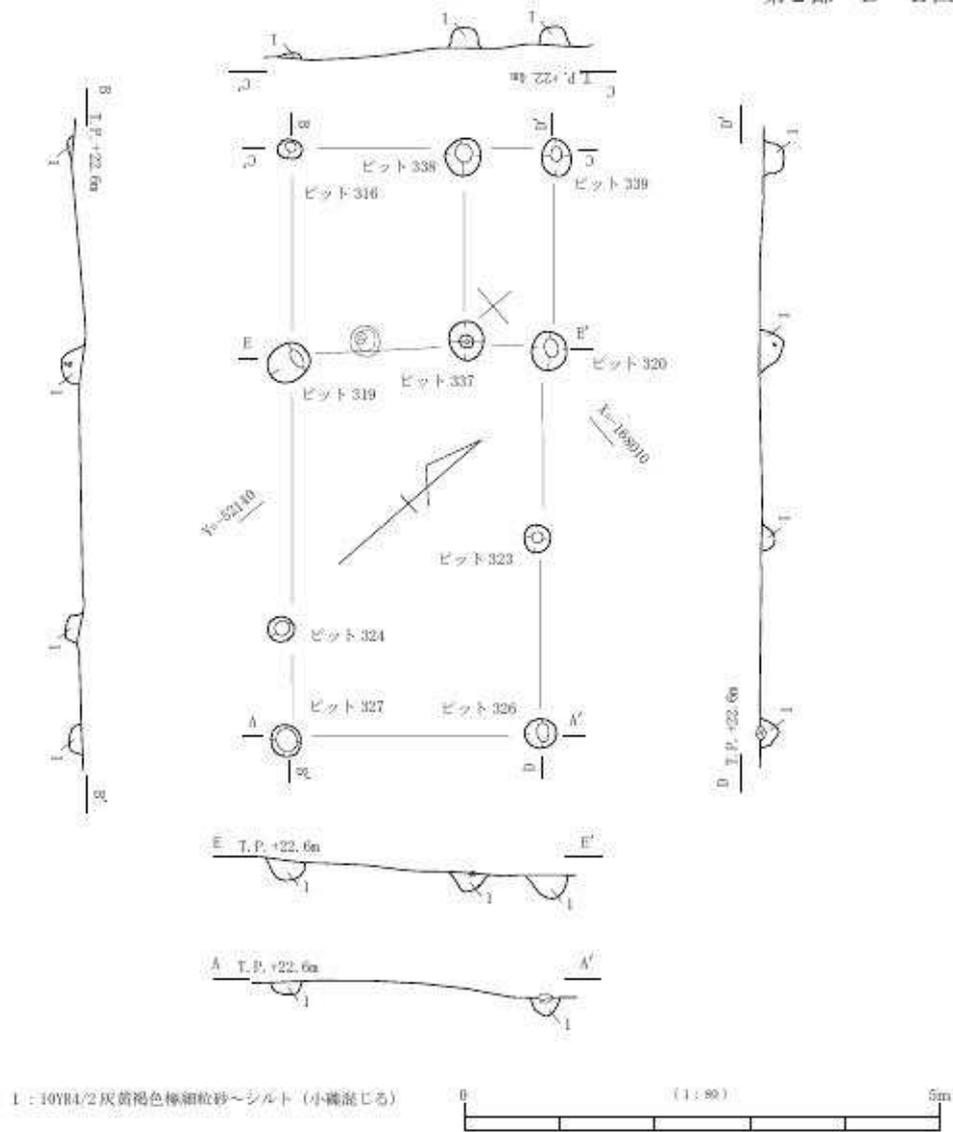


図52 掘立柱建物3 平面図・断面図 (1/80)

直径15cm程と推定される。遺物は土師器皿、黒色土器A類碗などが出土している(図65、図版40)。

掘立柱建物2 (図43・50、図版17・18)

D・E区で検出した東-西方向に軸をもつ二間×三間の平地建物である。ピット321・322・325・330・332・335・336・455・461・477を柱穴とする。床面積は約30㎡程である。建物南西隅の柱掘り方(ピット477)に接して黒色土器B類の碗が逆さの状態では埋納されていた。ピット461から黒色土器A類の鉢体部片が出土しており、土坑431から出土した同鉢体部片と接合する(図65-11、図版41-13)。

掘立柱建物3 (図43・52、図版17・18)

D区で検出した北西-南東方向に軸をもつ一間×三間の平地建物である。ピット316・319・320・323・324・326・327・337～339を柱穴とする。床面積は約15㎡程である。ピット337とピット338の配置からこの2本を束柱と考えて、幅2m、奥行き1mの床があったことと、ピット319とピット324の柱間が梁間と考えた。ピット326とピット327間及び、ピット316とピット339間の寸法とほぼ同じであることの二点がこの建物の特徴として指摘できる。ピット320の掘り方底から口縁の一部を打ち欠いた土師器小皿が出土しており(図65-17、図版18-e)、また根石が出土している(図版41-

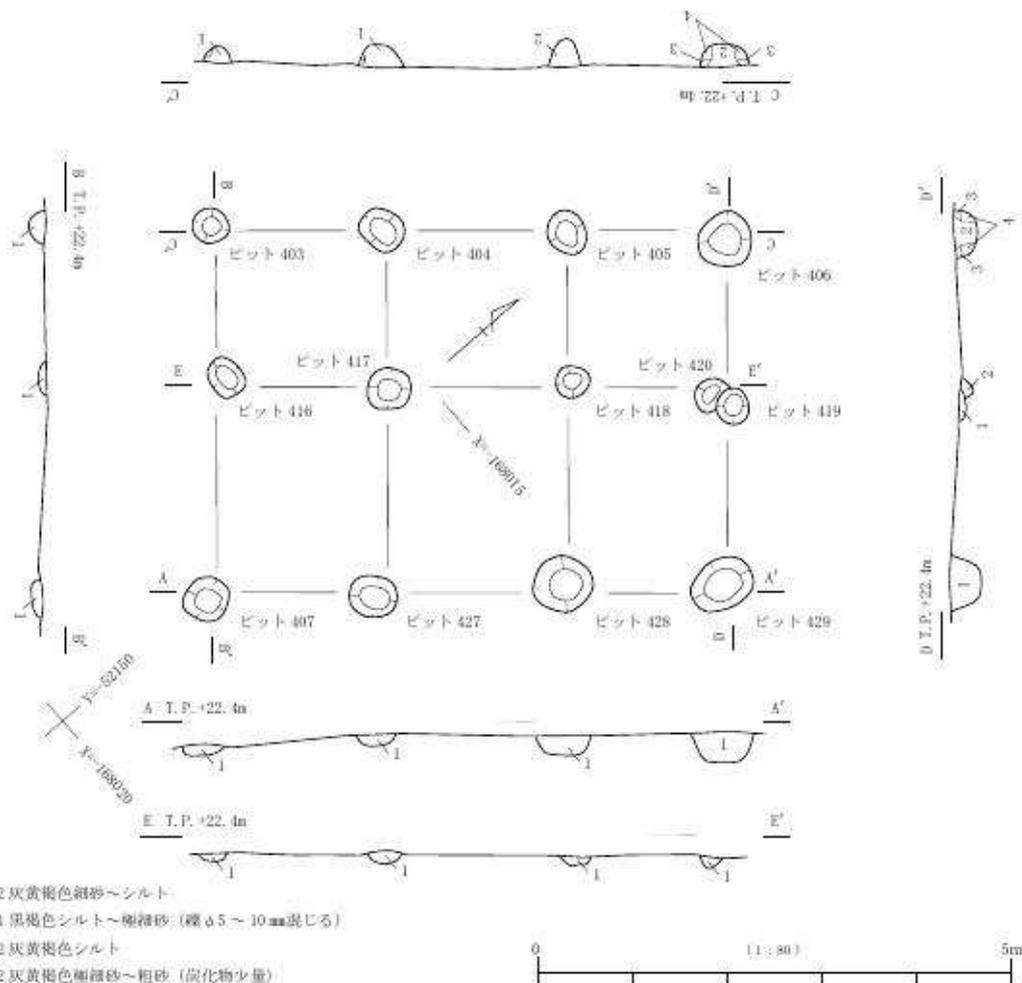


図53 掘立柱建物4 平面図・断面図 (1/80)

12)。

掘立柱建物4 (図43・53、図版17・18)

E区で検出した北東-南西方向に軸をもつ二間×三間の平地建物である。ピット403～407・416～420・427～429を柱穴とする。床面積は約18㎡程である。ピット417とピット418の2本を東柱と考えると建物の北西半分の一間に床を張っていたと考えられ、南東半分のやや幅の広い一間を土間とした建物が復原できる。ピット406では、柱の抜き取り後と考えられる状態で半砕された黒色土器A類の椀が出土している(図65-21・23、図版18-i)。

掘立柱建物5 (図43・54、図版17・18)

E区で検出した北西-南東方向に軸をもつ三間×四間の高床建物である。ピット369～380・382～388を柱穴とする。床面積が約38㎡程あり、今回検出した5棟のなかでは、最大の建物である。一般的な三間×四間の高床建物であれば、建物中央で6本の東柱が検出されるが、ピット375～377・380～382と遺構番号を予定して検出をしたところ、ピット381となるべきところでは検出されず、柱は無かったと結論した。そのため、建物5は、三間×四間のうち南西中央部の二間×二間を土間とする高床建物として、入り口は、ピット385とピット386の間か、ピット386とピット387の間と考えられる。

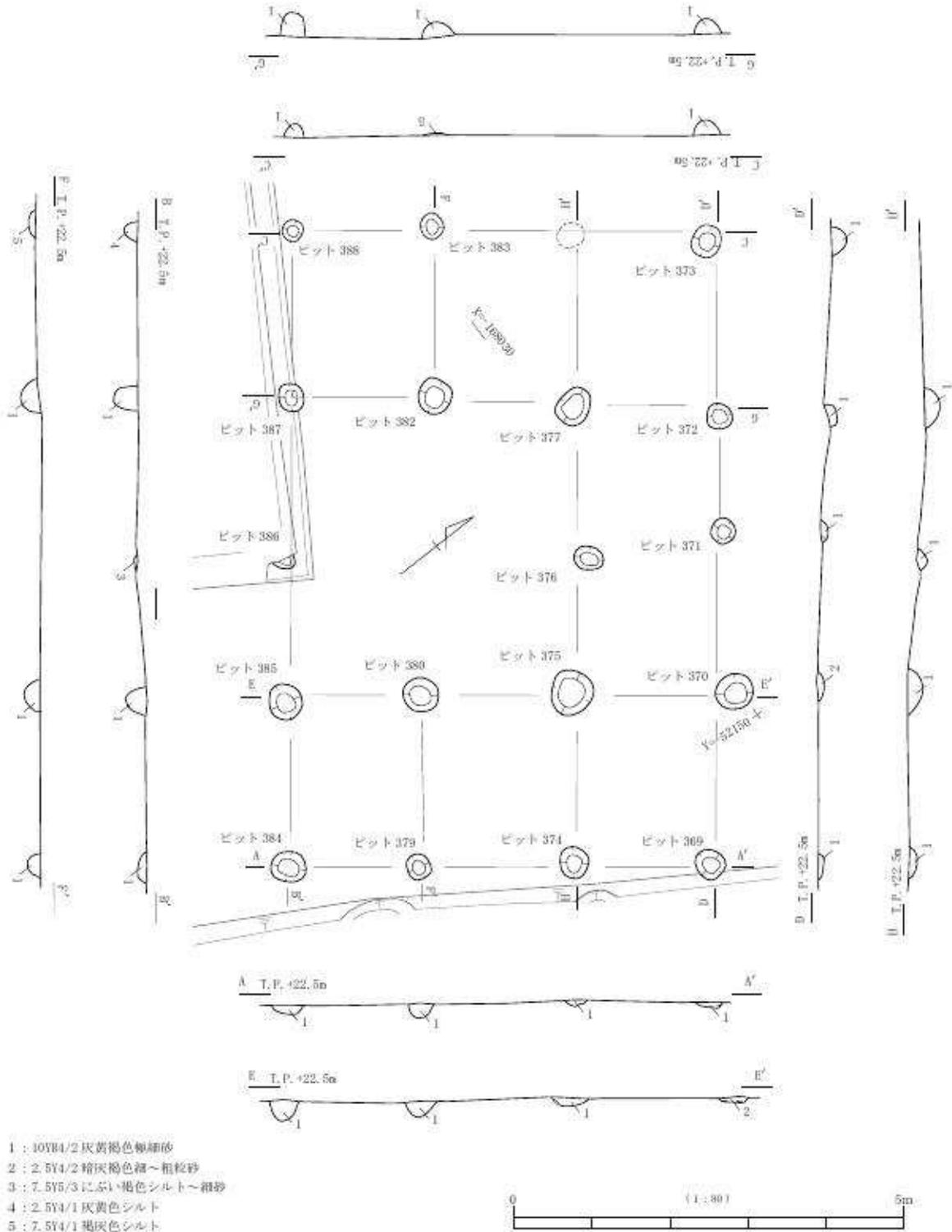


図54 掘立柱建物5 平面図・断面図 (1/80)

この建物の南東付近に相当する箇所です。土師器が集積した状態で出土している(図版18-m-51-b)。

柵1 (図43・55、図版17)

E区で検出した長さ5.3m(三間)の北東-南西方向に直線の柵である。ピット444・445・463～466が該当する。設置方向や位置から、掘立柱建物に関連して空間を仕切るためのものであろう。

柵2 (図43・55、図版17)

E区で検出した延長6.5m(三間)の北東端が逆L字に曲がる柵である。ビット414・415・439・440・443が該当する。掘立柱建物4の北西に2m程離れて建物軸と平行の北東-南西方向に5m程直線で伸び、直角に曲げて北西-南東方向に1.5m程である。設置方向や位置から、掘立柱建物4に関連して設置されたものと考えられる。

土坑308・309・410・430・447・451・453・456・458・476・483・496・505(図56・57、図版19・20)

第2面検出の土坑は平面形の規模によって3群に分けることができ、これら13基の土坑は、平面形が径0.4m~0.8mの円形ないしは楕円形を呈する。ここではこれらをA群とする。その他の2群は後述するとおり、B群はA群よりやや大きく、径約0.9m程度の円形を呈するもので、土坑393・397・399・473・433がこれに該当し、C群は長軸が1.5mをこえる円形、楕円形ないしは隅丸長方形を呈するもので、土坑396・389・494が該当する。いずれも埋土や遺物の検出状況から、土器を廃棄し、人為的に埋め戻された遺構と考えられる。

土坑308・309(図56、図版19)は、深さ0.05~0.1mの浅い土坑で、掘立柱建物3と柵1の間で2基接して検出した。共に遺物は出土していない。

土坑410(図57・58、図版19)は深さ0.3mで、黒色土器A類碗が出土している(図67、図版42)。

土坑430(図57・58)は、深さ0.15mで遺物は出土していない。

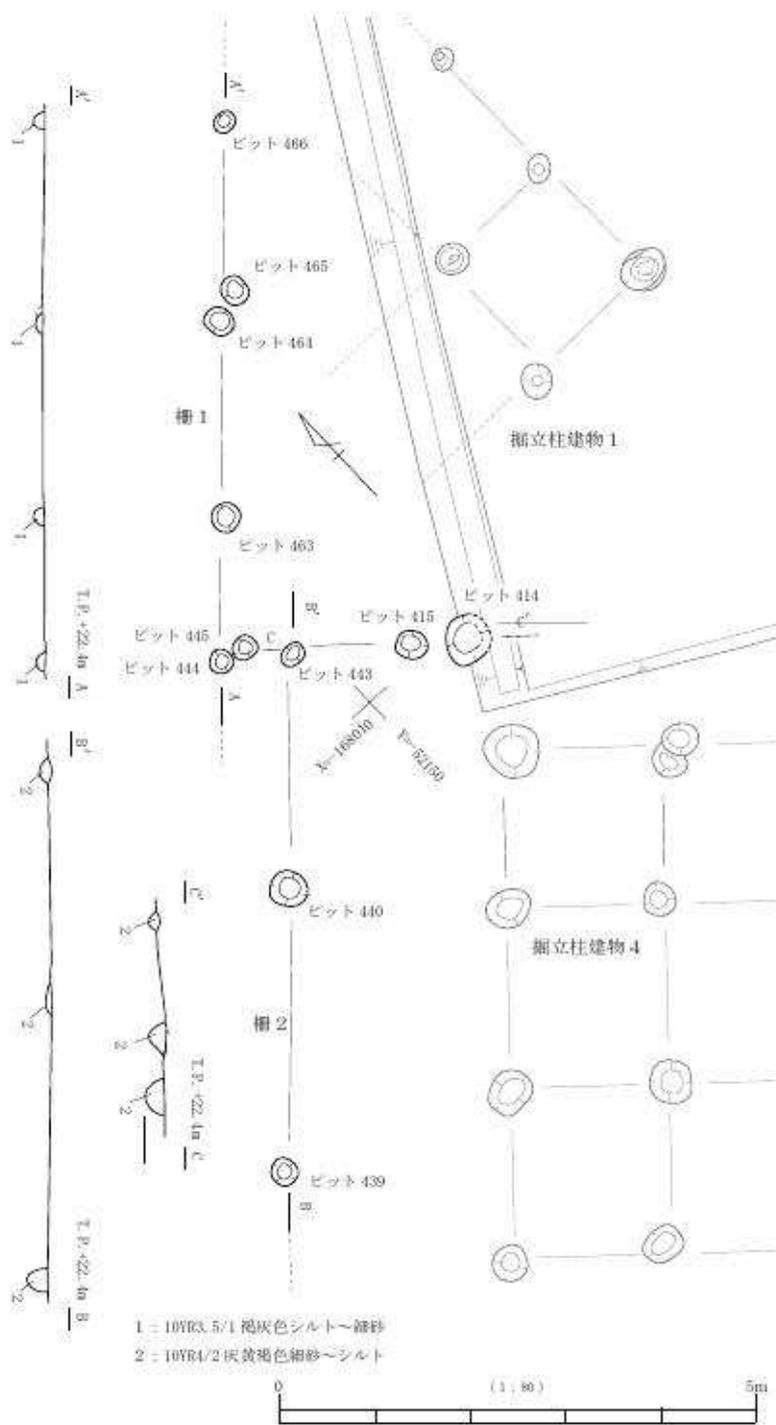


図55 柵1・柵2 平面図・断面図 (1/80)

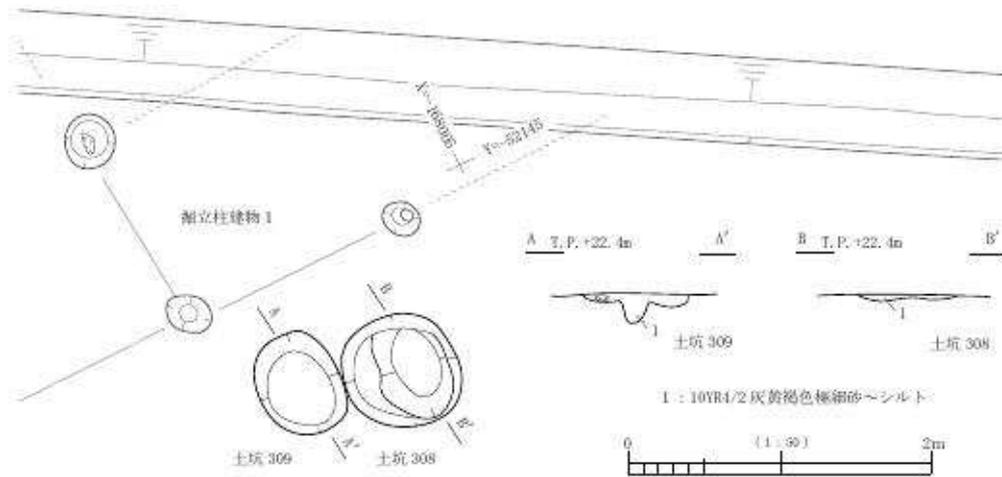


図56 土坑308・309 平面図・断面図 (1/50)

土坑447は、深さ0.15mで、黒色土器A類や土師器が出土した他、土坑堀方に接して黒色土器B類の椀が完形で出土している(図67、図版42)。

土坑451(図57・58)は、深さ0.15mで、埋土から少量の土器片が出土している。

土坑453は(図57・58、図版19)、深さ0.3mで、黒色土器A類や土師器と少量の須恵器が破片で出土した(図67、図版43)。

土坑456(図57・58)は、深さ0.15mで、基盤である砂礫層に含まれていた土器片が出土した。

土坑458(図57・58)は、深さ0.15mで、埋土から少量の土器片が出土している。

土坑476(図57・58、図版19)は深さ0.15mで、黒色土器A類等が出土している(図67、図版43)。

土坑483(図57・58、図版19)は、深さ0.25mで、ベースの砂礫層に包含されていたであろう土師器脚片以外は、黒色土器A類や土師器の小片が出土している。

土坑496(図57・58、図版19)は、深さ0.3mで、13基の中で唯一平面形が、隅丸方形を呈し、土坑397と土坑447に切られている。この土坑からは比較的多い土器の出土があり、特に埋土の上部で黒色土器B類の椀が、中位からは黒色土器A類の椀が共に完形で出土した(図67、図版42)。

土坑505(図57、図版20)は、深さ0.15mで、13基の中で唯一平面形が、長方形を呈する。土師器小皿片を含む土師器小片が出土している(図67、図版43)。土坑396で土坑の北西部分部が切られている。
土坑393・397・399・473(図59・60、図版20)

この4基の土坑は、平面形が径0.9m～1.2mの円形や楕円形を呈するもので、先の13基同様に、埋土のあり方から、一度に埋め戻されたと考えられる。

土坑393(図59)は、深さ0.25mで、瓦器椀片や羽釜片を含む土器片が出土しており、遺物からこの遺構面検出では、新しい時期のものである(図67、図版45)。

土坑397(図60、図版20)は、深さ0.3mで、黒色土器A類の椀や土師器皿の完形品や大きな破片等比較的多い土器が出土している(図67、図版45)。

土坑399(図59)は、深さ0.15mで、黒色土器A類や土師器の小片が出土している。

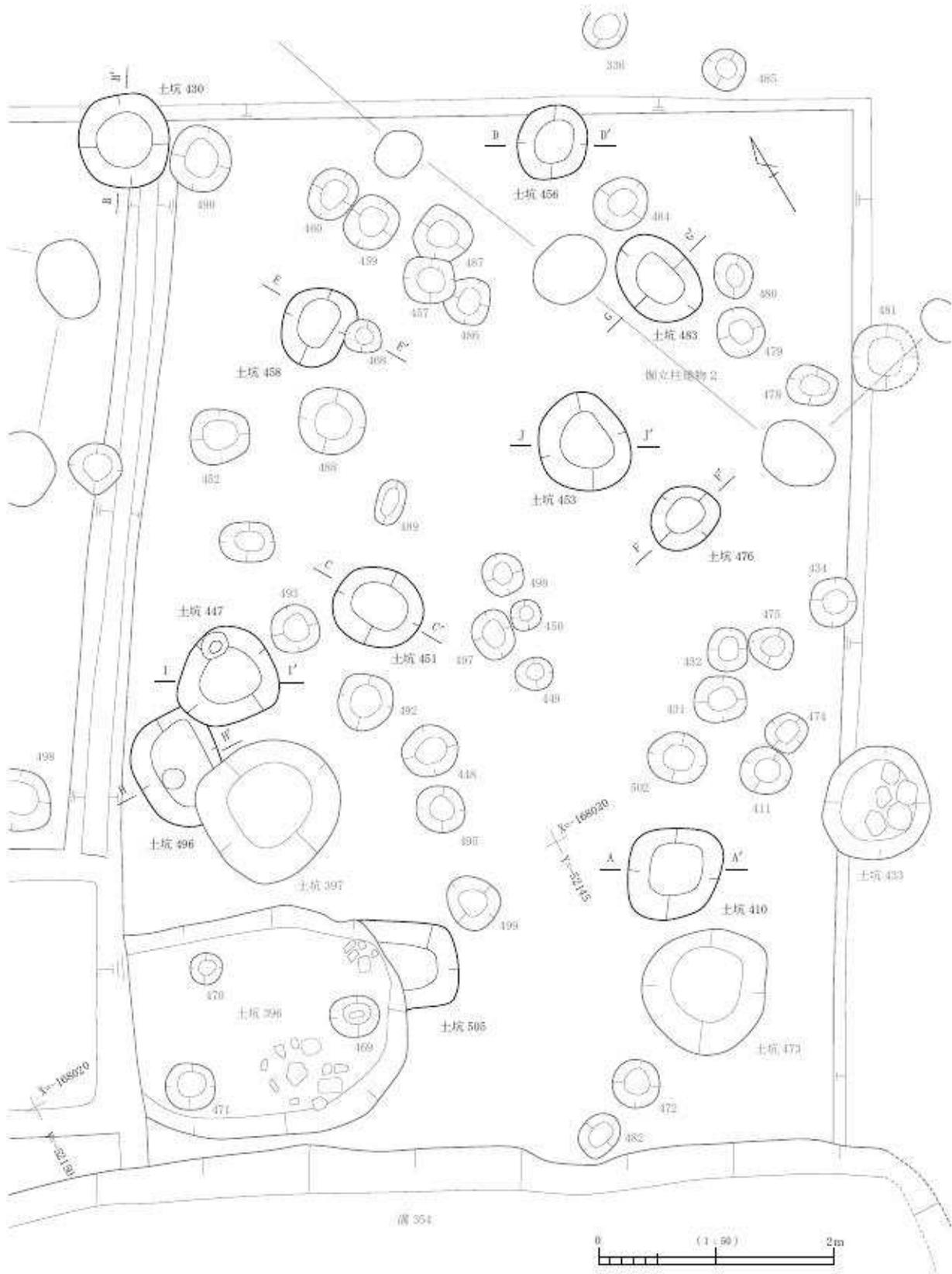


図 57 土坑 410・430・447・451・453・456・458・476・483・496・505 平面図 (1/50)

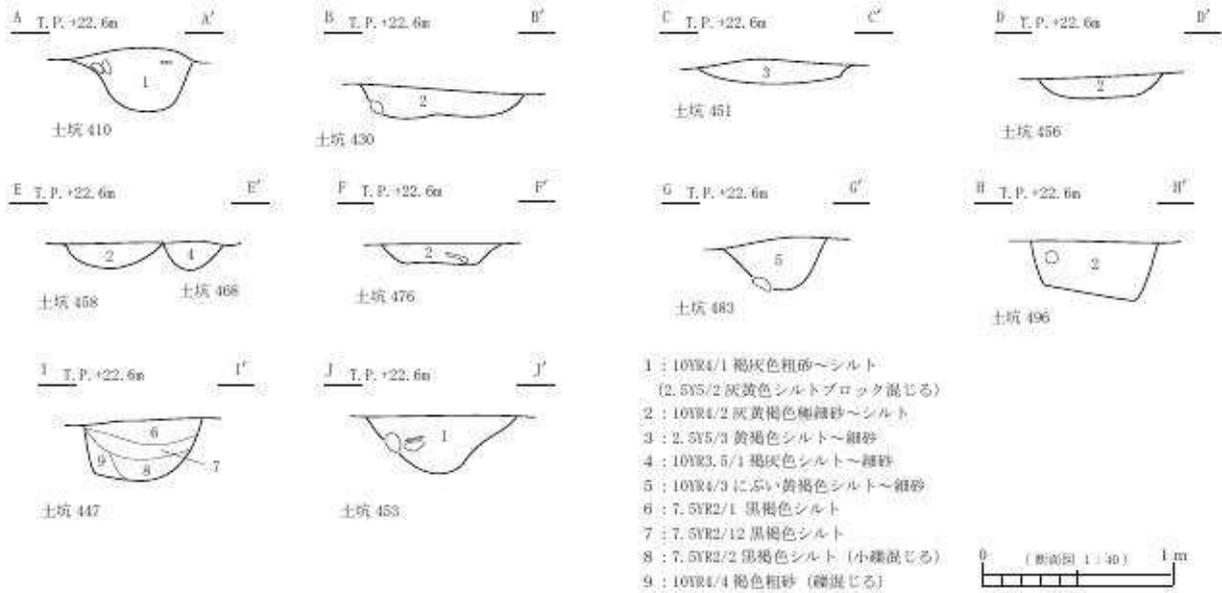


図58 土坑410・430・447・451・453・456・458・476・483・496断面図 (1/40)

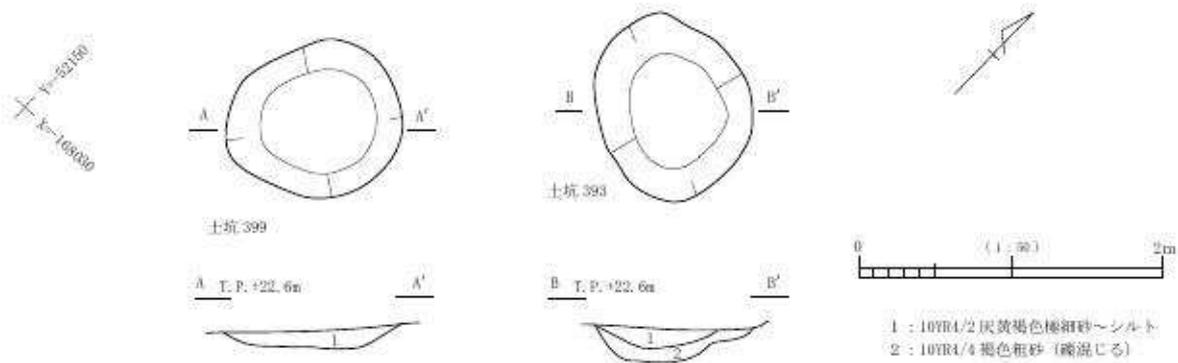


図59 土坑393・399平面図・断面図 (1/50)

土坑473 (図60、図版20) は、深さ0.15mで、瓦器碗片や土師器甕片を含む土器片が出土している。遺物から土坑397と同様にこの面での遺構としては、比較的新しいと考える (図67、図版43)。

土坑433 (図61、図版20)

D区とE区の境界で検出したB群の土坑であるが、D区では土坑掘り方の一部を検出しただけのため、E区の調査で掘削している。径0.9～0.95mの円形を呈し、深さは0.05～0.1mである。土坑の底部に卵大の礫を敷き、その上に土師器小皿を並べている。検出したのは5枚であるが、小皿1枚を中心に、その周囲に土師器小皿 (図67、図版43) が並べられていたのであろうが、残念ながら後世の削平で土坑の北西部分と共に失われていた (図版20-e)。この土坑も砂礫土で埋め戻されていたと考えている。

土坑396 (図61、図版20)

D区で検出した2m×2.5mの隅丸長方形を呈し、深さは0.1～0.25mである。長軸は、溝354に接して平行する北西-南東方向である。土坑底部は平坦ではなく、長軸に対して溝354側である南西側が一段低くなっている。遺物は、土坑の北東隅と南東隅付近に大半が纏って出土した。南東隅付近の遺

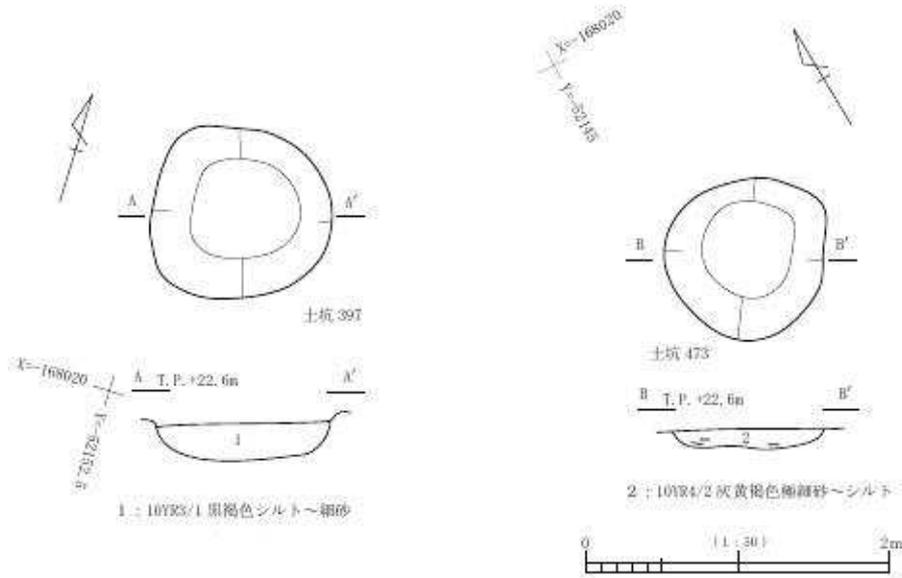


図60 土坑 397・473 平面図・断面図 (1/50)

物集積には、砥石と思われる扁平な砂岩礫と用途不明の卵型の砂岩礫が含まれていた。柱跡と思われるピットが鉤型に3箇所（ピット469～471）検出しているが、屋根をもつ建築物を考えることが出来るのか不明である。出土した土器は黒色土器A類碗や土師器皿が多い（図68、図版45～47）。

土坑 389・395（図62、図版20）

D区北西部で検出した。検出当初土坑389が井筒で土坑395が井戸掘り方と考えていたが、掘削すると、深さが土坑389で0.1m、土坑395で0.05mと非常に浅い掘り方であった。平面形が土坑389は隅丸方形に近く、土坑395は調査区外にある部分を推定し、方形的な不定形とみられる。遺物はほぼ完形の黒色土器A類碗や土師器皿等と須恵器片も含んで比較的多く出土している（図67、図版42）。

土坑 494（図63）

溝354と重複してE区で検出した。復元規模で1.7m×2.6m、長軸が溝354と同じ北西－南東方向の隅丸長方形土坑と想定され、土坑396とほぼ同規格の土坑となる。縦断面形は口の開く深い皿で底面に0.6m×1m程の平坦面があり、その部分に礫が混じらない砂が認められた。このことからこの土坑も貯水施設ではないかと考えている。遺物は土師器小片が出土しただけである。

溝 394（図43）

溝354の南西側に接してD・E区で検出した遺構である。検出当初は、溝354の前身遺構と考えていたが、調査すると砂礫層上に厚さ0.1m程で盛土されたものと判断し、整地跡とした。溝354同様に南東に伸びていたと思われるが、検出できたのはこれだけである。

その他の遺構

E区の南西隅付近、建物5の北西に5mの所で検出したピット500・501（図43）は、現代の農業用貯水施設建設時に半裁されながらも、辛うじて遺存して検出された。共に柱跡としてはやや細いが、掘り方は深く柵などの構築物の一部である可能性がある。また掘立柱建物2と掘立柱建物4と溝354に囲まれた範囲で多くのピットを検出している（図57）。中には柱根状の痕跡を残すものもあるが、建物を構成するかは不明である。

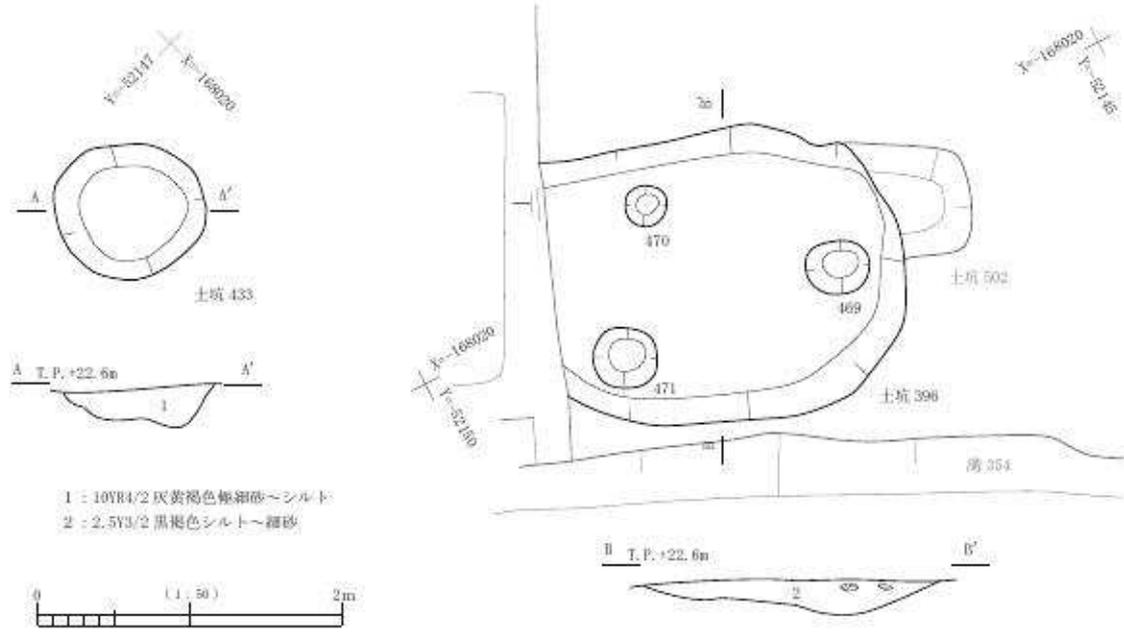


図61 土坑433・396 平面図・断面図 (1/50)

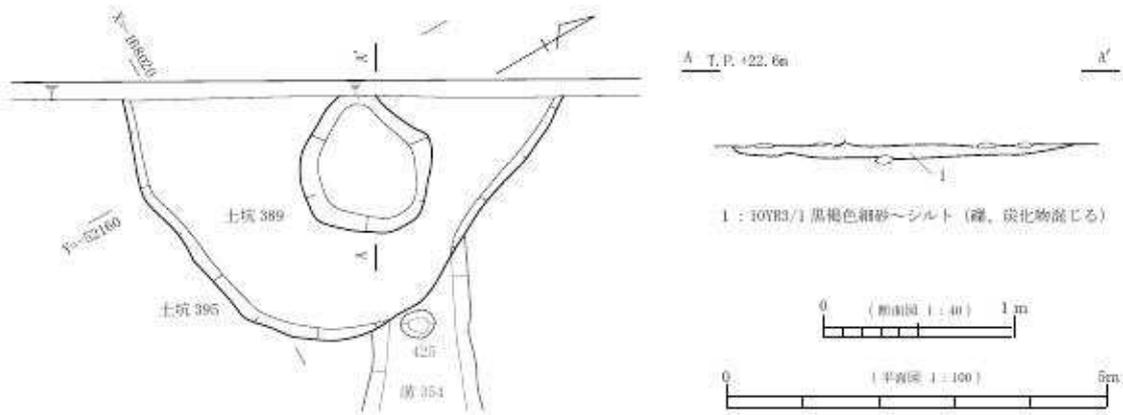


図62 土坑389・395 平面図・断面図 (1/100)

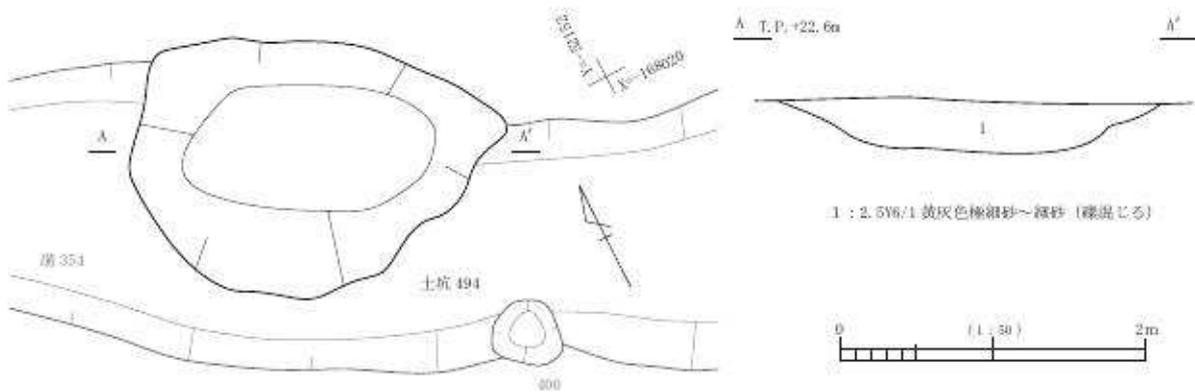


図63 土坑494 平面図・断面図 (1/50)

自然流路 507

D・E区の全域が含まれるようであるが、第2面の下層確認としてのトレンチ調査で検出した砂礫層で、現地表から2.1 mまで掘削したが、底は確認できなかった。砂礫堆積は3層に大別でき、上から①層・②層・③層とした。下層の②層と③層の堆積は、2回程砂礫の淘汰が繰り返されたことによるものと考えられる。共に厚さ0.5～1 m程の南東から北西方向の氾濫堆積であるが、③層堆積後、あまり時を経ずに堆積したものと考えている。②層と③層で砂礫に混じって径0.2～0.3 mの偽礫が認められ、この偽礫は洪積層の粘土堆積が塊で流されたものと考えられることから、時間的な差はあまり無かったと考えている。自然流路としているが、各堆積層の起伏は認められるが、流路としての安定した肩（岸）は未確認で、砂礫最下層の③層について確実に確認出来なかったが、層下面は比較的平坦となるようであることから、調査地南に流れる槇尾川の氾濫堆積ではないかと考えている。今回検出した砂礫層の②層上部から弥生時代後期の土器片が若干出土しており、②層・③層の堆積時期を示すと考えている。①層は、砂礫の堆積状況や出土した土器に古式土師器片が混じることから、古墳時代前期頃の堆積と考えている。この堆積層が形成された後、微高地となり安定した土地条件になったと考えられる。

2. 各遺構の出土遺物

図64は第2面の各溝から出土した遺物である。溝305からは黒色土器A類椀が出土している（図64-1）。溝354からは土師器では椀（同図12・13）、皿（同図13、図版38-7）、甕（同図14～21）、羽釜（図版38-17）がある。13は復元径11.8 cm、器高3.7 cm、12は口径12.0 cm、器高3.1 cmを測る。底部から体部にかけて丸く口縁端部に外傾面をもつ。外面下半はユビオサエが残る。甕は外面を工具によるナデ調整のもの（16）と縦方向のハケメ調整のものがある。後者は口縁部が強く外反する。須恵器では蓋（同図3・4）、坏B（同図5～7）、壺（同図9・10）、平瓶（同図8）、甕（図版37-6・7）、鉢（図版37-5）がある。平瓶（8）は7世紀頃の特徴を示しており、また壺（壺K、9・10）は8世紀代のものとみられる。杯B（5）は9世紀初頭頃とみられる。土師器椀や甕についても9世紀初頭から前半頃とみられる。また平瓦、丸瓦も一定量出土しているが、軒瓦はみられない（図版39）。溝354は前述のとおり溝内を埋めた整地土が埋土となっているため、遺物の時期幅が大きい。遺構の形成時期は9世紀前半以降とみられる。なお黒色土器A類椀（同図2）があるが上層からの混入であろう。また布留式の甕も出土している（図版38-14）。

図65は掘立柱建物のピットから出土した遺物である。掘立柱建物1には、土師器皿（同図1、図版40-5）、黒色土器A類椀（同図2）、土師器甕（同図3）がある。黒色土器A類椀は口縁端部内面が沈線状になる。また胎土が他とは異なり暗茶褐色を呈する。掘立柱建物2には、土師器では椀（同図5）、皿（同図6・7、図版40-8、10）小皿（同図4）、甕（同図9・10）、黒色土器A類椀（図版40-9）、A類鉢（同図11）がある。土師器椀（5）は内面にヘラミガキが認められる。皿（6・7）はナデ調整により端部が外方にのびる。黒色土器A類鉢（11）は外面を縦方向のケズリ調整で下半にはユビオサエがみられる。内面はヘラミガキされるがそれほど密ではない。破損の状況から高台があった可能性がある。掘立柱建物3には、土師器では皿（同図18）、小皿（同図17）、甕（同図16）、黒色土器A類椀（同図12～15）がある。土師器皿（18）はナデ調整により端部が外方にのびる。黒色土器A類椀は、内面にヘラミガキが施されるが、外面は不明瞭であるがケズリ後にヘラミガキが認められる。また高台は断

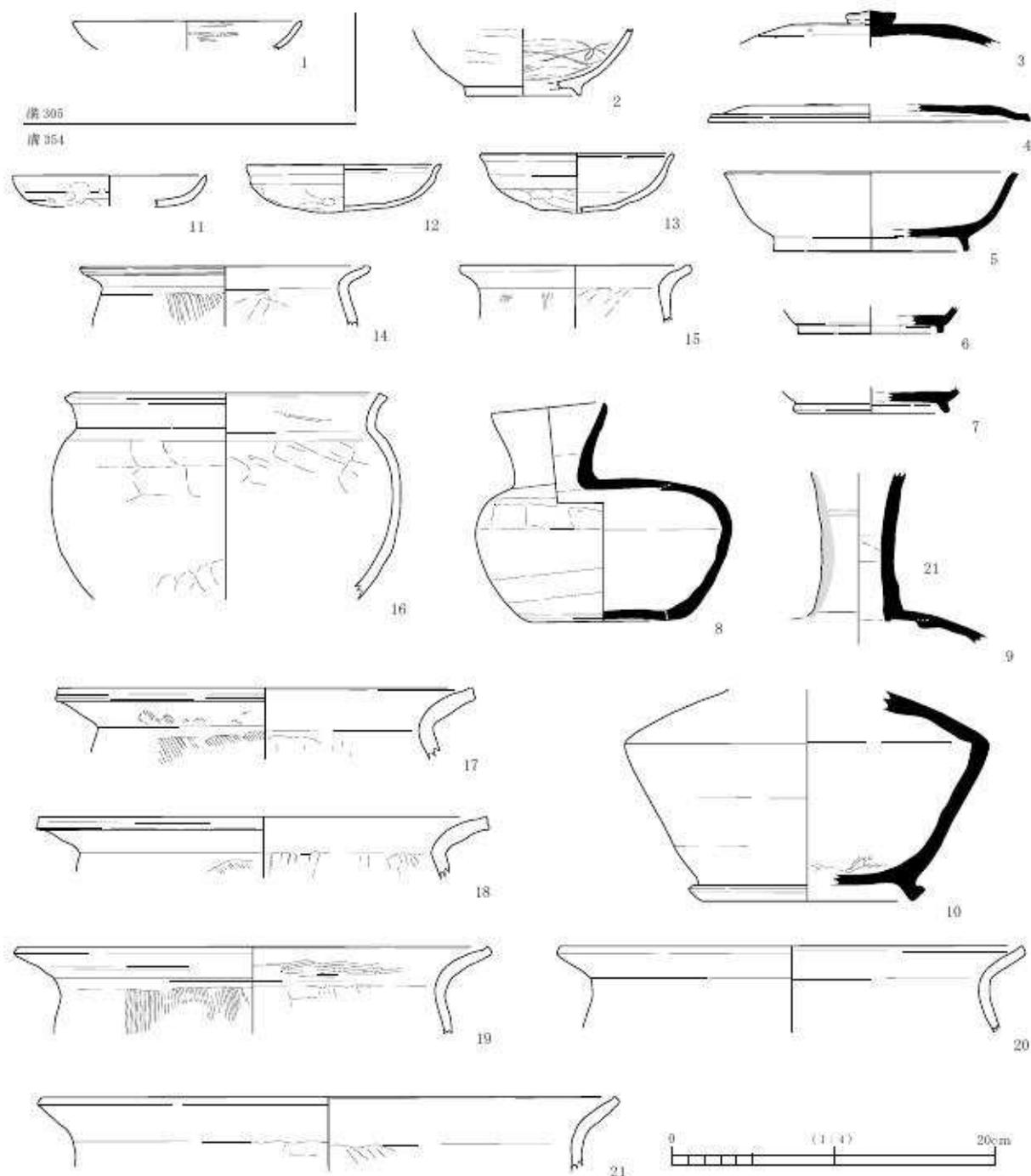


図64 D・E区第2面 遺構出土遺物・1 (1/4)

1 : 溝 305、2 ~ 21 : 溝 354

面形が逆三角形を呈する。掘立柱建物4には、土師器皿（同図19）、黒色土器A類碗（同図20～23、図版41-6）、土師器碗（図版41-7）がある。土師器皿（19）は口縁端部を外反させる。黒色土器A類碗は内面、外面ともにヘラミガキがみられるが、20の下半部はユビオサエを残す。また口縁部外面はナデ調整、高台は断面が逆三角形である。23は復元径14.7cm、器高4.9cmを測る。掘立柱建物5には土師器皿（同図26・27）、黒色土器A類碗（同図24・25）がある。24のA類碗は深碗形を呈し、「ハ」字状に開く高台をもつ。口縁部外面はナデ調整で、内外面とも不明瞭だがヘラミガキが認められる。こ

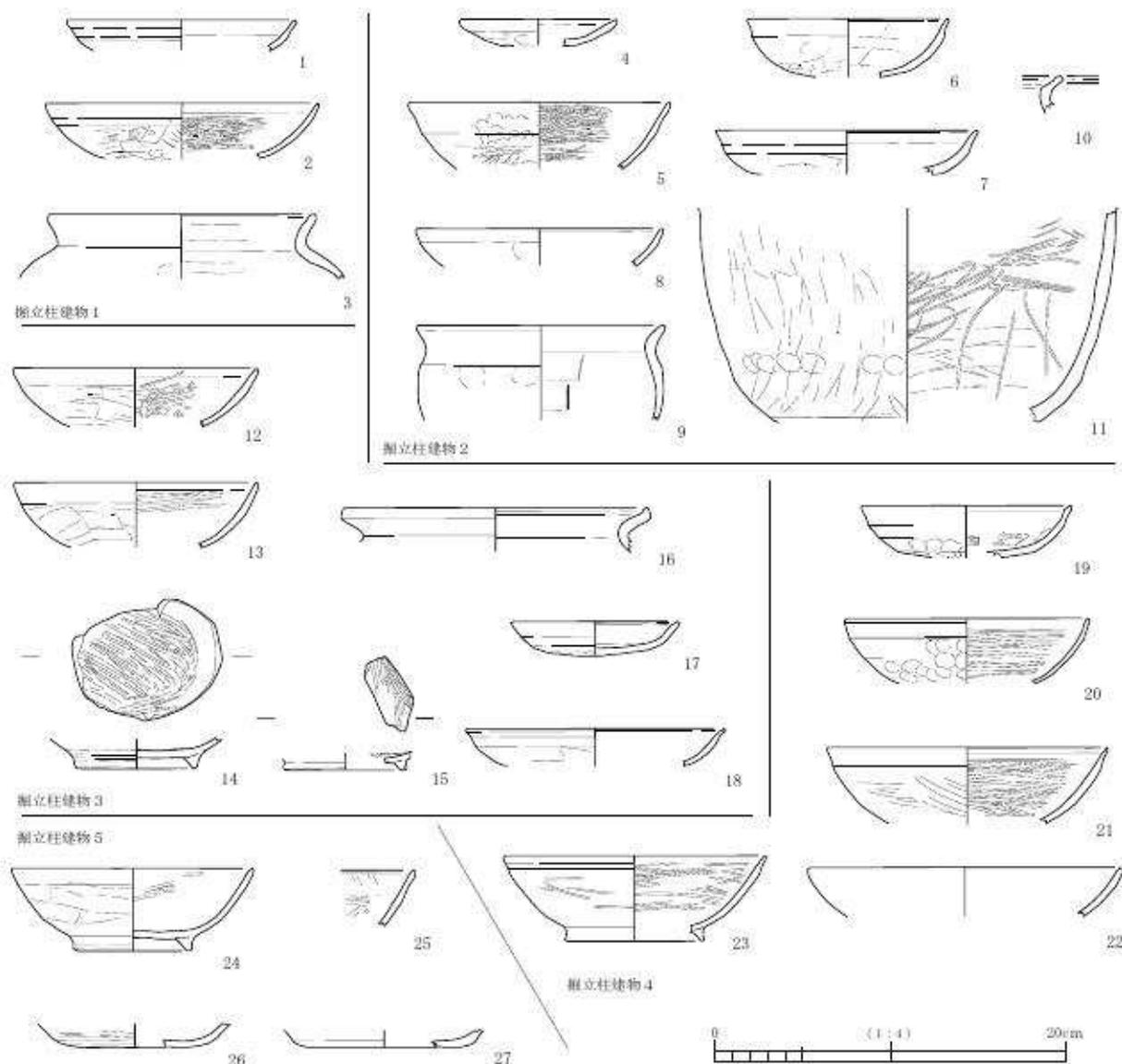


図65 D・E区第2面 遺構出土遺物・2 (1/4)

掘立柱建物1：ピット311 (1・3)、ピット313 (2)、
 掘立柱建物2：ピット477 (4・5)、ピット322 (6・9・10)、ピット330 (7)、ピット321 (8)、ピット461 (11)、
 掘立柱建物3：ピット326 (12～14)、ピット327 (15)、ピット320 (16・17)、ピット337 (18) :
 掘立柱建物4：ピット405 (19・20) ピット406 (21・23)、ピット407 (22)、
 掘立柱建物5：ピット387 (24)、ピット380 (25)、ピット369 (26)、ピット388 (27)

れら掘立柱建物のピットから出土した土器は、時期的に大きな隔たりがあるものではなく、黒色土器A類碗や土師器皿から概ね10世紀末から11世紀前半のものと思われる(森1990・(財)大阪市文化財協会1992)。なお柵列のピット1か所から黒色土器A類碗が出土している(図66)。

図67は土坑から出土した土器である。A群土坑のうち、土坑410からは黒色土器A類碗(同図1)土師器皿(同図2)、小皿(同図3・4)が出土している。土坑453からは土師器碗(同図5)、土師器皿(図版43-12)が、土坑476からは土師器小皿(同図23)が出土している。土坑447からは土師器小皿(同図8)、黒色土器B類碗(同図7)が出土している。7は

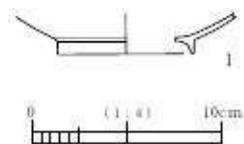


図66 D・E区第2面 遺構出土遺物・3 (1/4)
 1：柵1 (ピット464)

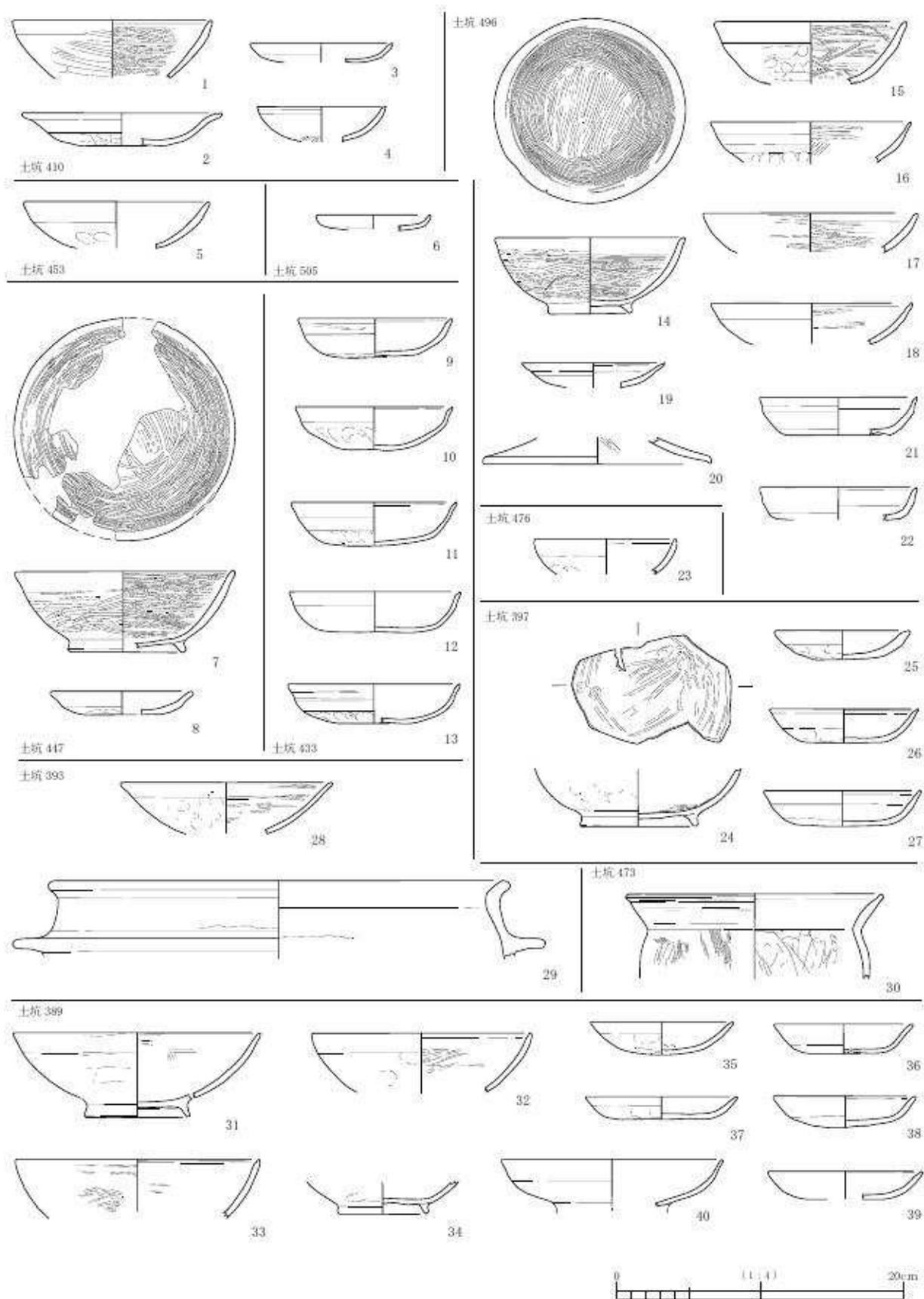


図 67 D・E区第2面 遺構出土遺物・4 (1/4)

1～4：土坑 410、5：土坑 453、6：土坑 505、7・8：土坑 447、9～13：土坑 433、
14～23：土坑 496、24～27：土坑 397、28・29：土坑 393、30：土坑 473、31～40：土坑 389

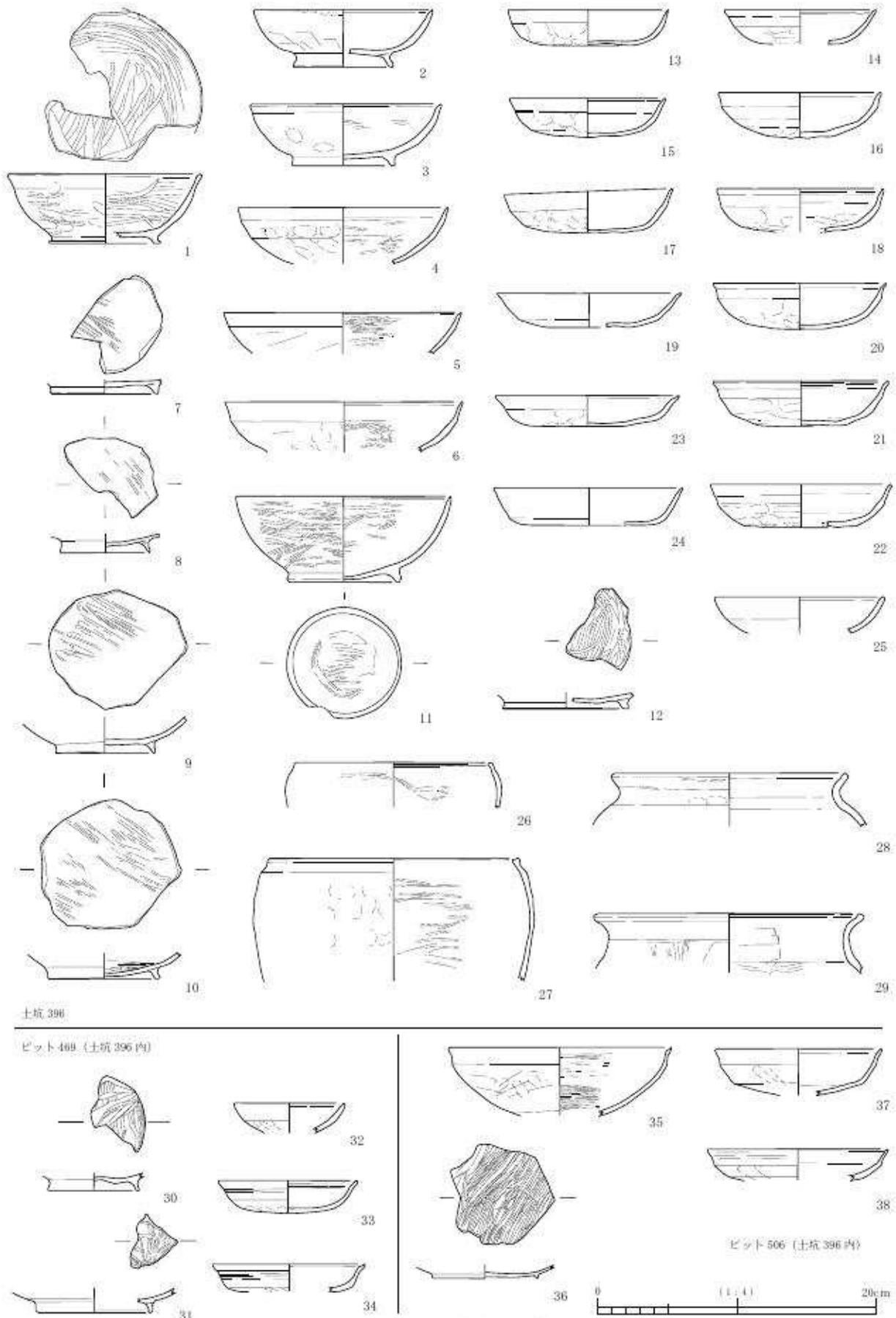


図 68 D・E区第2面 遺構出土遺物・5 (1/4)

1～29：土坑 396、30～34：ピット 469 (土坑 396 内)、35～38：ピット 506 (土坑 396 内)

口径 15.1 cm、器高 5.8 cmを測る。深碗形で内外面ともにヘラミガキが施されるが、外底面は不明瞭である。高台は断面逆台形で、「ハ」字状の形状となる。畿内系V類（森 1990）である。土坑 496 からは土師器小皿（同図 19）、土師器皿（同図 21・22、図版 42 - 9）、黒色土器A類碗（同図 15 ~ 18、図版 42 - 16）、黒色土器B類碗（同図 14）が出土している。黒色土器A類碗は口縁部外面をナデ調整して外方にのびる。外面のヘラミガキは不明瞭である。B類碗（14）は完形で口径 13.1 cm、器高 5.1 cmを測る。口縁部外面をナデ調整、内外面ともにヘラミガキを施し、外底面までみられる。外面のヘラミガキは4分割である。高台は断面逆台形である。深碗形の畿内系V類である。土坑 456 からは基盤層由来の弥生土器甕底部が出土している（図版 43 - 14）。土坑 505 からは土師器皿（同図 6）が出土している。

B群土坑のうち、土坑 393 からは、瓦器碗（同図 28）、土師器羽釜（同図 29）が出土している。瓦器碗は 13 世紀前半頃とみられ、上面遺構からの混入であろう。土坑 397 からは、土師器小皿（同図 25）、皿（同図 26・27、図版 45 - 3・6）、黒色土器A類碗（同図 24、図版 45 - 7）が出土している。土坑 433 からは土師器皿（同図 9 ~ 13、図版 43 - 7）、瓦器碗（図版 43 - 10）が出土している。9 ~ 13 の土師器皿は口径が 10.65 ~ 12 cm、器高が 2.8 ~ 3.1 cm とよく揃っており、外面 1 段ナデ（10・12）、2 段ナデ（9・11・13）に分けられる。口縁部はいずれも外方にのび、端部に内傾面をもつ。瓦器碗を伴い、12 世紀前半頃とみられる。

C群土坑のうち、土坑 389 からは、土師器碗（同図 34）、皿（同図 37・39）、小皿（同図 35・36・38）、高台付皿（同図 40）、黒色土器A類碗（同図 31・32）、黒色土器B類碗（同図 33）、平瓦（図版 44 - 16）が出土している。

図 68 はC群土坑の土坑 396 から出土した遺物である。土師器皿（図 68 - 13 ~ 25、図版 46 - 7・16）、甕（同図 28・29、図版 47 - 15）、黒色土器A類碗（同図 1 ~ 10、図版 47 - 3・6・11）、A類鉢（同図 27）、B類碗（同図 11・12）、B類鉢（同図 26）が出土している。土師器皿は a. 1 段ナデで口縁部が外方にややのびるもの（13・15・17）、b. 2 段ナデで口縁部が外反するもの（14・16・18・20 ~ 22）、c. 1 段ナデで口縁部が外反してのびるもの（19・20・24）、d. やや厚手で内湾する口縁（25）に分けられる。a は法量に大小あり、c は他よりも浅い。黒色土器A類碗は外面のミガキが不明瞭のものもあるが、口縁部外面をナデ調整、高台は断面三角形や逆台形で「ハ」字状になる。口径は 13 ~ 15 cm、器高は 4 ~ 5 cmを測る。黒色土器B類碗（11）は口径 15.4 cm、器高 6.1 cmを測る。深碗形の畿内系V類である。外底面にもヘラミガキが認められ、口縁部内端に一条の沈線をめぐらす。楠葉型黒色土器B類とみられる。この他、土坑 396 内のピット 469、506 からも土師器皿（同図 32 ~ 34・37・38）、黒色土器A類碗（同図 30・31・35・36、図版 49 - 6・8）、土師器碗（図版 49 - 3・4）が出土している。土坑 396 の時期は概ね 11 世紀前半とみられる。土坑 473 からは土師器甕（図 67 - 30）が出土している。

図 69 は自然流路 507 の出土遺物である。弥生時代後期から古墳時代前期（前半）までの遺物を含む。

図 70 はその他の遺構からの出土遺物である。基本的には上記で触れた遺構の出土遺物と大きく変わらない。土師器皿、小皿、甕、黒色土器A類碗が多く、わずかに弥生後期のタタキ甕（同図 1）布留式甕（同図 2）もみられる。なお同図 13 は「て」の字口縁の皿であるが、今回の調査ではほとんど出土していない。土坑 396 にも認められず、主要器種にはなっていないものとみられる。施釉陶器は緑釉陶器の破片がわずかに認められるのみで（図版 51 - a）、量的には少ないと言える。

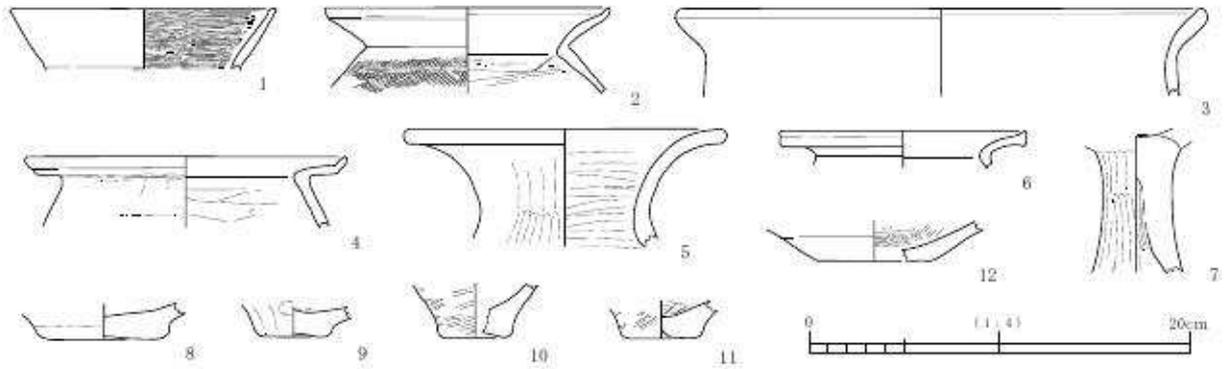


図69 D・E区第2面 遺構出土遺物・6 (1/4)
1～12：自然流路507

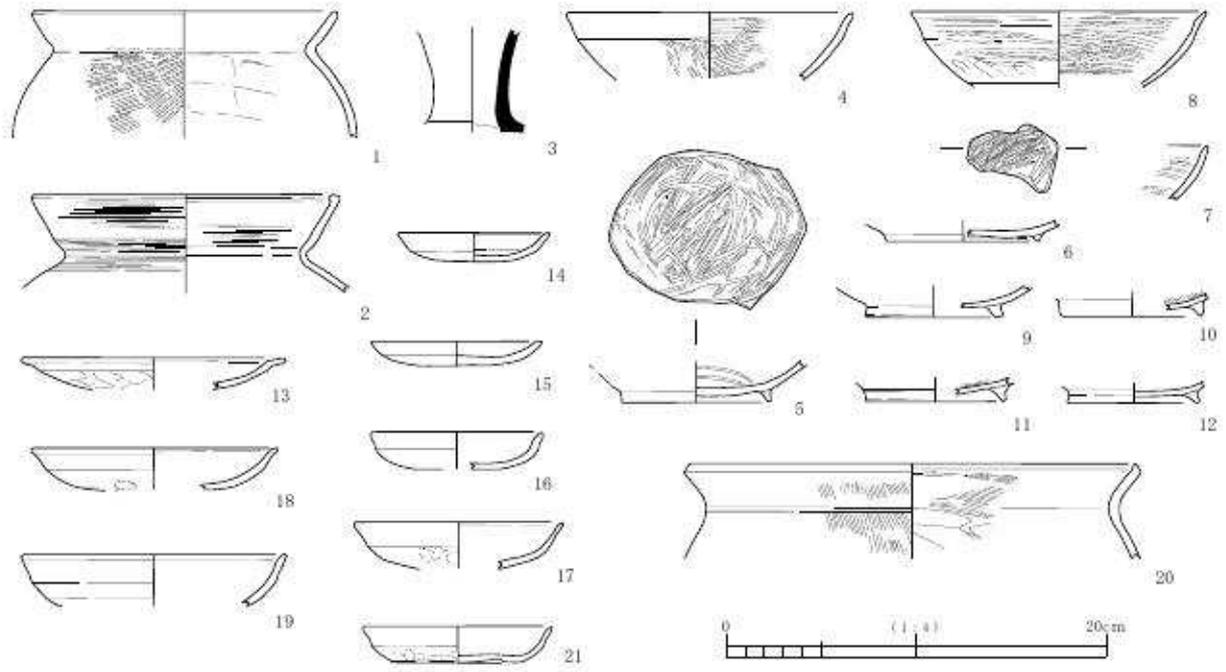


図70 D・E区第2面 遺構出土遺物・7 (1/4)
1：土坑343、2：土坑355、3・18：土坑398、4・5・12・15：土坑503、6：土坑472、7：土坑400、
8：土坑498、9：土坑333、10・11・13・17・21：土坑432、14：土坑431、16：土坑438、19・20：土坑412

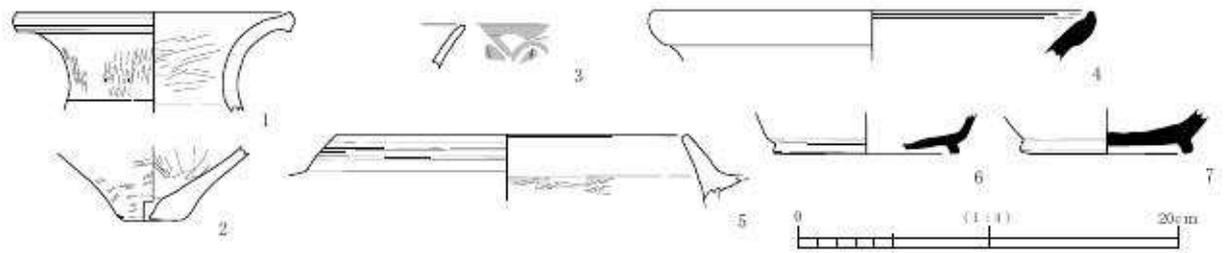


図71 D区 包含層出土遺物・1 (1/4)
1：2～3層、3～7：4～5層

(3) 包含層出土遺物

図71・図版51-cはD区2～3層および4～5層から出土した遺物である。弥生土器では退化した凹線を施した壺口縁(図71-1)、甕底部(同図2)、須恵器では坏B(同図6・7、図版51-13・

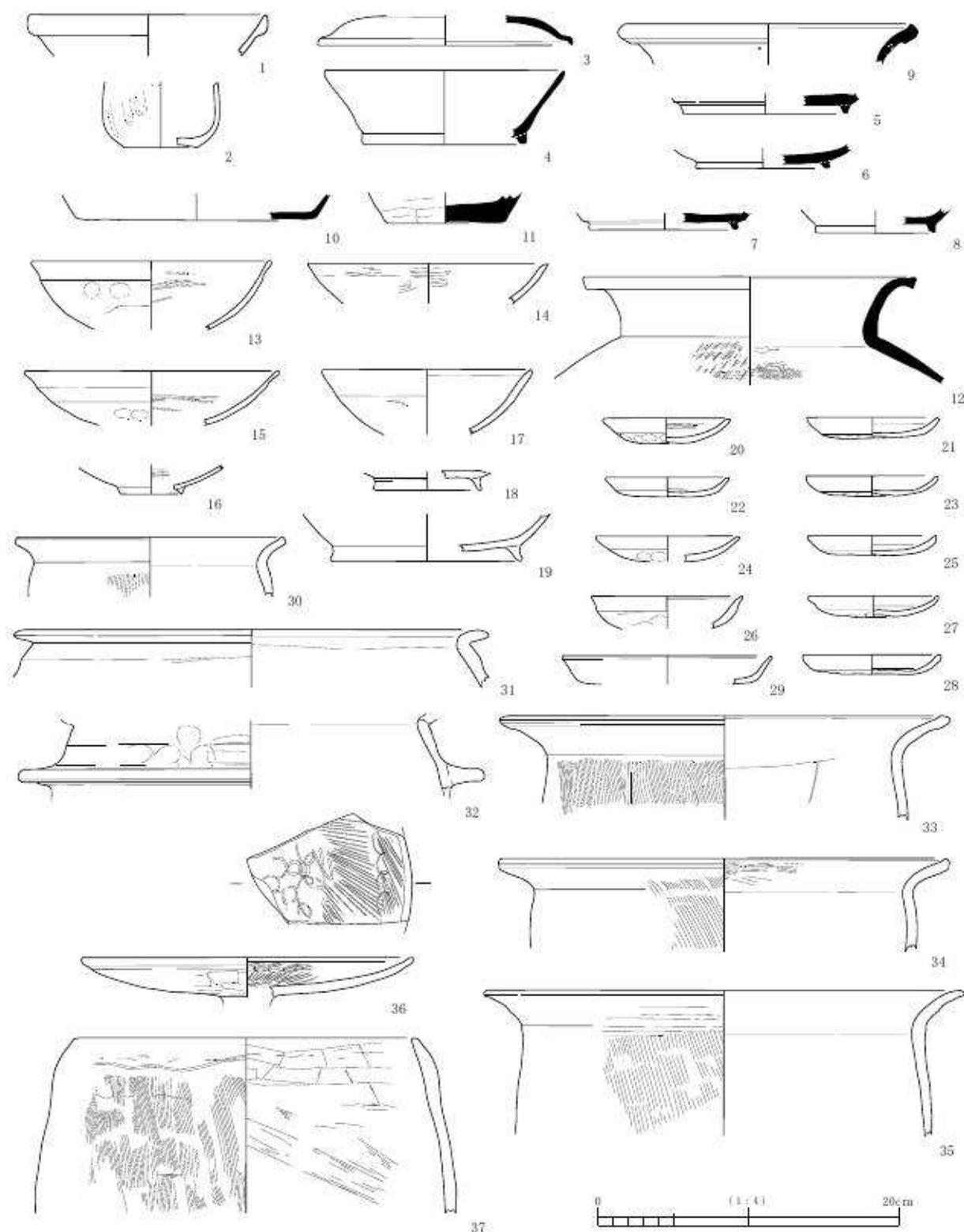


図72 D区 包含層出土遺物・2 (1/4)
1～37: 6層

18)、甕 (同図4)、瓦器椀 (同図版10)、瓦質羽釜 (同図5、同図版11) 青磁椀 (同図3)、平瓦 (同図版23)、円面硯 (同図版16)、円筒埴輪片 (同図版22) がある。

図72、図版52・53はD区6層出土遺物で、白磁椀 (同図1)、瓦器椀 (同図13～16、図版52-4・5)、

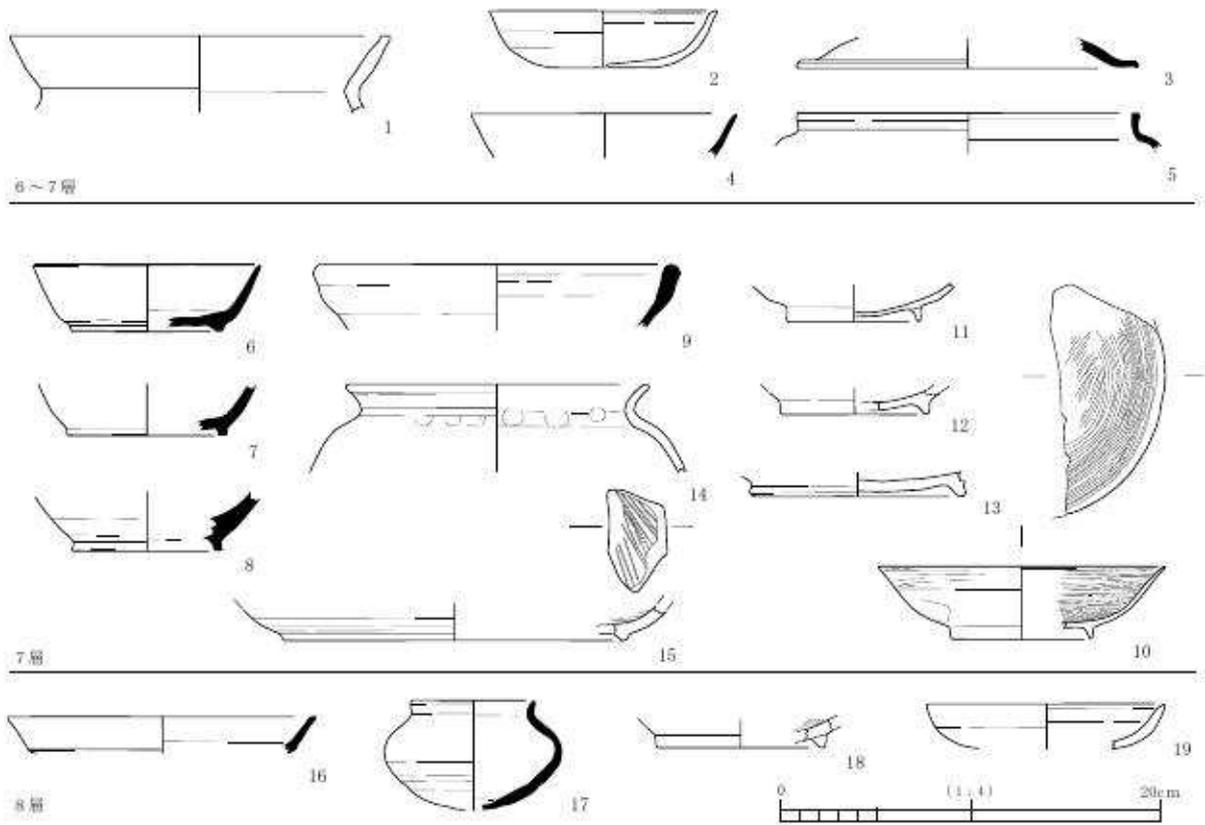


図73 D区 包含層出土遺物・3 (1/4)
1～5：6～7層、6～15：7層：16～19：8層

瓦器皿（同図20・22・24）、土師器椀（同図17～19、図版53-4）、皿・小皿（同図20～29）、甕（同図33～35）、羽釜（同図31・32）などがみられる。高杯（同図36）は8世紀代のものである。須恵器には蓋、杯、甕などが出土している（同図3～12）。また円筒埴輪片も出土している（図版54-b）。

図73、図版54・55は6層～8層にかけての遺物である。須恵器杯、小壺、黒色土器A類椀、土師器皿、甕などがみられる。図74はD区の北東部において認められた土層からの出土遺物である。基盤層上の地形の凹凸が整地された際に含まれた遺物で、11～19層は整地単位を示す。これらは基本層序の8・9層に対応する。弥生土器、布留式甕、須恵器、土師器椀、皿、黒色土器などがみられる。

図75、図版59～62はE区包含層出土遺物である。白磁碗、須恵器、黒色土器等がみられる。

（4）小結

第1面では、D・E区の北半部においては中型の畦畔、溝、窪地等を検出しただけであり、南半部よりも地形がやや低く水田が営まれていた可能性も考えられるが、荒地で未利用地と考えておく。南半部は、小溝群や方形区画等、畑作関連の遺構と考えているが、個々の規模が小さいこと等から一般的な畑地とは異なるものの可能性を考えている。時期的には中世前半頃のものと考えている。

第2面では、D・E区の北東部、南東部、南西部で中世中頃以降の削平があったと考えられ、特に中世後半以降の削平が激しいと考えられ、遺構・遺物の遺存状況が良好でなかったことが指摘できる。

建物は、掘立柱建物を5棟を復元し、その建築方位から掘立柱建物1と掘立柱建物2（第1グループ）、掘立柱建物3～5（第2グループ）の2グループに分類できることを指摘した。遺物から第2グループ

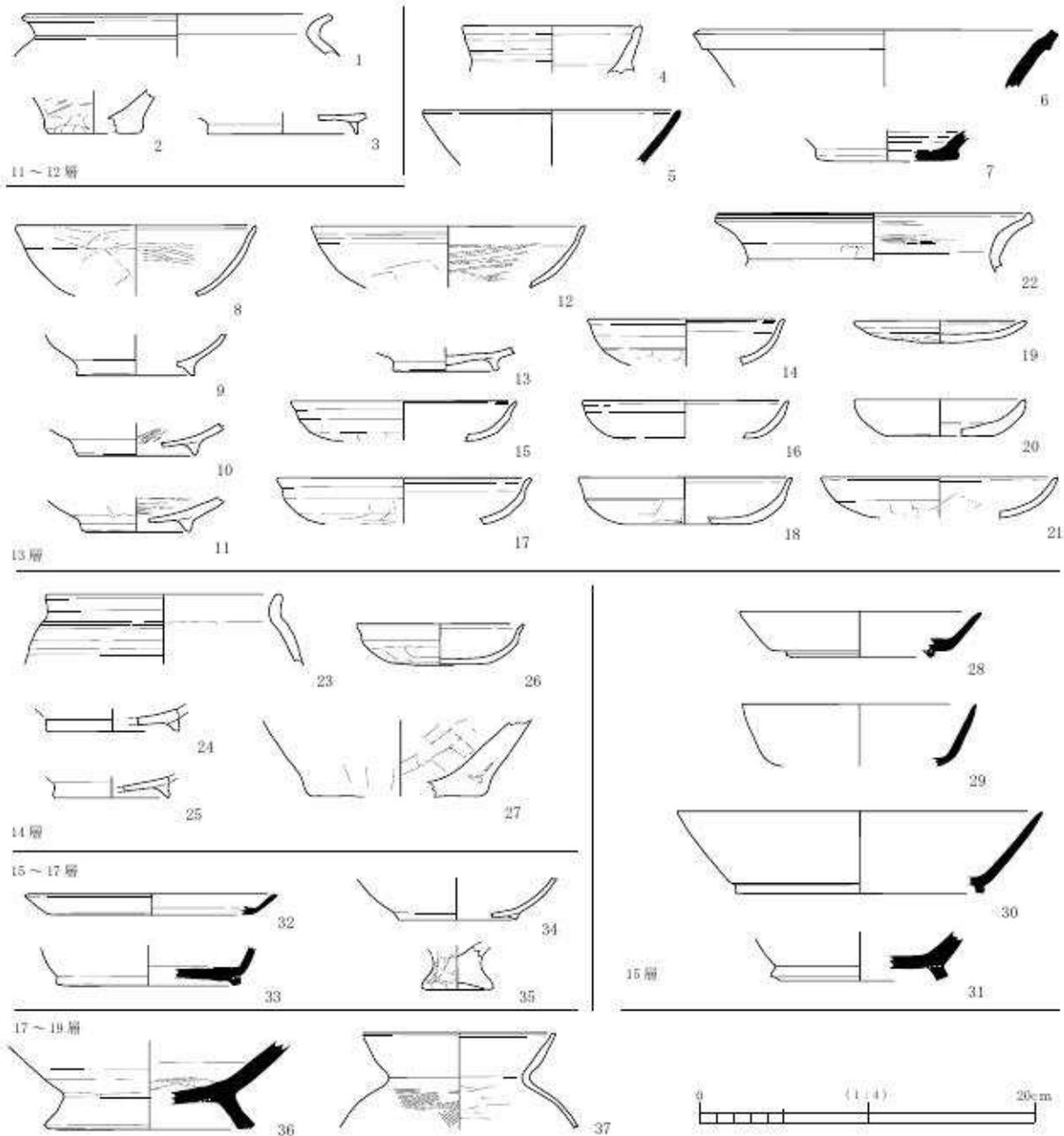


図74 D区 包含層出土遺物・4 (1/4)

1～3：11～12層、4～22：13層、23～27：14層、28～31：15層、32～35：15～17層、36：17層、37：18～19層

が古く、第1グループが新しいと判断した。建物は、新しい第1グループの方が太い柱を使用しているようである。また、柵は2ヶ所で復元したが、その方位から、第2グループに関係するものである。

掘立柱建物4と掘立柱建物5の間にある溝354や土坑389、溝394は用水施設の可能性を考えている。水源を調査地の南から南東側に求めたものであることが推察できる。最終的には人為的に埋められたものである。遺物としては、土坑396から出土した遺物は、供膳具が中心であることが指摘できる。また土坑433は、地鎮に関係するものと考えている。また調査区北半部で検出した溝301と溝305・306は、その南西側に展開する建物や溝等の遺構が機能した時期と重なるため、これらの施設の北東側を画するものではないかと考えられる。

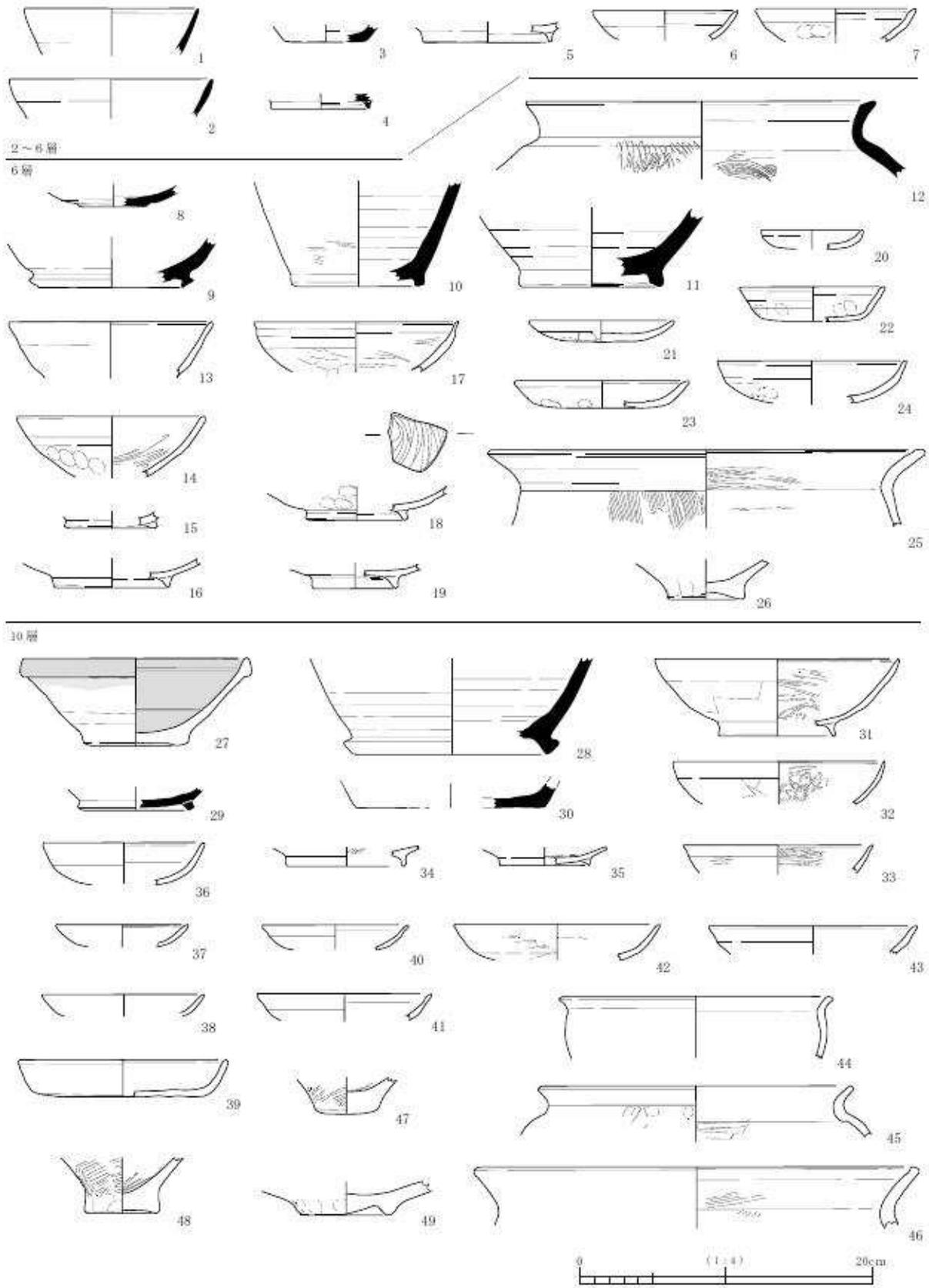


図75 E区 包含層出土遺物 (1/4)
1~7: 2~6層、8~26: 6層、27~49: 10層

第3節 F・G区の調査

第1項 層序

土層は西壁については西壁断面を図76に示す。F・G区の上部0.8～1mは、盛土である。盛土は上下2層に分かれており、共に戦後のものである。その盛土の下には、1層の灰色～灰白色を呈するシルト～微砂の堆積は、旧耕作土である。厚さ0.1～0.15mで、盛土時に南端部以外は整地された状況で遺存している。その下層の2層は、明黄灰色～灰オリーブ色を呈する厚さ0.05～0.1mのシルト～粘土の堆積は、旧床土と考えられる。3層はA・B・C区でも認められ、極暗赤褐色を呈する粘土で、厚さ0.15～0.2mである。上面に著しい干痕が認められ、割れには灰色のシルト～粘土が充填している。上部洪積層かその二次堆積と考えられる。この3上面が、F・G区の1面である。基盤層は明褐色シルト～粘土の上位層と黒褐色シルト～粘土の下位層からなるが、調査区の北部ほど下位層が露出する。

第2項 検出された遺構と遺物

(1) 中世の遺構

A・B・C区で検出した1面に相当する遺構面で、やや高いT.P.+22.3～22.4mで検出している。検出遺構は、A・B・C区の1面同様に土坑・畦畔・小溝群であるが、近・現代の削平が激しく、検出密度はかなり希薄である(図77、図版21・22)。

溝570(図77・78、図版21)

G区の中央部で検出した北西-南東方向の溝で、幅0.2～0.3m、深さ0.03mである。北西部で途切れて検出しているが、この部分で底が浅くなっていたことと、後世の削平によるものと考えている。この溝を境に南西側の小溝群と北東側の溝群等の遺構の在り方に違いがあり、この溝も耕作地を区画していると考えている。遺物は出土していない。

溝607(図77・78)

F区の南端部で検出した北西-南東方向の溝である。幅0.15～0.45m、深さ0.01～0.04mであるが、後世の削平で本来の形状が失われていることを考えると、幅0.5m、深さ0.1m程であったと推定できる。溝の南西側は攪乱で遺構面が完全に失われているが、僅かに溝に沿って南西側が高くなるように、畦畔の痕跡の可能性があり、この溝と畦畔で耕作地を区画していると考えている。遺物は出土していない。

溝633(図77・78)

F区の中央部で検出した北西-南東方向の溝である。幅0.25～1.2m、深さ0.01～0.05mで、後述する方形落ち込み640の南西隅のところで、2m程南西に直角に曲がり、また直角に曲がって、段違い状になっている。溝607とこの溝633の間的小溝群の在り方と、溝633より北東側の遺構の在り方に違いがあり、この溝も耕作地を区画していると考えている。遺物は、瓦質の摺り鉢や瓦器片を含む土器片が出土している。

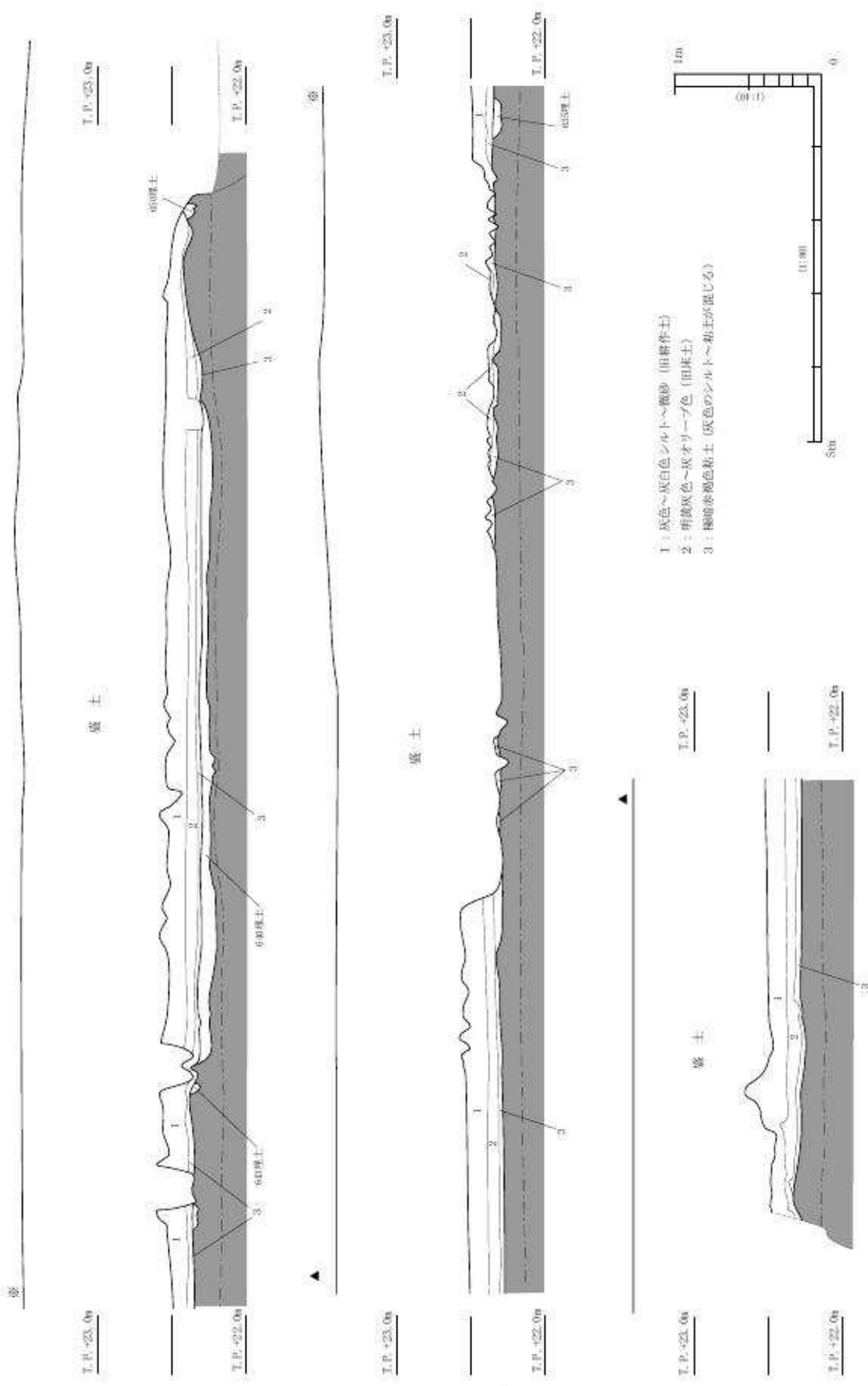


図 76 F・G区 西壁断面図

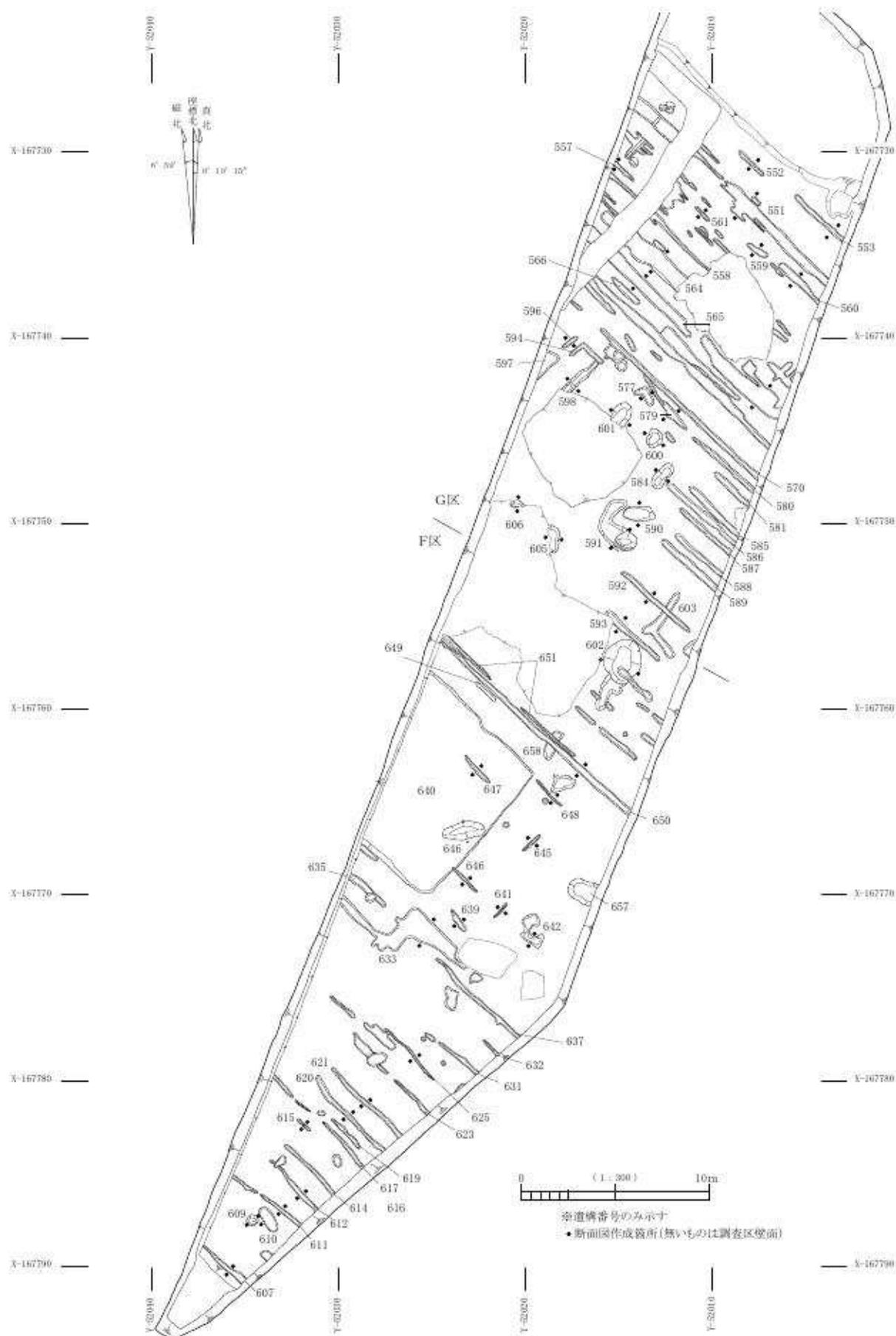


図 77 F・G区 全体平面図 (1/300)

溝 650 (図 77・78、図版 21)

F 区の北部で検出した北西-南東方向の溝である。幅 0.15～0.4 m、深さ 0.01～0.04 m であるが、溝 607 同様に幅 0.5 m、深さ 0.1 m 程であったと推定できる。溝 633 とこの溝 650 の間では、小溝ではなく、土坑が多く検出されていることから、この溝も耕作地を区画していると考えている。遺物は出土していない。

小溝群 a (溝 611・612・614・615・617・619～621・623～625・631・632・635・637) (図 77・78、図版 22)

F 区の溝 607 と溝 633 の間で検出した北西-南東方向の小溝群である。どの溝も幅 0.2 m、深さ 0.01～0.02 m で、1.3～2.1 m の間隔で平行している。小溝と小溝の間に畝が作られていたと考えており、小溝は畝間の痕跡と考えている。遺構の時期としては、溝 619・623 から瓦質土器の小片等が出土しており、中世後半頃を考えている。

小溝群 b (639・641・643～645・647～649) (図 77・78、図版 22)

F 区の溝 633 と溝 650 の間、方形落ち込み 640 の付近で検出した北西-南東方向の小溝群である。方形落ち込み 640 を切って小溝が作られている。方向が北西-南東と北東-南西方向の二方向で疎らではあるが、方形落ち込み 640 廃絶後の耕作痕と考える。遺物は出土していない。

小溝群 c (溝 579～581・585～589・592～594・596・651) (図 77・78、図版 22)

F 区の溝 650 と G 区の溝 570 の間で検出した北西-南東方向の小溝群である。殆ど小溝が南東部で終わり北西には延びず、北西部で土坑が多く検出されているのは、畝を作る耕作とそうでないものの違いに因ると考えている。遺物は、溝 579・580・592 から土師器・須恵器・陶器の小片が出土しており、遺構の時期としては、溝 579 から出土した陶器摺り鉢片から中世後半頃を考えている。

小溝群 d (溝 577・598・603) (図 77・78、図版 22)

F 区の溝 650 と G 区の溝 570 の間で検出した小溝群であるが、溝の作られている方向が北西-南東と北東-南西方向の二方向で疎らであることから、小溝群とは異なる単位の耕作痕と考える。遺物は、溝 577・598 から土師器・須恵器・瓦質土器の小片等が出土しており、遺構の時期としては、中世後半頃を考えている。

小溝群 e (溝 552・553・557～561・566～569) (図 77・78、図版 22)

G 区の溝 570 の北東側で検出した幅 0.2 m、深さ 0.01～0.02 m、北西-南東方向の小溝群である。小溝と小溝の間に畝が作られていたと考えており、小溝は畝間の痕跡と考えている。遺物は、溝 552・553・557・560・566・567・568 から土師器・須恵器・瓦質土器の小片等が出土しており、遺構の時期としては、中世後半頃を考えている。なお、溝 557 からサヌカイト剥片が出土している。

溝 551・564・565 (図 77・78、図版 21)

F・G 区では、G 区の溝 570 の北東側でのみ検出している。大部分が幅 0.4～0.6 m、深さ 0.02～0.1 m、北西⇄南東方向の溝としているが、A・B・C 区の 1 面で検出した溝状の土坑と同様の遺構と考えている。粘土採取や深耕によるものであろう。遺物は溝 551 から土師器・須恵器片、溝 564 から土師器片、溝 565 から土師器・須恵器片が出土している。

土坑 584・590・591・597・600～602・605・606 (図 77・78、図版 21)

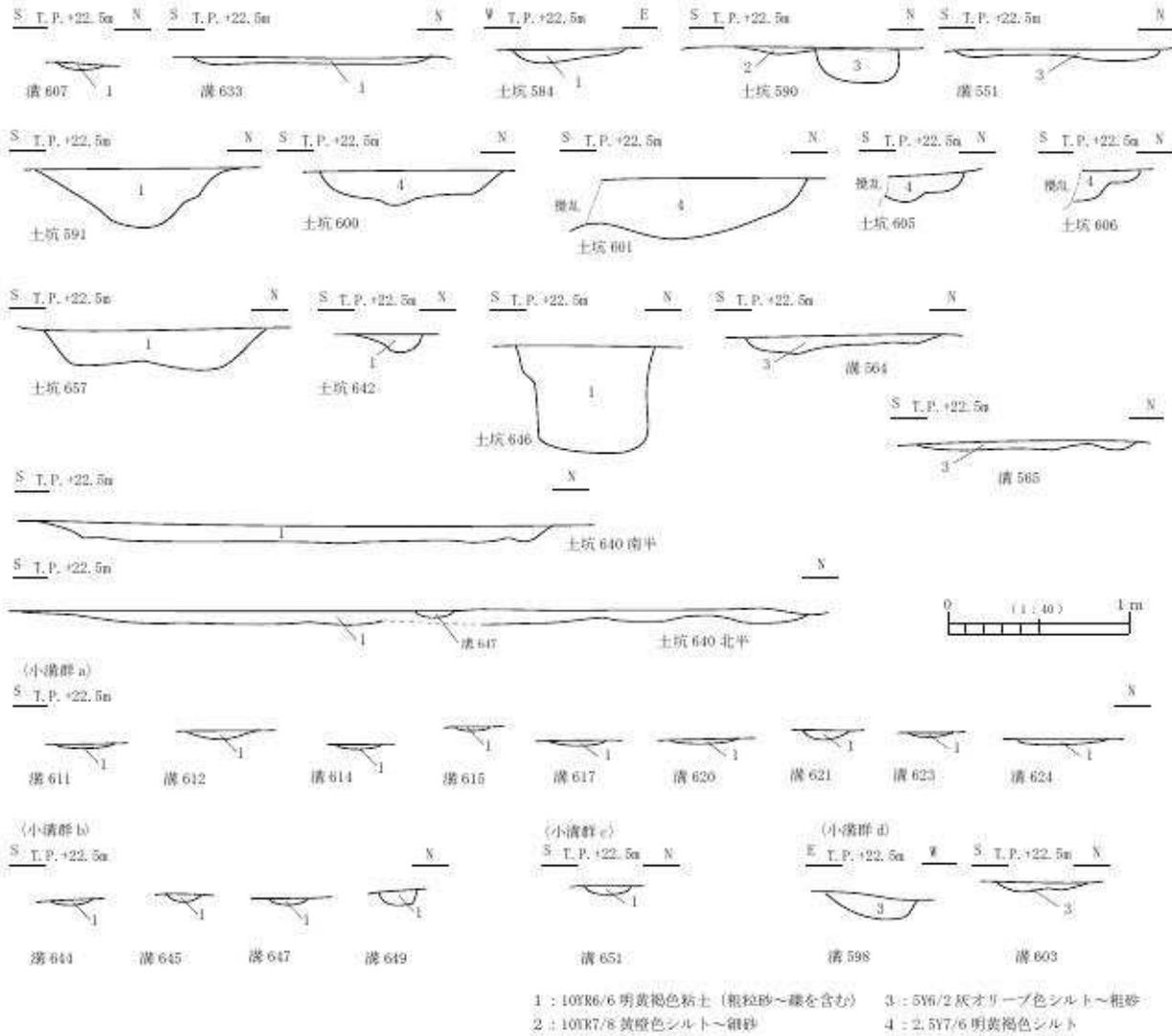


図78 F・G区 遺構断面図 (1/40)

F・G区の中央部で検出した土坑群である。最大のもは、F・G区に跨って検出した土坑602で径2m、深さ0.5mの鉢状である。最小はG区の土坑606で、長径0.8m、短径0.4mの不定形で、深さ0.16mである。これらは、概ねこの付近で見られる極暗赤褐色を呈する粘土層を掘り下げ、明黄褐色粘土からシルトで埋没していることから、この極暗赤褐色を呈する粘土を採掘したものではないかと考えている。どの土坑からも遺物は出土していない。

土坑642 (図77・78)

F区の中央やや北東寄りで検出した土坑である。2から3基の土坑が繋がったもので、先の10基の土坑に類似しているが、埋土から縄文時代の石鏃が完形で出土している。埋土も極暗赤褐色粘土が主で、干痕が

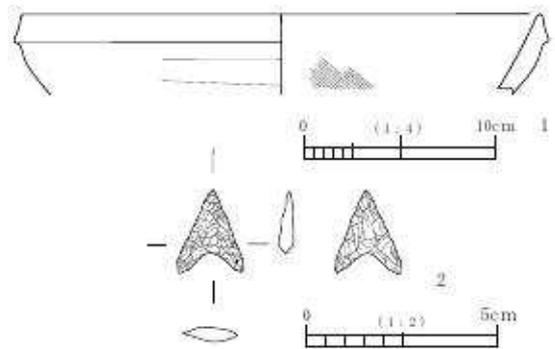


図79 F・G区 出土遺物 (1/4・1/2)

ら明黄褐色粘土が入り込んだとも見えることから、時代が古くなる可能性が指摘できる。遺物は石鏃が出土しただけである。

土坑 646 (図 77・78)

F区の中央やや北寄りで検出した土坑である。長径2.2m、短径0.8mの長楕円形で、深さ0.6mの断面が底の平らなU字を呈する。明黄褐色粘土と砂が混じる状況の埋土で、底付近は上部より砂～粗砂の割合が多い状況であった。遺物は出土しなかったが、周辺に同様の埋没状況の遺構は無いこと、方形落ち込み640掘削後の検出であること等から、時代が古くなる可能性を指摘できる。遺物は出土していない。

土坑 657 (図 77・78)

F区の中央やや東寄りで検出した土坑である。長径1.5m以上、短径1.1～1.3mの楕円形で、深さ0.2～0.25mの断面が皿状を呈する。埋土は、砂粒の混ざる明黄褐色粘土からシルトである。遺物は出土していない。

土坑 658 (図 77・78)

F区の北東部で検出した土坑である。長径1.6m、短径0.5～0.6mの楕円形に近い不定形で、深さ0.05～0.16mの断面が皿状で、底は凹凸を呈する。遺物は出土していない。

方形落ち込み 640 (図 77・78、図版 21)

F区の中央やや北寄りで検出した遺構である。溝633と溝650の間に、一辺4.5m×4m以上の方形で、深さ0.1mで落ち込みの南西辺寄りに一辺1～1.5m四方が底より0.1m程高くなっている。埋土は明黄褐色～灰黄褐色を呈するシルトと細砂の混合であり、水成堆積のようである。

溜池のような貯水施設が削平され僅かに遺存したと考えている。遺物は、土師器・須恵器・瓦質土器の小片等が出土している。遺構の時期としては、羽釜片等から中世後半頃を考えている。

遺物 (図 79、図版 62)

F・G区から出土した遺物は少ない。図79-1は瓦質の鉢である。摩滅が著しい。2はサヌカイト製の石鏃である。F区の基盤層直上から出土した。その他、土師質土器や陶器、土製品が出土している(図版62-8～10)。

(2) 小結

F・G区の調査は、A・B・C区1面の北側部分で検出した遺構と時代的にも内容もほぼ同じである。年代としては、中世後半の14～15世紀を上限と考え、検出した遺構で近世後半まで下ると出来るものは確認していない。地割の基準は、現在この地域で主に見られるものと同じである。土坑の大部分は掘削状況から粘土採掘の可能性が高いと考えられ、時期は、耕作地造成以前のものが多いことから、中世後半以前とと考えている。

第4章 総括

今回の発掘調査では、調査区ごとに特徴的な遺構のあり方が明らかになった。ここで時期ごとに簡単にまとめておきたい。

(1) 中近世以降

A・B・C区では第1面の遺構として、近世以降は耕作地であったが、中世段階(13～14世紀)では溝・土坑群が検出された。これらは基盤層が砂礫層ではなく、その上位に堆積した粘質シルト層の分布範囲と重なっていることから、この粘土の掘削を目的とした遺構と推測され、粘土取りの可能性が考えられるものの、耕作に伴って形成された可能性も否定はできない。溝・土坑群の特徴としては、軸方向が現在の地割りの向き(北西方向)に沿っている点、遺構の切り合いが顕著ではない点、底面の凹凸がみられ、中には拳大の円礫が置かれている点が挙げられる。溝・土坑群の北側(A区北部)と南側(B・C区南部)、では当該期の遺構はあまり見られなかった。南部では畦畔と耕作溝が一部で検出され、耕作域であることが分かった。また溝・土坑群より前出する掘立柱建物を1棟検出したが、地割の方向よりもやや北にふれている。集落を形成した建物なのか性格は不明である。

D・E区では第1面の遺構として12世紀中頃から13世紀前半頃にかけての溝・土坑を検出した。溝361、溝345などの北北東-南南西の小溝は耕作溝とみられ、方形区画350や土坑351～353もそれらに直交する軸を取り、耕作に関連した遺構(深耕による溝)の可能性もあるが、詳細は不明である。

F・G区では北西-南東方向の耕作溝群を検出した。溝の規模によっていくつかのグルーピングが示唆される。

以上のように、中近世以降についてはA・B・C区の溝・土坑群が粘土取りの可能性はあるが、基本的には耕作地として土地利用されていた。

(2) 古代

A・B・C区では第2面の遺構としてB・C区南部で複数の溝・土坑が切り合いながら連続的に検出された(土坑220～222、溝223など)。これらも中世の遺構と同様に基盤層が粘質シルトとなる部分で検出されたが、その位置が流路232の肩ラインに平行して掘削されており、中世の溝・土坑群とは方向を異にする。また切り合いながら連続している点も異なるが、底面の凹凸、円礫の検出は中世の溝・土坑群と共通する特徴である。流路の埋没(奈良～平安時代)以降に掘削されたもので、土坑222から黒色土器A類碗が出土していること、遺構を覆う包含層の8・9層からも黒色土器A類碗が出土していることから、これらの遺構の時期は10～11世紀代とみられる。これは後述するD・E区の第2面の遺構群と時期的に重なってくる。

D・E区では第2面の遺構として、5棟の掘立柱建物と大小様々な土坑を検出した。掘立柱建物はその軸方向により掘立柱建物1と2、掘立柱建物3～5の2群に分けられるが、掘立柱建物1と2は軸方向が異なっており、群としては別として3群にするべきかもしれない。掘立柱建物3～5は柵1・2を含め、方位が揃っており、およそ座標北に対して55°西に振っている。遺構の報告では掘立柱建物3

～5の方が時期的に古いとしたが、それほどの時期差はみられないと思われる。出土土器からは概ね両群とも11世紀の前半を中心とする時期としておきたい。

掘立柱建物以外では、大小の土坑群が検出された。これらは掘立柱建物2と4の南側に集中しており、出土土器は供膳具を主体として貯蔵具、調理具もみられる。基本的には廃棄土坑とみられるが、土坑433の土師器皿の検出状況(図版20-e)は地鎮に関する可能性がある。これらの土坑群のうち瓦器碗が出土した土坑393は12世紀前半頃を想定したが、それ以外は11世紀前半を中心とする時期とみられる。掘立柱建物とこれらの土坑群により、平安時代後半の集落の一端が検出されたといえる。なお溝354は奈良時代やそれ以前の遺物も含まれ、上記の遺構よりは古い(9世紀前半頃)とみられる。溝機能の消失後に整地されたものとしたが、このような奈良時代から平安時代初頭ころの遺物を含む土層が本区包含層や、D区北東部の整地層とみられる土層、A・B・C区の流路232埋没に伴い形成された水平堆積の包含層などに認められる。この時期以降に周辺で地形の凹凸を均す造作が行われた可能性を示している。

(3) 古墳時代

A・B・C区南部で竪穴建物228と流路232を検出した。竪穴建物228はカマドの位置、柱穴のない建物の検出状況、タタキ目をもつ韓式系土器の出土の点から渡来系の要素を備えている。今回の調査では1棟のみの検出だったが近隣に当該期の遺構が検出される可能性は十分ある。

流路232の14層出土土器は竪穴建物228と形式的には同時期としてよく、二重口縁壺、小型丸底壺、器台、高杯など器種は多種類にわたる。須恵器壺を模した土師器は特徴的な遺物である。鉄製品としては鉄鐔とみられる製品がある。帰属時期に幅があるが、古墳以外からの出土例として貴重な類例といえることができる。

【参考文献】

- 大阪府教育委員会 2012 『和泉寺跡・府中遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告2011-3
- 大阪府教育委員会 2013 『和泉寺跡・府中遺跡Ⅱ』大阪府埋蔵文化財調査報告2012-5
- 大阪府教育委員会 2015 『和泉寺跡・府中遺跡Ⅲ』大阪府埋蔵文化財調査報告2014-5
- 大阪府立近つ飛鳥博物館 2004 『年代のものさし—陶器の須恵器—』大阪府立近つ飛鳥博物館図録40
- 古代の土器研究会編 1992 『古代の土器1 都城の土器集成』
- 古代の土器研究会編 1993 『古代の土器2 都城の土器集成Ⅱ』
- 財団法人大阪市文化時協会 1992 『長原遺跡発掘調査報告V 市営長吉住宅建設に伴う発掘調査報告書』
- 中村 浩 2001 『和泉陶器窯 出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版
- 早野浩二 2008 「古墳時代の鉄鐔について」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第9号
- 森島康雄 1995 「瓦器碗」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
- 森 隆 1990・1991 「西日本の黒色土器生産(上)(中)(下)」『考古学研究』第37巻第2・3・4号
- 森 隆 1995 「黒色土器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
- 西村 歩・池峯龍彦 2006 「和泉地域」『古式土師器の年代学』(財)大阪府文化財センター

図 版

報告書抄録

ふりがな	ふちゅういせき							
書名	府中遺跡							
副書名	都市計画道路大阪岸和田南海線街路築造事業に伴う発掘調査							
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	2017 - 3							
編著者名	岡田 賢 (編)・岩瀬 透・松岡良憲							
編集機関	大阪府教育委員会							
所在地	〒 540 - 8571 大阪府大阪市中央区大手前二丁目 TEL 06-6941-0351							
発行年月日	2018 年 3 月 31 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡 番号	° / ′	° / ′			
ふちゅう 府中遺跡	おほさかふ 大阪府 いずみし 和泉市 ふちゅう 府中町 らちゅうめ 五丁目	27219	34	34° 29′ 6″	135° 25′ 57″	20151201 ～ 20160930	4579	記録 保存
所収遺跡名	種別	主な 時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
府中遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代 古代 中世	自然流路 竪穴建物・自然流路 掘立柱建物・土坑・溝 掘立柱建物・土坑・溝		弥生土器、須恵器、 土師器、黒色土器、 瓦器、石器、鉄器等		古墳時代前期後半 ～中期初頭の竪穴 建物、平安時代の 掘立柱建物	
要 約	A・B・C区では中世の粘土取りと考えられる土坑や溝、古墳時代前期後半～中期初頭の竪穴建物を検出。D・E区では平安時代の複数の掘立柱建物や土坑、溝等からなる集落域を検出。							

大阪府埋蔵文化財調査報告 2017-3

府中遺跡

—都市計画道路大阪岸和田南海線街路築造事業に伴う発掘調査—

発 行 大阪府教育委員会

〒 540-8571 大阪市中央区大手前二丁目

TEL 06 - 6941 - 0351 (代表)

発行日 平成 30 年 3 月 31 日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

大阪市東成区深江南 2 丁目 6 番 8 号

